

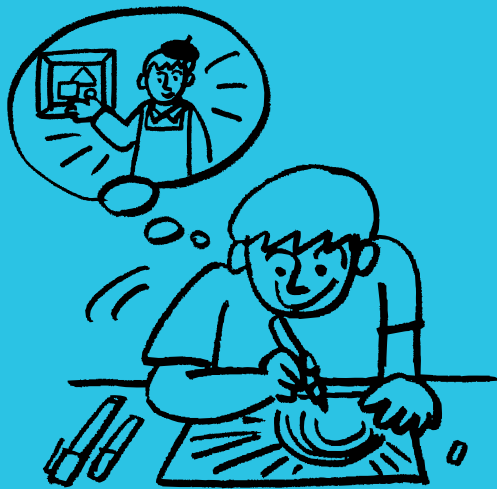
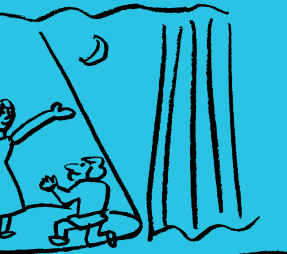


厚生労働省 令和4年度障害者芸術文化活動普及支援事業

中国・四国ブロック 障害者芸術文化活動広域支援センター

『中国・四国 Artbrut Support Center passerelle』

令和4年度 事業報告書



Passerelle Report

もくじ

- 3 はじめに
- 4 エッセイ「小さな町の音楽家から見た本事業」 北添紫光

中国・四国ブロックの各支援センターの取り組み

- 6 鳥取県 あいサポート・アートセンター
- 8 島根県 島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
- 10 広島県 広島県アートサポートセンター
- 12 徳島県 徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター
- 14 香川県 香川みんなのアート活動センター-KAGAWAMOVES
- 16 愛媛県 愛媛県障がい者アートサポートセンター
- 18 高知県 薫工ミュージアム 分室

主催事業 アート活動をはじめようとする事業所のファーストステップに伴走する企画

- 22 ファーストステップに伴走する 土谷 享
- 24 島根県 すだちクラブ
- 25 岡山県 HappyComeCome
- 26 広島県 ワークショップ西風舎
- 27 徳島県 児童デイこころ国府
- 28 香川県 みらスタ☆ティーンズ丸亀教室
- 29 愛媛県 パステルみんなの家
- 30 終了後のアンケート
- 31 座談会「ファーストステップを通して」

事例紹介～アートが変えた日常について～

- 42 エッセイ「大切なものは目には見えない」 平谷尚大
- 44 事例紹介 + 現場を巡る対談 [愛媛県、香川県、島根県]
- 56 事例紹介 + 現場を巡る対談 [鳥取県、広島県、高知県、徳島県]

- 72 その他の取り組み
- 74 エピローグ「小遣いと駄菓子屋ともうひとつ」 岡村忠弘

はじめに

中国・四国Artbrut Support Center passerelle (パスレル) が、障害者芸術文化活動普及支援事業の中国・四国ブロックの広域センターとして活動を開始して、今年度で3年目を迎えました。

昨年度と同様、令和4年度もコロナ禍という困難な状況は続きましたが、各地の支援センターの皆さんは、相談業務や企画展の準備・実施など、各地の特色のある魅力的な活動を展開してこられました。

また、今年度は、当センター主催事業として、「アート活動を始めようとする事業所のファーストステップに伴走する企画」を実施しました。この企画は、これまで興味はあったものの事業所としてアート活動を展開することを躊躇し、アート活動をはじめする方法がわからなかった事業所を対象として、当センターと協力しながら、ゼロからアーティストと事業所とのコラボレーションを企画・実施するプロジェクトです。

本企画は、打ち合わせを含め、可能な限り対面形式で企画を進めてきました。企画を通して様々な人や団体とが出会い、その出会いによって多くの体験や感情が創発されました。コロナ禍で人と人との繋がりが制限されている最中の私たちですが、企画を通して改めて、人と人とが会うことの大切さを実感することができた、そんな企画となりました。

本書が、本事業を知っていただくきっかけになるとともに、障害者の芸術文化活動普及支援の一助になれば幸いです。

中国・四国Artbrut Support Center passerelle
センター長
岡村 忠弘

小さな町の 音楽家から見た 本事業

芸術文化活動支援コーディネーター
北添紫光

今年でこの障害者芸術文化活動普及支援事業に係わるようになって三年目になる。
きっかけは、「2017 ジャパン × ナント プロジェクト」に感動したことだった。
それから年月を経て、片岡保憲氏(脳損傷友の会高知青い空 理事長)に出会い今ここに至る。

僕の肩書は芸術文化活動支援コーディネーターだが、
自分に何ができるのか少なからず不安だった。
実際やってみると猫の手も借りたいとはよく言ったもので、自分でも役に立てる時があることを知った。

高知県の小さな町で音楽を仕事に生活をしていた、
その僕が障害と向き合う人々とその芸術活動に触れるようになって、
いつも思うことがある。

それは、僕らみんなが、常に、そして永遠に
「理解できない事」を理解しようとしなければならないという事、
つまりできない事をできるようにしていかなければいけないという事。

今理解できる事の上に幾つもの土台を組み上げ、
理解すべき事に向けて新たな《橋》をかけなければならないという事、
そしてそれを何度も繰り返していかなければならないという事。
そして、今この世界にある「理解」や「できること」ではまだ《足りていない》という事を
認識しなければならないという事である。

少なくとも、僕はいつもそのことを思い知らされている。

一年目、僕らは「なんでそんなプロジェクト」で
人の意識の新天地へ橋を架けた、問題行動と呼ばれるものも、
捉え方次第で笑いやアートに変えられるきっかけが生まれるのではないかと
そしてそれによって救われる日々・日常のなにかがきっとあるということを知った。

二年目、僕らは「ビデオ・プレゼント」で障害と向き合う人々の
イマココ【今と此处】を最新のツールで発信することで、
障害と向き合う皆さんの日常を今の世界と身近に繋ごうとした。

知らないからわからない、わからないから怖い。
すべては先ず知ることから始まると信じて。

三年目、「アート活動をはじめようとする事業所のファーストステップに伴走する企画」と題して
アート活動を始めたいがその方法に苦慮する事業所の方に
そのノウハウを共有することでほぼ応募事業所のみで活動をやりきるとい
「おにぎりを渡すよりもコメの作り方を共有する」事に成功した。

支援センターの皆さんと事業所の皆さんも効果的に結びつけられたと確信している。
そして、四年目も未来に橋を架けるような計画が練られている、、、

どんどんと色んな所に新しい《橋》がかかっていく
そしてかけられた橋の上を、物珍しそうに楽しそうに人が通っていく。

その中の一人として、僕は思う。
知らないを知ってるに、分からないを分かるに、
できないをできるようにしていく事は、
日々の忙しいルーティンワークの中では大変なことだ。

しかし、それを成し遂げてつかみ取った次の段階の日常で生まれる笑顔を見てると、
たとえ限られたリソースの中の安定した日常の中にあっても
一番のリスクはやはり進歩をやめてしまうことかもしれない。

本事業に出会ってから僕自身も変わり始めている。
変わり続けることが当たり前になってきている。
それは本当に有難いことだと思います。

鳥取

支援センター名／あいサポート・アートセンター

展覧会

邑久光明園 陶芸作品展

2022.6.4(土)～2022.7.10(日)

会場:くらしアートミュージアム無心

国立ハンセン病療養所のひとつである国立療養所邑久光明園で制作された陶芸作品と書道作品、計64点を紹介する作品展。

主催:あいサポート・アートセンター

協力:国立療養所邑久光明園、長島との交流を進める倉吉市民の会

島根県障がい者アート作品展 in とっとり

2022.8.6(土)～2022.10.2(日)

会場:くらしアートミュージアム無心

島根県との連携企画として「令和3年度 島根県障がい者アート作品展 -WEB展2021-」の受賞作品展を鳥取県で開催。

主催:あいサポート・アートセンター

共催:島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ

倉吉養護学校作品展 PartII

～宇宙の惑星のように輝け～

2022.11.12(土)～2022.12.11(日)

会場:くらしアートミュージアム無心

鳥取県立倉吉養護学校の小学部から高等部までの児童・生徒が、授業や日頃の活動の中で制作した作品を展示。

主催:あいサポート・アートセンター

共催:鳥取県立倉吉養護学校

毛利 輝 作品展 19年の軌跡 ～描く向こう側に～

[本展]2023.2.4(土)～2023.3.12(日)

会場:くらしアートミュージアム無心

[巡回展]2023.3.17(金)～2023.3.21(火・祝)

会場:米子市美術館 第1展示室

聴覚障がいがある毛利輝さんが幼少期から現在に至るまでに描いた作品約40点を紹介する作品展。

主催:あいサポート・アートセンター

イベント・ワークショップ

企画展「邑久光明園 陶芸作品展」関連イベント

ギャラリーツアー

[第1回] 2022.6.12(日)

[第2回] 2022.6.25(土)

[第3回] 2022.7.10(日)

会場:くらしアートミュージアム無心

邑久光明園と交流を続けておられる三谷昇氏に作品の解説や陶芸部について等をお話しいただくギャラリーツアー。

講師:三谷 昇氏

鳥取県立倉吉養護学校ワークショップ

「プロから学ぼう」

[第1回] 2022.6.23(木)

[第2回] 2022.7.5(火)

[第3回] 2022.9.8(木)

会場:鳥取県立倉吉養護学校

学校祭での演劇発表を目標に、表現力の向上を目指した学習として、中学部の生徒が身体表現などを「鳥の劇場」のプロの役者から学ぶワークショップ。

連携機関:特定非営利活動法人 鳥の劇場

企画展「島根県障がい者アート作品展 in とっとり」関連イベント

オンラインギャラリートーク

2022.8.13(土)～配信期限なし

YouTube配信 ※アーカイブあり

撮影会場:くらしアートミュージアム無心

島根県障がい者アート作品展審査委員会審査委員長を務める福井一尊氏に、作品の解説や展覧会の見どころ等をお話しいただくギャラリートーク。

講師:福井 一尊氏(鳥取県立大学 人間文化学部 准教授)



▲ワークショップ 子どもアート感想画会

▼「毛利輝作品展 19年の軌跡～描く向こう側に～」@くらしアートミュージアム無心



▲「邑久光明園 陶芸作品展」関連イベント ギャラリーツアー



▲「島根県障がい者アート作品展 in とっとり」関連イベント オンラインギャラリートーク ※ YouTube 配信

イベント・ワークショップ

企画展「倉吉養護学校作品展 PartII ～宇宙の惑星のように輝け～」

会期中開催ワークショップ 子どもアート感想画会
2022.11.16(水)

会場:くらしアートミュージアム無心

4～5歳の園児を対象に、障がい者アートに触れてもらうことや自由に感想を述べたり表現したりすることに自信をつけてもらうことを目的として、展覧会の作品をよく見て感じたことや印象に残ったことを絵で表現するワークショップ。

アートの入り口プログラム

2023.3.4(土)

オンライン開催(zoom)

撮影会場:スイコー株式会社 本店

アート活動を支援している方やこれから新たに取り組みたい方を対象に「アート活動の入り口」をテーマにしたプログラムを実施。

テーマ:美術活動支援について

講師:岡野元房氏(モトフサ現代美術館館長)

島根

支援センター名／島根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねいろ



展覧会

NPO法人ふきのとう～あすなろ アートの世界～ 2022.6.18(土)～6.26(日)

会場:ゆめタウン出雲 太陽の広場
生活介護事業所あすなろで制作されたアート作品の展示。
主催:ゆめタウン出雲
運営:島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
連携:NPO法人ふきのとう

島根県障がい者アート作品展inとっとり 2022.8.6(土)～2022.10.2(日)

会場:くらしアートミュージアム無心
令和3年度島根県障がい者アート作品展Web展2021受賞作品37点の展示と、審査委員長・福井一尊氏のオンラインギャラリートークの配信、アートグッズの販売。
主催:あいサポート・アートセンター
共催:島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
連携:島根県内の作品出展事業所・個人、島根県立大学人間文化学部准教授・福井一尊

令和4年度島根県障がい者アート作品展 2022.12.9(金)～2022.12.11(日)

会場:島根県立美術館ギャラリー
島根県内在住の障がいのある方のアート作品の展示、公開審査による支援者向けワークショップと審査、表彰式。
主催:島根県、島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
運営:島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
連携:島根県社会福祉協議会、島根県知的障害者福祉協会、(公財)しまね文化振興財団、島根県障害者社会参加推進センター、島根県立大学

令和4年度島根県障がい者アート作品展巡回展in Grantow

2023.2.3(金)～2023.2.5(日)
会場:島根県芸術文化センター「Grantow」多目的ギャラリー
令和4年度島根県障がい者アート作品展の受賞作品41点の展示と、絵付け体験のワークショップ。
主催:島根県、島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
運営:島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
連携:アトリエ・スノイロ

令和4年度島根県障がい者アート作品展巡回展 in Grantow▶



◀にぎやかな日々in松江

その他

ムーピングボードに絵付けをしてみよう

①2022.6.21(火)
会場:清風園
②2022.7.2(土)
会場:ゆうはーと
三瓶こもれびの広場木工館のワークショップ商品のムーピングボードに自由に絵付けをして、仁摩サンドミュージアムに展示する。
展示期間:2022.7.21～8.30(ゆうはーと)、2022.11.1～12.9(清風園)
主催:三瓶こもれびの広場木工館
運営:島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
連携:清風園、ゆうはーと、アトリエ・スノイロ



▲ムーピングボードに絵付けをしてみよう

障害×アート見せ方講座「伝わる展示のつくり方」 2022.10.15(土)

会場:島根県民会館 第1・2多目的ホール
福祉事業所の支援者らが展示造作にまつわる基本知識やコツを学び、模擬的な作品飾り付け・キャプション作成をワークショップで体験する。
主催・運営:島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
連携:鞆の津ミュージアム

にぎやかな日々in松江 2022.11.19(土)

会場:島根県民会館中ホール
音楽や石見神楽をだれもが安心して楽しめるバリアフリー公演。
主催:文化庁、(公財)しまね文化振興財団(島根県民会館)、島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ、「にぎやかな日々in松江」実行委員会、島根県
連携:島根県立大学人間文化学部福井ゼミ、櫻苑、わこう苑、福祉ネットだんだんネ、島根県立松江養護学校、The Tomorrow Girls、いわみ福祉会芸能クラブ

Grantowダイバーシティいわみ事業 にぎやかな日々

2023.1.15(日)
会場:益田市総合福祉センター
みんなで音を楽しむ参加自由の音楽体験、にぎやかな音楽会の鑑賞のバリアフリー公演。
主催:文化庁、(公財)しまね文化振興財団(いわみ芸術劇場)
共催:島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ
連携:ヒビノデザイン、atelier103

▼障害×見せ方講座 伝わる展示のつくり方



▼Grantowダイバーシティいわみ事業 にぎやかな日々



広島

支援センター名／広島県アートサポートセンター

展覧会	<p>助成事業「アートの巣箱」art201展覧会 2022.10.12(水)～25(火)</p> <p>会場：はつかいち・みやじま情報センター 主催：art201 後援：廿日市市・廿日市市教育委員会 助成：令和4年度広島県障害者文化芸術活動支援事業</p>
鑑賞会	<p>遠隔ロボットを使った鑑賞会inあいさぽーとアート展(広島会場) 2022.11.3(木・祝)</p> <p>会場：広島県立美術館 地下1階県民ギャラリー 主催：広島県、広島大学、広島県アートサポートセンター 協力：広島支援機器研究会</p> <p>遠隔ロボットを使った鑑賞会inあいさぽーとアート展(福山会場) 2022.12.7(水)</p> <p>会場：ふくやま美術館 ギャラリー、ホール 主催：広島県、広島大学、広島県アートサポートセンター 協力：広島支援機器研究会</p> <p>みんなで楽しむおしゃべり鑑賞会～美術館でアートを見よう～ 2023.3.25(土)</p> <p>会場：広島県立美術館 2階展示室 主催：広島県、広島大学、広島県立美術館、広島県アートサポートセンター 協力：広島支援機器研究会</p>
ワークショップ	<p>ワークショップ「おみくじアート」 2022.11.6(日)</p> <p>会場：広島市東区民文化センター 工作室 主催：広島県 運営：広島県アートサポートセンター</p>



▲遠隔ロボットを使った鑑賞会



▲遠隔ロボットを使った鑑賞会



▲ワークショップ「おみくじアート」

セミナー・座談会

<p>セミナー&座談会 やまなみ工房の日々から 2022.7.15(金)</p> <p>会場：Otis! 主催：広島県 運営：広島県アートサポートセンター</p>
<p>セミナー&座談会 ほっとスペースぼんぼんの日々から 2022.9.17(土)</p> <p>会場：佐東公民館、オンライン 主催：広島県 運営：広島県アートサポートセンター</p>
<p>セミナー&座談会 社会福祉法人若菜の日々から 2022.10.15(土)</p> <p>会場：ギャラリー若菜、オンライン 主催：広島県 運営：広島県アートサポートセンター</p>
<p>セミナー&座談会 「アートとフクシのコラボーション〜ときどきキョーイク2022〜」 2022.11.5(土)</p> <p>会場：広島県立美術館 講堂 主催：広島県 運営：広島県アートサポートセンター</p>

<p>新たな出会いセミナー「墨を使った表現について～書・書道～」 2022.11.19(土)</p> <p>会場：熊野町民会館 熊野町公民館 美術工芸室 主催：広島県 運営：広島県アートサポートセンター</p>
--

その他

<p>アート相談窓口 2022.12.6(火)</p> <p>会場：広島県立美術館 地下1階県民ギャラリー 主催：広島県アートサポートセンター</p>
<p>専門家派遣(展示方法の基本を学ぶ) 2022.6.28(火)</p> <p>会場：社会福祉法人静和会 大日学園 主催：広島県アートサポートセンター</p>
<p>専門家派遣(陶芸粘土で遊ぼう!) 2023.1.25(水)</p> <p>会場：認定NPO法人ひゅーるぼん 主催：広島県アートサポートセンター</p>
<p>専門家派遣(墨で遊ぼう!) 2023.2.18(土)</p> <p>会場：らいふスペースともある 主催：広島県アートサポートセンター</p>
<p>専門家派遣(遠隔ロボットを使った博物館見学会) 2023.3.7(火)</p> <p>会場：ふくやま草戸千軒ミュージアム(広島県立歴史博物館)／広島大学附属東雲小学校 主催：広島大学、広島県アートサポートセンター 協力：広島支援機器研究会</p>



▲専門家派遣「墨で遊ぼう!」



▲新たな出会いセミナー「墨を使った表現について」

その他

<p>表現者発掘プロジェクト 「アーティストに会いに行ってみた」 2023.3.1(水)～</p> <p>会場：広島県アートサポートセンターYouTubeチャンネル 主催：広島県アートサポートセンター</p>
<p>助成事業「アートの巣箱」art201サロン 2022.11.20(日)</p> <p>2022.12.4(日)</p> <p>2023.2.19(日)</p> <p>会場：トヨベツ廿日市店 主催：art201 助成：令和4年度広島県障害者文化芸術活動支援事業</p>
<p>助成事業「アートの巣箱」art201おでかけサロン 2023.1.22(日)</p> <p>会場：宮島交流館 主催：art201 助成：令和4年度広島県障害者文化芸術活動支援事業</p>
<p>助成事業「アートの巣箱」ART COMPLEX HIROSHIMA『かいじゅうたちのいるところ』 2023.1.6(金)～1.9(日)</p> <p>会場：JMS アステールプラザ 1Fギャラリー 主催：ART COMPLEX HIROSHIMA 協力：KAZOO 助成：令和4年度広島県障害者文化芸術活動支援事業</p>
<p>演劇公演 広場にあつまった仲間たちによる演劇公演 おきらく劇場ピロシマ ウタとナンタのさかのぼり 2023.3.4(土)～3.5(日)</p> <p>会場：JMSアステールプラザ 多目的スタジオ 主催：一般社団法人舞芸制作室無色透明 共催：認定NPO法人ひゅーるぼん 広島県アートサポートセンター</p>

徳島

支援センター名／徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

展覧会

片岡政美作品展
2022.4.30(土)～6.15(水)
会場:徳島県立障がい者交流プラザ
片岡政美氏の作品約30点を展示。

第2回全国公募Tシャツデザイン展
2022.7.8(金)～8.31(水)
会場:徳島県立障がい者交流プラザ
全国から504点の応募、優秀作品5点をTシャツにプリントし販売。

第8回「障がい者アーティストの卵」発掘展
2022.8.31(水)～9.4(日)
会場:徳島県立近代美術館ギャラリー
徳島県内の障がい者が制作したアート作品115点の展示。
【第8回「障がい者アーティストの卵」発掘展受賞作品巡回展】2022.9.17(土)～11.27(日)
会場:徳島県立障がい者交流プラザ、四国大学交流プラザ、徳島県立総合福祉センター
受賞作品7点を、県内3か所で展示。

この素晴らしき世界 希望の園作品展
2023.2.10日(金)～26(日)
会場:徳島県立近代美術館
「特定非営利活動法人希望の園」(三重県松阪市)で制作された作品、61点を展示及びゲストークと学芸員による展示解説。

みんなのはっぴょうかい
2023.3.22(水)
会場:徳島県立二十一世紀館イベントホール
演奏、歌唱、ダンス、パフォーマンスなど11グループの発表、YouTubeでのライブ配信。



▲マスキングテープでクリスマス

ワークショップ

**「絵本のひみつ
—愛を届ける仕掛けとしての絵本—」**
2022.10.28(金)
会場:徳島県立二十一世紀館イベントホール
絵本の読み合い活動を行い、絵本の仕掛けについて解説。
講師:鳴門教育大学教授 余郷裕次 氏

「マスキングテープでクリスマス」
2022.11.13(日)
会場:徳島県立障がい者交流プラザ
マスキングテープを使ったクリスマス飾りを制作しながら、作品制作の技法を学ぶ。
講師:徳島大学准教授 田中 佳 氏
共催:徳島大学人と地域共創センター
協力:徳島大学ホスピタルアートクラブ

**「療法的音楽活動を体験する」
—職場で音楽活動を実践するために—**
2022.11.26(土)
会場:ふれあい健康館
楽しみながら療法的音楽活動を経験し、施設でも実践できるよう学ぶ。
講師:
徳島文理大学准教授 井村幸子氏、
徳島文理大学講師 千葉さやか氏
協力:徳島文理大学音楽学部音楽療法コース

「陶芸の基本を学ぼう」
2022.12.13(火)、2023.1.17(火)
会場:田村陶芸展示館
土練から、電動ろくろを使った成形、絵付けまでを学ぶ。
講師:大谷焼元山窯十代目 田村栄一郎氏

「タングラム」ワークショップ
2023.1.22(日)
会場:徳島県立障がい者交流プラザ
視覚障がい者を対象とした「タングラム」を楽しむワークショップ。
共催:視聴覚支援センター、鳴門教育大学数学研究会、徳島県立近代美術館

その他

訪問調査
2022.5～7
施設・特別支援学校・個人を訪問し、芸術活動の現状等について調査。

作品販売
2022.7.～
会場:徳島県立障がい者交流プラザ プラザショップ
障がい者アーティストの作品販売。

企画委員会の開催
2022.9.12(月)
会場:徳島県立障がい者交流プラザ
センターの諸行事について企画委員に説明すると共に意見を求める。

ホームページ・SNSなどによる情報発信
徳島県障がい者芸術・文化活動支援センターホームページ・Instagram
主催の行事や募集内容について、また県内外のイベント情報の発信。

相談記録簿の作成
創作活動についてや、情報提供、発表などに関する相談を随時受付。

プラザギャラリー貸出業務
会場:徳島県立障がい者交流プラザ プラザギャラリー
プラザギャラリーの貸出調整、放課後等デイサービス、障害者支援施設等の作品展。



▲陶芸の基本を学ぼう



▲片岡政美作品展



▲この素晴らしき世界 希望の園作品展

▼第8回「障がい者アーティストの卵」発掘展





中国・四国ブロックの各支援センターの取り組み

香川

支援センター名／香川みんなのアート活動センター KAGAWAMOVES

展覧会

香川県障害者芸術祭2022

～キラリ☆と光る芸術祭～

2022.11.6(日)～7(月)

会場：サンポート高松

作品等を発表する場を確保することや作品等を通じて障害者理解が進むこと、また、障害者が文化芸術に取り組む契機となることなどを目的に開催。

- ・作品展(平面作品・書・立体作品・手芸)
 - ・特別支援学校と英明高等学校による大型共同作品の展示
 - ・Tシャツアート展
 - ・ステージイベント(聴者とろう者人形劇団である「デフ・パペットシアター・ひとみ」によるファミリー人形劇、バンド演奏、ダンス、さをり織りファッションショー)
 - ・障害者施設等で制作したパンや小物等の販売
 - ・さをり織りワークショップ・さをり織り反物展示
- ※支援センターは、実行委員会委員として参加

香川県障害者芸術祭2022

～キラリ☆と光る芸術祭～ 巡回展

①2022.11.16(水)～11.26(土)

会場：大西・アオイ記念館

②2022.11.29(火)～12.24(土)

会場：香川県立ミュージアム

香川県障害者芸術祭2022作品展で展示した作品の一部を展示。

(平面作品・大型共同作品・さをり織り反物・Tシャツアート作品の展示)



▲障害者芸術祭2022～キラリ☆と光る芸術祭～巡回展

コンサート

ブルース・ヒューバナー尺八コンサート

2022.10.25(火)

会場：あゆみ園、ミルキーウェイ

ブルース・ヒューバナー氏による日本の伝統楽器の「尺八」の音楽や音色を楽しむ鑑賞会。



◀障害者芸術祭2022～キラリ☆と光る芸術祭～



▲障害者芸術祭2022～キラリ☆と光る芸術祭～

その他

アートボランティア養成講座

2022.8.6(土)

会場：かがわ総合リハビリテーション福祉センター
障害者の文化芸術活動に関する講座の実施。

※支援センターは、実行委員会委員として参加。

相談事業

2022.4.1(金)～2023.3.31(金)

文化芸術活動に関する相談を随時受付。

訪問調査

①2022.6.13(月)

会場：ほのぼのワークハウス

②2022.7.15(金)

会場：さをり織り工房【咲く屋】

2つの施設を訪問し、文化芸術の活動状況を聞き取り。

文化芸術活動の発表の場の調査

2022.7.1(金)～2023.2.28(火)

作品の展示場所の調査。

県内の作家とその支援者の調査

2022.9.1(木)～2022.10.14(金)

香川県障害者芸術祭に作品を応募した制作者とその支援者に対し活動状況等に関するアンケートを実施。

運営委員会の開催

①2022.4.25(月)

オンライン開催

②2022.9.21(木)

書面開催

③2023.3.16(木)

会場：香川県社会総合センター
支援センターの活動状況の報告等。

情報発信

2022.4.1(金)～2023.3.31(金)

県内外のイベント情報等をホームページを通じて発信。



▲愛顔ひろがる えひめの障がい者アート展



▲芸術文化活動を支援する人材の育成



▲障がい者芸術文化活動外部指導者派遣事業

令和4年度芸術文化活動を支援する人材の育成

2022.11.25(金)・26(土)

会場:愛媛県美術館

作品展示研修

令和4年度障がい者芸術文化活動外部指導者派遣事業

2022.9～2023.2

会場:各事業所、愛媛県身体障がい者福祉センター(個人)

舞台分野:4団体(うち2団体は合同実施)

美術分野:1団体、個人(4者、合同実施)



▲愛顔ひろがる えひめの舞台芸術 ワークショップ



▲愛顔ひろがる えひめの舞台芸術 成果発表会

令和4年度芸術文化活動を支援する人材の育成

2023.1.24(火)

会場:愛媛県身体障がい者福祉センター

三浦友美氏講演会「アートにまつわる権利のきほん」

2022.8.30(火)に実施予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため、2023.1.24(火)に延期して実施した。

令和4年度芸術文化活動を支援する人材の育成

・西予市立図書交流館 まなびあん(西予市)

2022.9.14(水) 中止

・愛媛県身体障がい者福祉センター(松山市)

2022.9.27(火)

・古民家交流スペースDANDANBASE(今治市)

2022.10.5(水)

ひたみつる氏ワークショップ

みんなで考えよう「魅力的なモノづくり」

県内、南予地域・中予地域・東予地域の3か所で、ワークショップを計画した。新型コロナウイルス感染拡大のため、南予地域のワークショップは中止した。

令和4年度障がい者芸術文化祭

～愛顔ひろがる えひめの舞台芸術～

オーディション:2022.7.16(土)、7.23(土)

ワークショップ:2022.8.6(土)～12.23(金)の期間内に29回開催

成果発表会リハーサル:2022.12.24(土)

成果発表会 ハートフルミュージカル「みんなだーいすき」:2022.12.25(日)午前・午後2回公演

会場:[ワークショップ]愛媛県身体障がい者福祉センター/[成果発表会]IYO夢みらい館

委託事業者:有限会社中村ファミリーセンター、にーな企画

対象:障がいの有無にかかわらず、県内在住の舞台芸術に関心のある方々が参加。

令和4年度商品化支援事業

障がい者アートデザインコンペ

参加者選考:2022.6.18(土)

参加者説明会:2022.6.28(火)

ワークショップ:2022.7.12(火)

プレゼンテーション:2022.8.23(火)

表彰式及び商品化事業成果報告会:2023.1.27(金)

会場:愛媛県身体障がい者福祉センター

障がいのある方とデザイナーがチームを組み、企業の課題に対しワークショップでアイデアを創出。各企業に採用されたデザインは、各企業により製造・販売されている。

【協賛企業】

牛乳パック部門:四国乳業株式会社

タオル部門:今治タオル工業組合/大磯タオル株式会社、コンテックス株式会社

その他

その他

その他

その他

その他

その他

その他

その他

その他

令和4年度障がい者芸術文化祭

～愛顔ひろがる えひめの障がい者アート展～

会場:愛媛県美術館 他

2022.12.1(木)～11(日)

[入賞作品巡回展]

・IYO夢みらい館(伊予市)

2022.12.17(土)～25(日)

・あかがねミュージアム(新居浜市)

2023.1.14(土)～26(木)

・テクスポート今治(今治市)

2023.1.28(土)～2.1(水)

・西予市役所(西予市)

2023.2.3(金)～9(木)

・八幡浜市立図書館(八幡浜市)

2023.2.11(土)～19(日)

・愛媛県身体障がい者福祉センター(松山市)

2023.2.22(水)～3.9(木)

募集内容:平面作品:(絵画(油彩、水彩、貼り絵、版画、デザインなど)、書(毛筆))、

立体作品:陶芸、その他(彫刻、工芸、手芸)など

※今年度、巡回展会場を5会場から6会場に増やした。

愛媛

支援センター名/愛媛県障がい者アートサポートセンター

展覧会

中国・四国ブロックの各支援センターの取り組み

高知

支援センター名／薬工ミュージアム分室

イベント

ナントナティックオンラインウエイトリフティング大会
2022.6.25(土)
会場:Uプロジェクト
「はじまりの美術館」(福島県猪苗代町)にて開催された展覧会「日常をととのえる」展に「ぬか つくるとこ」より出展された「軽いバーベルを重そうに持ち上げる競技=ナントナティックウエイトリフティング」。この競技のオンライン大会に参加するための高知会場を設置。持ち上げるバーベルをつかったUプロミッションのメンバー、会場となったUプロジェクトのメンバーだけでなく、一般参加者も募り、みんなで楽しく軽いバーベルを重そうに持ち上げた。
イベント主催:はじまりの美術館/ぬか つくるとこ
高知会場運営:薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵
協力:一般社団法人 Uプロジェクト/高知演劇ネットワーク演会/ヨシダワークス

障害者の文化芸術創造拠点形成プロジェクト
DANCE DRAMA「Breakthrough Journey」
2022.10.1(土)/10.2(日)
会場:東京芸術劇場 プレイハウス
国内外の振付家、プロのダンサー、障害のあるダンサーが協働し創作したダンス公演の再演に高知拠点として参加。再演ながら新しくクリエイションが重ねられ、青森、東京、大阪、広島、鳥根、高知、沖縄、シンガポール、マレーシアから約90名のダンサーが参加した。
主催:文化庁/独立行政法人日本芸術文化振興会
主催・実施主体:国際障害者交流センター ビッグ・アイ
連携:大阪府
共催:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場/フェニーチェ堺
協力:ダンススタジオ ONEMOVE/SOCIAL WORKEERZ/公益財団法人 しまね文化振興財団/薬工ミュージアム 分室/NPO 蛸蔵/DANCE CREAM/Normalization Dance crew LIBERTY/M☆Stars/林靖嵐聴障舞蹈団/城市當代舞蹈團/香港展能藝術會/DUA SPACE DANCE THEATRE/ART.DIS(Singapore)/一般財団法人日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS/特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク/CINEMA Chupki TABATA(シネマ・チュブキ・タバタ)/ホテルメトロポリタン



▲身体表現と舞台芸術の可能性を探るワークショップ

「内部感覚から生まれる身体(からだ)の動きを知って、表現につなげてみよう」



▲舞台芸術関係者のための舞台芸術鑑賞サービス ショーケース&フォーラム

2022 in 高知研修の様子

イベント

第2回薬工アンパン アートバザール
2022.11.5(土)-11.7(月) 会場下見&相談会
11.18(金)-11.25(金) 展示設営期間
11.29(火)-12.11(日) 作品販売期間
12.11(日) 全員飛び入りパフォーマンス投げ銭ライブ/売
る人・観る人・買う人での交流会
12.12(月) 作品撤収日
12.13(火)-12.25(日) 作品受け取り期間
会場:薬工ミュージアム/蛸蔵
「アートだ!」と思う作品なら、誰でも販売することができるアートバザール。今回は、事前の会場下見や相談機会を設け、また、パフォーマンスができるように企画実施した。
主催:薬工ミュージアム、NPO 蛸蔵
共催:アートセンター画楽

舞台芸術関係者のための舞台芸術鑑賞サービス
ショーケース&フォーラム2022 in 高知
2022.11.26(土) 鑑賞支援サービス体験&トークディス
カッション「地域で考えるインクルーシブシアター」
11.27(日) 研修 第1部「だれもが参加できる環境づくり
を考える」第2部「鑑賞支援サービスをデザインする」
会場:蛸蔵
2日間のプログラムで構成。多言語字幕やアニメーション字幕、遠隔音声ガイドなど鑑賞支援サービス付きの短編演劇作品を鑑賞し、インクルーシブシアターを実現していくための課題と可能性について参加者と一緒に考えるトークディスカッションを1日目に実施。舞台芸術における鑑賞支援サービスを具体的に学ぶ研修会を2日目に実施した。
主催:文化庁/一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構(JDPA)
共催:薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵
後援:公益社団法人全国公立文化施設協会
協力:NPO法人シニア演劇ネットワーク(舞台ナビLAMP)/株式会社 Beautiful Ones/株式会社リアライズ
文化庁委託事業「令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業」

ワークショップ

身体表現と舞台芸術の可能性を探るワークショップ
「内部感覚から生まれる身体(からだ)の動きを知って、表現につなげてみよう」
2023.1.21(土)/1.22(日)/1.28(土)/1.29(日)/2.4(土)/2.5(日)/2.18(土)/2.19(日)
会場:ダンススクリーム
感情や他者との関係性によって刻一刻と変化する身体の状態や動きを感じ、知るワークショップ。参加者は、いろいろな動きを試みたり身近なものを使ったりして身体の変化に自覚的になり、その変化を体験した。最後の2回はこれまでに行なった動きをいくつか抜粋して構成し、それに合わせて音楽家の大村太一郎氏に演奏をしていただき、最後の1回は公開パフォーマンスの時間をつくり、一般の方にも見学していただいた。
主催:薬工ミュージアム・NPO 蛸蔵
講師:小倉卓浩 演奏:大村太一郎
公開パフォーマンス:2023.2.19(日)15:30~(20分程度)

▼第2回薬工アンパン アートバザール





▲市民参加演劇公演「花咲く港」にて使用した字幕タブレット

その他

**ナントナティックウエイトリフティング
バーベルづくり**
2022.6.8(水)／6.22(水)
場所:Uプロミッション
ナントナティックオンラインウエイトリフティング大会で使用する軽いバーベルづくり。マスキングテープやノリがついた折り紙を切ったものなどをバーベルのパーツにベタベタ貼り、カラフルなバーベルを2個つくった。
主催:薬工ミュージアム・NPO蛸蔵
協力:一般社団法人Uプロジェクト

社会福祉法人一条協会 わかふじ寮 職員研修
2022.7.28(木)
会場:障害者支援施設 わかふじ寮
創作活動を施設内でよりよく行っていくための研修講師として相応しい方を紹介してもらえないかという相談を受け、研修内容提案やコーディネートを行った。
主催:社会福祉法人一条協会 わかふじ寮
企画・コーディネート:薬工ミュージアム・NPO蛸蔵
講師:山下完和 ファシリテーション:松本志帆子

**中村特別支援学校文化クラブ発表「中特新喜劇」
演技指導**
2022.11.1(火)／11.8(火)／2023.1.31(火)／2.6(月)
会場:中村特別支援学校
学校教員から演技指導をしてもらえる講師を紹介してもらいたいという相談を受け、講師やアシスタントのコーディネートを行い、演技指導だけでなく、演劇を行う際の音響オペレーションや使用機材等に関するアドバイスも行った。

市民参加演劇公演「花咲く港」への協力
2023.2.25(土)-2.26(日)
会場:香南市夜須公民館マリンホール
ワークショップ・オーディションを経て集まった出演者たちによる演劇公演への協力。聴覚に障がいのある方からワークショップ・オーディションに参加したい旨の相談と、公演演出家から障がいのある方の参加に心配がある旨の相談を受け、サポート等を行った。また、聴覚障害者への鑑賞サポートはないかという問い合わせが主催者にあり、主催者から鑑賞サポートについて相談され、字幕が表示されるタブレット端末貸出による鑑賞サポートの提供を実施。字幕制作を行った。
主催:香南市夜須公民館
協力:薬工ミュージアム・NPO蛸蔵／(一社)高知県聴覚障害者協会／(一社)日本障害者舞台芸術協働機構／上夜須7人衆／清藤真知子／清藤禮次郎／佐々木衣織／島崎桃代／谷岡浩次郎／中田良政／松岡知佐／松本義晴／森本美穂／おっこう屋／ホームプラザ城武

その他

多様性を育む美術プロジェクト絵画ワークショップ
2023.2.28(火)
会場:障害者支援施設 わかふじ寮
7月に行なった職員研修の続編として、西村陽平氏講師による絵画ワークショップのコーディネートと、活動を継続していくためのアドバイス等を行った。
主催:文化庁／クリエイティブ・アート実行委員会／社会福祉法人一条協会 わかふじ寮
コーディネート:薬工ミュージアム・NPO蛸蔵
講師:西村陽平 ファシリテーション:松本志帆子
文化庁委託事業「令和4年度障害者等による文化芸術活動推進事業」

多言語字幕タブレット勉強会
2023.3.16(木)／3.17(金)／3.19(日)
会場:薬工ミュージアム
「舞台芸術鑑賞サービス ショーケース&フォーラム2022 in 高知」で体験して学び、市民参加演劇公演「花咲く港」で鑑賞サポートとして提供した多言語字幕タブレットの勉強会。字幕の元となるテキスト入力やフォント数、画面輝度の調整、字幕オベを体験するなどタブレットを実際に使いながら勉強した。
主催:薬工ミュージアム
協力:(一社)日本障害者舞台芸術協働機構

「アーティストとアート・インクルージョンの表現者」2022 への協力
2023.3.21(火)-26(日)
場所:こくみん共済coopホール／スペース・ゼロ ギャラリー・展示室
プロのアーティストと障がいのある表現者の作品を並列での展示やコラボ制作を行い、ユニークで独創性の高い障がいのある表現者の魅力的な作品を広く公開し創造的な場の創出とアートによる社会包摂(ソーシャルインクルージョン)の概念の普及と障がい者の社会参加の促進を目指した展示企画への協力。高知県内の作家出展に協力した。
主催:文化庁／一般社団法人MMIX Lab(媒体融合Lab)
共催:スペース・ゼロ
協力:一般社団法人アート・インクルージョン

その他

作家・作品調査
2022.4.18(月)／5.7(土)／5.13(金)／5.14(土)／6.11(土)／7.16(土)／8.7(日)／8.25(木)／9.2(金)／9.9(金)／9.11(日)／9.21(水)／9.24(土)／10.3(月)／10.4(火)／10.19(水)／12.9(金)／2023.3.10(金)
場所:作家自宅、もりたうつわ製作所、東京都渋谷公園通りギャラリー、ギャラリーナユタ、高松市美術館、高知県立県民文化ホール、森美術館、大宮高島屋、高知県立美術館、フジ須崎店、すさきまちかどギャラリーなど
作家・作品の調査。県内在住もしくは出身の方や県内を拠点に活動する施設等を主な対象として行った。

情報収集
2022.4.2(土)／5.15(日)／6.5(日)／6.6(月)／7.17(日)／8.2(火)／8.12(金)／8.14(日)／9.8(木)／9.12(月)／9.17(土)／9.23(金)／10.7(金)／10.9(日)／10.22(土)／10.27(木)／11.4(金)／2023.3.5(日)／3.21(火・祝)
場所:蛸蔵、須崎市日曜日、オーテピア高知図書館、奈義町立文化センター、高知県立県民文化ホール、国立民族学博物館、フェニーチェ堺、東京都立現代美術館、神戸アートヴィレッジセンター、佐川町立桜座、オーテピア高知声と点字の図書館、すさきまちかどギャラリー、赤れんが商家など
障がいのある方の文化芸術活動に関する情報収集。県内での情報収集を主として行った。

自ら決断して何かを始めようとするときに、伴走してくれる人は近くに居ますか？実はなかなか居ないのではないでしょうか。自ら決断して一歩を踏み出すことは重要な事だと理解はしつつ、二の足を踏んでいる人は多いのではないでしょうか。この企画は「アート事業を始めたいけど手のつけ方がわからないという事業所って多いよね」という気づきから構想しました。事業所の数だけ、または事業の数だけ、一歩を踏み出すことへの障壁の種類があるはずだ、と、画一的に手法を投下するのではなく伴走する必要性を軸にして形にしました。何か新しいことを始める、何か新しいものを作る、これは大変なことだし面倒なことです。そして最初の一步で、この大変さや面倒を最初から避けることのほうが現実的ではありません。皆さんの周りには、面倒を避けたい人もいるでしょうし、新しいことに取り組むことを望まない人もいます。だからといってファーストステップをしないという事には繋がりません。踏み出そうとする人と踏みとどまろうとする人だけで世の中が構成されているわけではありませんが、様々な考え方や特性の人が社会を構成している中で喧々譁々もみくちゃになりながら生きていくことでしか獲得できないヒトらしい喜びを、アート活動は担保してくれるはずです。そして今回、それぞれ大変で面倒なプロセスを歩んだアート活動に取り組まれた各事業所からは次のステップに向けた動きが既にあることを伺いました。私はその第一歩の近くに居れたことが何よりも嬉しいです。

さて3月2日に、今年度ご参加いただいた6つの事業所の皆さんを一同に会ってオンライン座談会をおこないました。応募の動機、アーティストの選考から連絡、下準備から実行、その後の変化までをご報告いただきました。当企画ではファーストステップへ伴走する目的の他に、ファーストステップの事例を収集するというのも目的として掲げております。それぞれの事業所がどのようにして最初の一步を踏み出したのか、また、どの様な課題を内包しているのか、座談会の様子も含めて当報告書へ掲載しておりますので、アート活動を始めようとしている事業所の皆様にはぜひ参考にしていただければ幸いです。

最後に今年度の企画へ応募いただいた皆様、また採択のちに短い期間で濃密かつ豊かな企画を実行いただいた各事業所の皆様、講師の皆様、ありがとうございました。また、応募の呼びかけと選考にご協力いただいた中国・四国ブロックの各支援センターの皆様ならびに各県ご担当の皆様、ありがとうございました。おかげさまで沢山の笑顔に出会うことができました。この笑顔を糧に、ファーストステップの輪をどんどん広げていきましょう！

ファーストステップに伴走する

土谷 亨 芸術文化活動支援コーディネーター（美術）

令和4年度障害者芸術文化活動普及支援事業
中国・四国 Artbrut Support Center passerelle 主催事業

アート活動をはじめようとする事業所のファーストステップに伴走する企画

パスレルが事業所へのアーティスト派遣のお手伝いをします！

本プロジェクトは、障がいのある方およびその方々に関わる事業所とアーティストとのコラボレーションによる創作活動の「体験」スポットを当て、これまでアート活動に関わったことのない事業所や障害のある方にアート活動を体験する機会を持つべくことを目的としたプロジェクトです。また、単に事業所に対してアーティストを派遣するのではなく、派遣するアーティストの選考、体験する内容を含め、当センターと連携しながら探索するプロセスを体験していただくことを、事業所や障害のある方が事業終了後も継続してアート活動を行っていくことができるようになることを目的としています。

募集期間：2022年8月1日 月 ~ 8月31日 水

パスレル passerelle
中国・四国 Artbrut Support Center

アート活動をはじめようとする事業所へのファーストステップに伴走する企画

報告書

中国・四国 Artbrut Support Center

中国・四国 Artbrut Support Center

報告書

中国・四国 Artbrut Support Center

主催事業 「アート活動をはじめようとする事業所のファーストステップに伴走する企画」

企画概要

支援センターを対象に実施したアンケートにおいて、「中国・四国ブロック内で連携を取るとしたら、一体どのような部分での連携を望みますか？」との質問に対して、全ての支援センターが「福祉・芸術分野の人脈づくり」と回答しました。その結果を受けて、広域センター・パスレルとして協議を重ねた結果、支援センター、福祉分野、芸術分野における新たなネットワークづくりを主目的として本企画は誕生しました。

本企画は、障害のある方およびその方々に関わる事業所とアーティストとのコラボレーションによる創作活動の『体験』にスポットを当て、これまでアート活動に関わったことのない事業所や障害のある方にアート活動を体験する機会を持っていただくことを目的としたプロジェクトです。

また、派遣するアーティストの人選、体験する内容を含め、当センターと連携しながら探索するプロセスを経験していただくことで、事業所や障害のある方が事業終了後も継続してアート活動を行っていくことができるようになることを目指しています。

実施対象

以下に挙げるいずれかに該当する団体等とする。
就労移行支援事業所、就労継続支援 A 型、B 型事業所、
共同生活援助事業所、放課後等デイサービス、
福祉型障害児入所施設、医療型障害者入所施設

活動内容

- 手順書に沿って当センターと連携しながら、アーティストとどのような活動を体験するか（美術分野・舞台芸術分野、他）、派遣依頼するアーティストの選定、訪問支援日および体験内容の計画を行う。
- 計画を元に、アーティスト派遣による活動の体験（1回）を実施する。体験終了後、必要書類を提出する。

活動場所

原則として、普段活動の拠点としている場所での活動とする。

募集団体数

各県1団体

応募の動機

きっかけは、弊所に送られてきた案内状でした。長期休業時の活動で子供たちに普段できない体験してほしいと思ったことと、子供たちの才能を引き出す活動を提供したいと思ったからです。身体を動かしたり工作が得意な子が多いため、その才能が発揮させる、活動を通して実は本人や支援者も分からなかった一面を知ることができるのではないかと期待を込めて応募しました。

招聘作家と実施内容

島根県出雲市在住の画家、穴戸純先生です。現在は、高等学校の美術講師と絵画教室をされています。油絵具を使った作品を制作されています。

ワークショップでは、油絵具を使用して今年の干支「うさぎ」を描きました。穴戸先生は今まで児童クラブや中学校でサポートをされた経験があり、事前打ち合わせでこちらの要望を直ぐ理解してくださりました。

当日は、1つ1つの工程やポイントなど、紙に書き視覚提示しながら説明していただけたため、子供たちにとって分かりやすく取り組みやすかったと思います。油絵具やキャンバスは予算に合わせて先生が注文してくださり、失敗を気にする子供もいるため、失敗が目立たないように事前にキャンバスに薄く色を塗ってくださっていました。うさぎの見本も何枚か用意していただけており、子供たちが描きたいうさぎを選び、キャンバスにカーボン紙で写し、色を塗っていく作業をしました。色塗りのポイントも事前に説明があり、3色までなら混ぜてもOKと決めて塗りました。



実施しての感想

子供たちも初めて油絵具を使用し、職員も油絵具を使用した経験がなく、新鮮でした。朝の会で絵を描くことを説明した際は、「やりたくない」「やだな」と自信なげな発言が聞かれましたが、事前の約束で、「このアート活動は失敗はないこと」「失敗したと思ったら、手伝ってくださいと言えばよいこと」を伝えました。こだわりや失敗を気にする子供もいたため、職員は固唾をのんで見守っていましたが、みんなそれぞれ最後までやりきることができ大成功だったと思います。とても良い経験ができたと思います。

参加者の様子

描き始めると、自分の世界に入り込み集中して取り組んでいました。色の使い方や混ぜ色、塗り方など独特なタッチも見られ、大人がみるとヒヤヒヤする描き方も完成すると味のある絵に仕上がっていてとても良かったです。見学に来られた方や職員からその都度、「いいね」と褒めてもらっていたので、最後まで一人で頑張ることができたと思います。保護者の方からも好評で、ぜひまたアート活動を企画してもらいたいと要望もありました。また、保護者の方が完成した作品を見て、「すごいね」「いいね」と子供を褒めておられたので、「やって良かった」と思えたのではないかと思います。

今後の展望

保護者の方のリクエストもあり、長期休業時に、アート活動を検討しているところです。切り絵アートやバルーンアート、消しゴムはんこなど色々なことに挑戦し、子供たちが将来アーティストとして活動できることを期待しながら様々な活動を提供していきたいと考えています。



参加者の様子

とても喜ぶ人もいれば、興味ないから休むという人がいるなど色々でした。しかし、参加している人はとても楽しそうにしていました。自分の作品を作る喜びに触れることができた貴重な体験だったと感じています。

今後の展望

絵本作家になるための方の為に始めた事でもあり、その人の支援に繋がる事から始めて行こうと思います。

今は、何をするか？よりも、その人のためになにかができるか？を模索しており、SNSや制作活動、技術向上、精神的な補助などから思っています。

その人が個展を開くレベルになる時に、グッズを作ってみたりも考えています。独り立ちできるように支援していこうと思います。

ほかの利用者も少しずつ巻き込んで行こうと思います。



応募の動機

利用者の中に絵本作家になることを目指して日々制作活動に励んでいる方がいます。その方の支援をするなかで、事業所で作業する事だけが作業では無い、ということに気づかされました。それから、他の事業所でのアート活動などに目を向けたりするようになり、応募するきっかけになりました。

招聘作家と実施内容

笠井伸二さんというオイルペイントアーティストと一緒に、ハンドバックに絵を描きました。手順としては下記の通りです。

- 1ベースになる色を決めてべた塗りする。
- 2下絵を書く。
- 3好きな色を塗っていく。
- 4仕上げにニス塗布

実施しての感想

アーティストを呼ぶために調べる事からはじめ、謝礼金の相場、交通費の事、知りえない事を沢山学ぶことができました。

他の事業所がどんなことをしているのか？参考事例など沢山の情報提供をいただけたこととても勉強になりました。今後も相談させていただきたいと思いました。

岡山 Happy Come Come

岡山県笠岡市／多機能事業所





実施しての感想

今まで行事の主催をしたことがなかったのですが、主催をすることの大変さが分かりました。今回は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、大勢に周知したり、時間を長く取ったりすることが叶わなかったのですが、それでもできる限りのことができたと思います。実際にワーカーやお客さん、三浦さんや小学生の反応を直に見ながら反省する点や評価できる点、改善したいところなど多くの発見がありました。また、近隣の公民館長から「次はうちでもしてみませんか？」と嬉しいご提案もいただき、次につなげることができるのではないかと期待しています。

参加者の様子

ワーカー自身にとっても、三浦さんとの交流が大変貴重な経験となったようです。三浦さんの性格の明るさから、三浦さんの障がいの捉え方に感銘を受け(目が見えないことを言い訳にしていないことが凄い、など)、小学生が熱心に自分たちや三浦さんの演奏に耳を傾けていたこと、お客さんから「良かったよ」と声をかけていただいたことで安心と喜びをそれぞれが感じたようです。

今後の展望

今後も地元の方に自分たちのことや障がいの者のことを理解してもらえるような行事を行いたいと感じました。歌を披露することで誰かに聴いてもらい声をかけていただくということが、ワーカーたちにとって何よりの自信に繋がるのではないかと今回の企画で改めて感じました。

また、今回地域の方から「もう少したくさんの人に聴きにきてもらったらよかったね」という言葉や「私も聴きに行きたかった」という言葉をいただきました。実際に音楽を通して、得られる交流があったり、自身の考えが変わるきっかけになったりするということを感じてくださったようです。主催者だけの自己満足で終わるのではなく、参加者全員で作上げ、新しい発見をしたりしたりできるような行事の企画をして交流を広げていきたいと考えています。

徳島

児童デイこころ国府

徳島県徳島市／放課後等デイサービス

応募の動機

アート活動に関しては数年前から行ってきていましたが、コロナ禍で活動の狭まり感や新しいことへのチャレンジの難しさを感じていたところに本企画を拝見し、専門的な部分が少しでも理解できれば活動の幅が広がるのではないかと思います。参加させていただきました。

招聘作家と実施内容

原田たけしさん 嵯峨山高広さん
原田たけしさんと嵯峨山高広さんによる著書「ゾンビハムスターねずこ」の読み聞かせと、児童による「こころのねずこ」の作成(用意していただいた白の段ボールのねずこに色を塗って完成させる)

実施しての感想

今までは外部の催しへの参加(展覧会への出展等)が主であったので、自分たちで内容を考え、外部講師に来ていただき行うという企画に初めは戸惑いを感じました。

また、打合せ、本番と行う中で生じるズレの修正をどうしていくかも悩んだ点でした。最終的には1月に統合した事業所での活動でしたが、児童、職員ともに一体感を持って取り組むことができました。



参加者の様子

児童デイこころと児童デイこころ国府が統合してはじめての大きな行事になりましたが、児童たちは新しい内容に臆することなく、積極的に取り組むことができました。振り返りでの児童の感想でも「楽しかった。うまくできた」という声が出ていました。また、最後の片づけまで自分たちで取り組むこともできました。

今後の展望

今回の作品に関しては、未完成の部分が残っているため、支援時間内の制作の時間を活用して仕上げていく予定としています。

今後のアート活動に関しては、今回の企画で行った内容を積み上げていけるように地元の方々の情報入手や新たな作品への取り組みを行っていきたく考えています。



広島

応募の動機

新型コロナウイルスの影響で仕事の量が少なくなり、普段参加している行事も一切取りやめとなっている中で、パスレルさんから今回の事業に関するお手紙をいただきました。ワーカーが好きな歌を通して交流することで、自分や他の人の新たな一面の発見ができるのではないだろうかと思い応募しました。

招聘作家と実施内容

今回の企画のために、視覚障がいのあるピアニアーティスト三浦裕美さんに演奏の依頼をしました。

ワークショップ西風舎のある己斐の地域との交流も行いたいと思い、己斐小学校の校長先生にこの行事の趣旨をお伝えすると、己斐小学校の体育館の貸し出し、4年生の参加と歌の披露をご提案くださいました。

2月8日、体育館に地域の方も招待して会を開きました。4年生が「いのちの歌」を歌い、私たち西風舎は、詩の朗読「天国の特別な子ども」のあとに、「早春賦」「ピリブ」「被爆桜」を歌いました。三浦さんが「渚のアデリーヌ」「エリーゼのために」「となりのトトロ」「春の歌」「星に願いを」の5曲をピアノで演奏してくださいました。

私たちが普段どんな作業をしているのかということや、また三浦さんがどのようにピアノの楽譜を覚えているのか(点字譜を使うこと)などを知ってもらうことができたのではないのでしょうか。

広島県広島市／地域活動支援センター

ワークショップ西風舎



応募の動機

就職に必要な社会性を育むための活動の一環として、「みらスタ☆」では毎月「朗読劇」を開催しています。いつもは遠慮がちな子どもこの朗読劇となると、とても生き生きとした表情でセリフを読んでくれ、他の利用者さんや指導員から絶賛されとても嬉しそうです。こういった子どもたちに活躍の場を与え、もっと幅広い方に認めてもらいたいという気持ちと、逆に朗読は苦手だなと思っている子たちにも「こんな風に参加することができるんだよ」ということを知ってもらい、皆でひとつのものを作る喜びを知ってもらいたいと思い応募しました。

招聘作家と実施内容

香川短期大学子ども学科第1部学科長の安藤千秋教授においでいただきました。丸亀市にある市民活動広場マルタスにて朗読劇を開催。安藤先生には、セリフの言い方や楽器などでの音の表現方法をその場で指導していただきました。その集大成を「本番」として動画に撮り、当日の利用者の保護者向けにUPし閲覧してもらいました。

実施しての感想

読んでくれているだけで、参加してくれているだけでいいと思い、よりよくなるように指導をしたことが今まであまりなかったのですが、安藤先生が真摯に「こうした方がよくなるよ」という指導してくれたおかげで、子どもたちも真剣に、よりいい物を作ろう、という気持ちになったように感じました。



参加者の様子

安藤先生の言葉を忘れないように台本に書き込む利用者さんもあり、本番に向けて真剣さが増したように感じました。

今まで自分の出番が終わったら終わり、という利用者さんが多かったが、自分が出ていない場面でも裏方に回ってもらうことにより、皆で（子供たちにとっては長い時間だったと思いますが）ひとつのことに集中して、完成させよう、という気持ちが育まれたように思います。

今後の展望

安藤先生からも子どもたちの発表の場は多ければ多いほどいい、と言われたので、朗読劇だけでなく、それぞれの利用者さんの強みを生かした発表の場を作っていけるよう、年間計画に盛り込んでいっています。また、次回朗読劇ができるのであれば、観客をぜひ招待したいとも考えています。

また、今回ご縁があって安藤先生と繋がることのできたので、香川短期大学の生徒さんたちとも一緒になにかしていきけるのではないかと期待もあります。

愛媛

パステルみんなの家

愛媛県久万高原町／グループホーム

応募の動機

送られてきたDMを見て「これだ!」と思い応募しました。

利用者さんの中に、肩たたきを激しくする方がいて、彼は善意で行っているようでしたが、たたかれた方には激しすぎて問題になりかけており、もしかしたらストレス解消や「たたく」という行為そのものに、何らかの才が見いだせないかと思っていたのですが、予算の関係で講師を呼ぶことができていない状況でした。

今までも、県のアートサポートを利用して演劇をしたことがあったので、利用者さんたちの別の一面が開花されるきっかけを作りたいと思っていました。また、今回の趣旨である職員のスキルアップという面でも関わりたいと思い、応募しました。

招聘作家と実施内容

一般社団法人 vmc グローバルジャパン・ドラムサークルファシリテーター 横田ともこ氏 / アシスタントの方1名を招聘しました。

利用者さん20名と職員スタッフ8名+教育委員会職員1名で、町内の文化会館大ホールステージをお借りしてドラムサークルを行いました。利用者さんが準備から関わり、ドラムに触れワクワクしてもらうところから始め、後片付けも一緒にするという企画でした。

ワークショップの内容を企画するにあたり、講師の先生と何度もやり取りをし、参加者の特性などについても話し合い、イメージを作りました。当日は輪になって椅子に座り、ファシリテーターのリードのもと、ドラムを選んだり、たたき方や音の出し方を指導いただいた後、ジャンベや民族楽器、色々な音の出る楽器を使って激しいドラムを楽しみました。またハンドベルを使った静かなサークルも楽しむことができました。



実施しての感想

以前からやりたい、呼びたいと思っていた目標があったので「アーティストを探す」というステップ1の部分は飛んでしまいましたが、その後の綿密なやり取りや準備をしました。こちらのスタッフの意識付けには心砕くということがわかりました。なかなか普通の業務にプラスアルファの仕事になるので、スタッフだけでなく管理者からも大丈夫かと心配されたり、ちょっと面倒が増えたのではという反応もありました（想定内ですが）。

参加者の様子

最初は緊張している風でしたが、ファシリテーターのリードに乗って思いのほかのびのびと、楽しそうでした。

いつもは、いろんなことに不器用だったり消極的な人がとても前のめりだったり、話ができない（声の出ない人）がとてもリズム感がよく、上手だったこと。ドラムのたたき方や音、大きさなどで感情が表現されているようで新たな発見にもつながりました。見たことのない楽器への好奇心も見せ、驚いたり笑ったりするなど、心の声が聞こえてくるような時間でした。

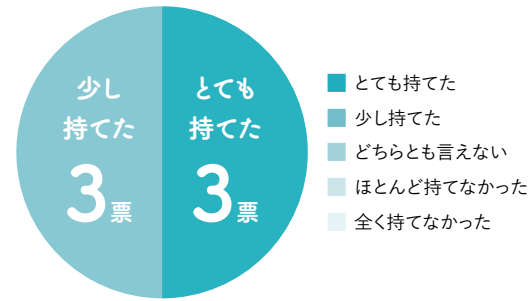
今後の展望

- ①予算の取り方、助成金、補助の受け方、探し方など、職員のスキルを上げる
- ②絵や音楽とともに、アートする時間で普段見れない（発揮できてない）利用者さんの素顔や才能がわかるような時間を作るため、アートの時間を取る
- ③ドラムサークルをしたことで分かった「そのままでもいい」「声なき声が聞こえる」「余計な手出しや口出しは不要」などが今後の支援活動に生かされるようにする。
- ④ドラムサークルの継続的な開催を目標に町の教育委員会 / 福祉行政とも相談する。ほかの事業所との連携も考える。

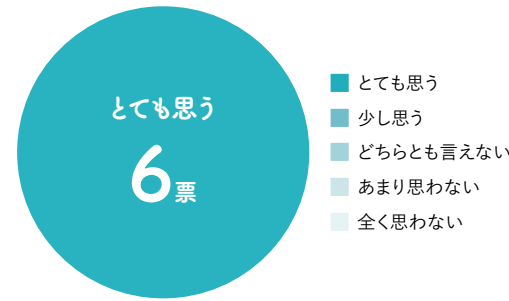
終了後アンケート

企画実施後に今回の企画を実施した全6事業所を対象にアンケートを実施しました。
アンケートの結果の一部をご紹介します。

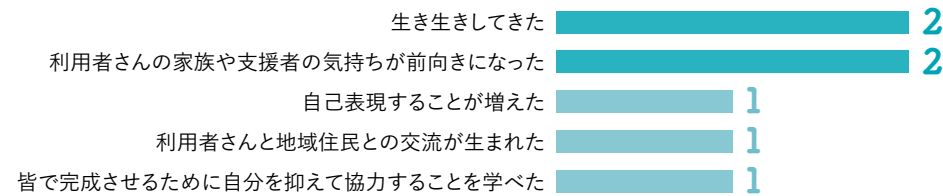
Q1. 本企画を通じて
利用さんは文化芸術活動に
興味や関心を持てましたか？



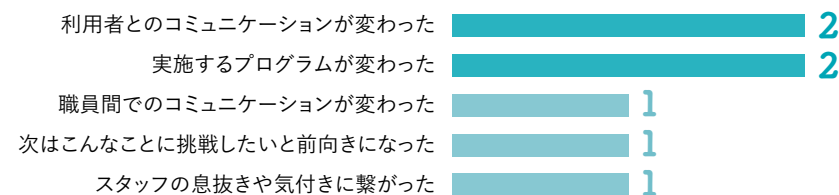
Q2. 今後も文化芸術活動に
取り組みたいと思いますか？



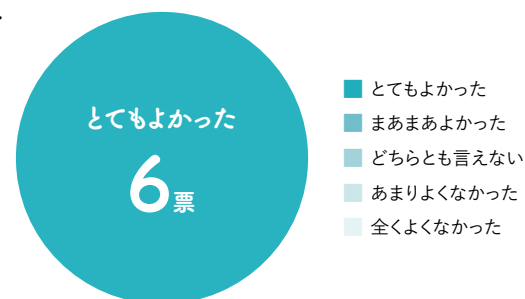
Q3. 今回の活動で利用者さんにどのような変化がありましたか？



Q4. 今回の活動で職員さんにどのような変化がありましたか？



Q5. 本企画に取り組んでみて
よかったですと思いますか？



—今日はお時間をいただき、誠にありがとうございます。また、体験記録や事後アンケートのご協力もありがとうございました。私自身が行けていない事業所もありましたので、事業所ごとの課題や利用者さんの様子など、大変興味深く読ませていただきました。

今回はこの座談会を通して、他の事業所がどんなことを実施したのか、また、悩みや工夫なども共有して、今後に繋がる“良いもの”を持って帰っていただければと思います、企画をいたしました。ざっくばらんにご報告いただけたらと思います。

それではまず、各事業所からどんな事業を行ったのか、また、講師のセレクトについても教えていただきたいと思います。「児童デイこころ」さんからお願いします。

児童デイこころ国府 私たちの事業所は児童発達支援・放課後等デイサービスの多機能として運営していますが、現在の利用者は放課後等デイサービスのみとなっています。利用児童の年齢は6歳から18歳と幅広く、様々な体験を積みながら楽しく過ごせる居場所づくりを目指しています。

今回応募時は「児童デイこころ」単独で応募しておりましたが、「児童デイこころ」と「児童デイ国府」が合併する時期になってまいまして、今回は「児童デイこころ国府」として最終参加をさせていただきました。

実施した内容は、この場所にも飾っておりますが、ねずこちゃん2体を完成させるというものです。アーティストのチョイスという部分では、私自身もどういう風にするのが良いか未知な部分があり、他の職員も含めて案を考えたのですが、最終的には「絵本が良いな」となって、原田たけし先生に決定をしました。アーティストの方からの提案がありましたので、決定してからもスムーズに進みました。

目標としては、パスレルの方から「継続だけを目標にしなくても良い」というアドバイスをいただきまして、「アーティストと会う」ということを主体にしようと切り替えました。児童デイこころは元々大きな作品づくりを行っていた事業所でしたので、今回はもうひと回り大きな作品をつくり、次回自分たちでやってみるきっかけに。また、国府は大きな作品づくりをやっていませんでしたので、そちらも今回がきっかけになればということで全体の趣旨としました。

それまで絵の具を使ったことがない子どももいましたが、学校の先生や保護者の方、パスレルの方や徳島県の支援センターさんにも参加していただいて、「みんなで色

座談会 ファーストステップを通して



児童デイこころ国府



すだちクラブ



みらスタ☆
ティーンズ
丸亀教室



ワークショップ西風舎



パステル
みんなの家



Happycomecome



を塗る」という雰囲気をつくりました。終わった後は全員絵の具だらけになる状況でしたが、子どもたちにとって創作を行うことの敷居が下がったようなイメージを持ちました。保護者の方も久々に絵の具を使ったと仰ってまして、子どもも大人も全員が楽しめたと思います。この作品は4月8日に発達障がい者支援センター主催の催しに展示をさせていただく予定です。

——はい、ありがとうございます。では、「すだちクラブ」さん、よろしく願いたします。

すだちクラブ よろしく願いたします。島根県出雲市にあります「放課後等デイサービスすだちクラブ」は小学生を対象とした事業所で、1日の定員は10名で、利用されているのは主に自閉症スペクトラム障がいの方です。その他にはダウン症の方や肢体不自由の方もいらっしゃいます。みなさん体を動かすことや、工作が好きな子どもたちばかりです。活動は小集団での活動がメインになっています。

この応募のきっかけは、送られてきた案内状です。長期休業時の活動で子どもたちに普段できない体験をしてほしいって思ったことと、子どもたちの才能を引き出す活動を提供したいと思い、応募をしました。

工作をしたり絵を描いたりすることが得意な方が多いので、今回は「美術」を選ばせていただき、出雲市在住の画家・宍戸純先生をお願いをしました。この方は、高等学校の美術の講師と絵画教室をされている方です。油絵の具を使った作品を制作されています。

当事業所で絵具を使った活動はよく行うのですが、油絵の具は子どもたちも大人も使ったことがないので、ぜひ一度体験したいという思いがありました。

今回は油絵の具を使って今年の干支のウサギを描きました。子どもたちは、最初はやったことのない活動だったので「自信がないから、やりたくない」と言っておりましたが、先生は元々こういった障がいのある方に携わったことがあり、事前に手順書やポイントを分かりやすく紙に書いて伝えてくださり、失敗しても分かりにくくするために、キャンバスの背景に予め色を塗っていただいたりもして、子どもたちは取り組みやすかったのかなと思います。

2時間程度の活動でしたが、それぞれ完成させることができました。自信になったのではないかと感じました。子どもたちは好きな色を選んでいて、ウサギといたら白いイメージがありますが、ピンクや青のウサギを完成

させた子もいて、こちらも「こういう描き方をするんだ。こういう色の使い方をするんだ」という発見を感じました。今後も美術に限らず、踊りが好きな人もいますので、またアーティストの方を探して、こういった活動を継続していきたいなと思っています。

——はい、ありがとうございます。では、「みらスタ」さん、願いたします。

みらスタ☆ティーンズ丸亀教室 はい、「みらスタ☆ティーンズ丸亀教室」は、小学校1年生から高校3年生まで幅広い年齢層の利用者さんがいる放課後等デイサービスです。

月に1回、朗読劇を開催してまして、主にジブリ作品を、みなさんすごく上手に朗読するので指導員の間でも「本当にすごいね」って褒めることがよくあるんですけども、やはりそれをもっと多くの人に見てもらいたい、活動の幅を広げたいという気持ちと、もう一つは、朗読が苦手で、声が小さくなってしまったり、集中できなくて楽しめないお子さんに、「みんなで取り組むことによって苦手なことでも楽しいんだよ」ということを実感してもらいたくて、今回応募しました。

アーティストの選定に関しては、香川県内で演劇活動をされている方の中から、香川短期大学子ども学科の学科長をされている安藤千秋先生をお願いをしました。この方は大学の生徒さんが地域の子どもたちを対象に劇を行う「子ども劇場」の総監督も務められていてまして、お話をさせてもらった際に、発達に凸凹がある子どもへの配慮や、「大きな音が苦手かもしれないから、これはこうしましょう」と先生の方から提案してくださるなど、すごく親身になってお話をしてくださりました。

朗読劇はマルタスという会場で行いました。一般の方の参加はできなかったのですが、ビデオに撮らせていただき、それをYouTubeで限定公開ということで保護者の方にご覧いただきました。

朗読をしている方もいますし、音を出したり、小道具を使って表現してくれたりする子もいました。安藤先生からも「あのセリフはもっとこうした方がいいよ」といった話をしていただきながら2時間くらい活動を行いました。

——はい、ありがとうございます。では、続きまして「ワークショップ西風舎」さん、願いたします。

ワークショップ西風舎 「ワークショップ西風舎」は、広島

県広島市西区の己斐にある、障がい者の就労支援施設です。私たちの施設には様々な障がいの方がおり、一緒に作業しながら過ごしています。

今回バスレルさんからお話をいただいて、何をしようかと考えたときに、うちでは朝と昼に歌を歌っているんですけど、好きな歌で何かできたら良いんじゃないか、音楽に関わる交流をしたいということで、ピアノアーティストの三浦裕美さんをお願いをしました。三浦さんは視覚障がいの方で、小学校や公民館など地域のさまざまな場所でピアノ活動を行っておられます。理事長とも面識がありましたので、三浦さんに直接お話をさせていただきました。

当初は三浦さんと私たちだけの交流にしようかとも思っていたのですが、近くにある小学校の校長先生にこの取り組みについてお話をしたところ、「ぜひうちの体育館を使ってください」とご提案くださいました。三浦さんはピアノ演奏を、私たちは合唱を、そして、小学校の4年生も合唱で参加してくださり、音楽での交流をすることができました。

——ありがとうございます。では、「パステルみんなの家」さん、よろしく願いたします。

パステルみんなの家 愛媛県久万高原町で、B型支援と生活介護、グループホームを運営しております。

今回の応募のきっかけは、DMをいただきまして「これはぜひ!」と思い、すぐに参加を決めました。その理由としましては、利用者さんの中にいつもお父さんの肩たたきをしている方がいまして、本人はお父さんが喜んでいっていると思っており、作業所に来てみんなの肩を叩いてしまうのですが、ものすごい勢いで叩くので、大きな音に敏感な人などが怖がってしまっている問題がありました。改善策として「太鼓を叩いたらどうだろう」という案を話していたのですが、今回この事業を活用しましてドラムサークルの講師の方をお呼びすることにしました。

講師の方の選択については、私が個人的に行っているNPO法人の活動で、この方をお呼びしてドラムサークルを開いたことがありまして、それを思い出して、今回15年ぶりに連絡を取らせていただきました。

当日は、教育委員会が町の産業文化会館の舞台を貸していただきまして、30名ほどでドラムを演奏しました。“肩たたき”の利用者さんについては、ものすごく喜んでくれましたし、自閉があってほとんど発動をしない方は、ドラムを使って会話をするように、聞いたことに

対して答えるようなことができてまして、私たちの中では驚きがありました。

後で講師の方が教えてくださったのですが、このドラムサークルというのは、元々アメリカでは心理学的なものが入っているそうで、ドラムを叩くことによって心の中のものを出す、表現する、出せなかった思いを出す、ということができるそうです。確かに、講師の方が「あの子はこういう子だね」と言われたことがあったのですが、それが当たってまして、職員もびっくりいたしました。

利用者さんもみんなすごく喜んでくれましたし、職員も続けてやりたいねという話になっているんですが、私たちの事業所でこれをどうやって継続させていくかを今考えているところです。

——ありがとうございます。

では、「Happycomecome」さん、よろしく願いたします。

Happycomecome 私たちの事業所は、岡山県笠岡市にあり、就労継続支援B型で就労移行支援を行っています。定員は20名です。事業所では農福連携でイチゴの生産活動などを行っているんですが、利用者さんの中に絵本作家を目指している精神障がいの方がおりまして、その方の支援をするにあたって、事業所の活動をするこだけが作業ではないことに気づきまして、他の事業所の活動などにも目を向けつつ、今回この事業に応募をいたしました。

そもそもアーティストを育てるということが全く分からない状態からのスタートで、手探りではいたんですが、とにかく絵を描いてもらおうというところから始めました。

絵本作家を目指している利用者さんについては、作品をコンペに出したり、SNSや個展で自ら売り込んでいくところまで支援していきたいなと思っていましたが、その人だけのためにこの事業をするのは違うかなと思うところもあり、やはりこの事業所にいるみんなのためになるようなことにもしないといけないなというところで模索しました。みんなが参加して、みんなが絵を描く楽しみを感じ、生きがいに繋がったらいいなと思って、アーティストの方を探したんですが、なかなか日程が合わなくて苦戦しました。

最終的に決まったのは笠井伸二さんというオイルペイントアーティストの方です。交通事故で頸椎を損傷し、車椅子で生活をされている方です。カラフルな絵を描かれるアーティストで、今回はアーティストと一緒に、カバンな

どの小物に絵を描いていくワークショップをしました。
絵を描くことに全く興味がなかった人が大多数だったんですが、やってみて楽しかったという感想が生まれたのが良かったと思います。楽しみとして継続していきたいですし、絵本作家を目指している方の小物づくりを手伝うような作業に繋げていくのも良いと考えております。

——はい、ありがとうございます。今回ご参加いただいた**全事業所さん**にひと通りご説明いただきました。**みなさんの活動報告**を聞いて、何かご意見や感じたことがあれば教えていただけますか？

児童デイこころ国府 みなさんのお話を伺っていると、アーティスト側にもともと障がい者に対するご理解があったようですが、どちらかという支援者の方から「こういう風にしていただけますか」という形をお願いをしました。参加した子どもさんには発語の少ない方や、一般的な形のコミュニケーションが取りにくい方もいました。ですので、まずはクレヨンである程度色塗りをしてから、絵具で塗っていくなど、工程をこちらで考えさせていただきます。

また、アーティストの方は「完成できるのは1体かな」とお考えだったのですが、私たちは「絶対に2体完成させますよ!」ということでやらせていただきました。実際に子ども達は完成をさせまして、職員も感動しました。

——ありがとうございます。
では、僕の方から話題提供ではないですが、いくつか質問させてもらえたらと思います。
事後アンケートにて、利用者さんと本企画について話をしましたか、という質問があったと思うんですが、半分近くの事業所が話をしたと回答されていました。一体どんな話をしたのかなというのが気になっていまして、教えていただきたいです。

ワークショップ西風舎 私たちは、理事長と意思確認を行った後、ワーカーに「こういうのがあるんですけど、やってみませんか」という話をしました。コロナ禍で行事が少なくなっていましたし、喋っちゃダメ・出かけちゃダメという制約も多かったので、おそらくワーカーとしても、他の人と関わりたいとか、何かを試してみたいという思いがあったのだと思います。すぐに「やりたいです」と答えてくれました。

「するとしたら歌がいいかなと思うんだけど」と提案すると、「うん、うん」と頷きながら聞いてくれていました。

Happycomecome 私たちは、絵本作家を目指している利用者さん本人に、アーティストさんを探すところから手伝ってもらいました。ただ、その利用者さんのためだけの事業になってしまいそうな危惧もありましたし、なかなかアポが取れない難しさもありました。

——ありがとうございます。
また違う質問ですが、事後アンケートにて、申込をされた方以外の、他の職員の方が能動的だったか受動的だったかという質問をしておりました。受動的な職員を能動的に変えていくことは、組織としては重要なと思うのですが、これについてのご意見や、こういう風にしてうちは変わっていった、ということがあれば教えていただきたいんですが。

すだちクラブ うちはみなさん能動的なんですけど、今回冬休みにこの企画を実行したので、準備期間が短すぎて常勤職員のみで決めてしまったところがあります。パートの職員さんも集めて相談できれば、もっと違うアイデアも生まれてきたのかなと感じています。

みらスタ☆ティーンズ丸亀教室 私たちは、この活動に事業所に通う全員の子どもたちを参加させてあげられないことに悩みました。
契約者が60名ぐらいいる中で当日参加するのはMAX15人。「参加できる子は良いけど、できない子はどう思うかな」というところで職員の配慮も生まれまして、事業所全体で盛り上がっていくことは難しかったかなと感じます。

ただ、多くの職員が見に来てくれ、「面白そうなことをしているね」と言ってくれたり、「関わりたい、参加したい」という気持ちはすごく伝わってきました。「みんなで一緒に」ということが事業所の形態的にも難しく、それが課題だと思っています。

児童デイこころ国府 児童デイこころはこれまでも創作活動を行っていましたが、国府は初めてでしたのでやり慣れていない職員は、前日まではどう動いて良いかを模索していました。

ただ、当日はみんなが「自分のできることをやっという!」という姿勢が生まれて、チームで取り組みました。職

員にとってもプラスに働くので、今後もこういう経験を増やしていけたら良いと感じました。

パステルみんなの家 正直に言いますと、うちの職員はおそらく、最初は乗り気ではなかったと思います。というのも、私は非常勤職員ですが、やはり常勤の職員さんたちは日頃の業務が忙しすぎる問題があります。そこへ持ってきて「またさらにやるのか!」というのが職員の本音であると思います。「それでもやりますよ!」ということを私から一生懸命言いました。

終わった後は「良かったね!またやってくれる?」という好意的な反応でしたが、「企画してくれたら、それに乗るよ。でも、私たちが企画するのはホンマ無理!」という感じですね(笑)

——(笑)
そういう職員さんが最後は「やって良かったね」と言ってくれる、っていうのは、取り組む前から予想していたんですか？

パステルみんなの家 普段とは違う人たち(アーティスト)がいることで、職員さんのレクリエーションになるんじゃないかと、私は考えていました。

というのも、職員自身が普段の作業において、すごく煮詰まってしまっている部分もあったんです。ドラムサークルはストレスを発散する面もありますので、利用者さんはもちろん、「職員の人もはっちゃけてください!」みたいな気持ちは最初からありました。

——ありがとうございます。僕はドラムサークルの方にも行かせていただいたんですけど、職員の方に受動的な雰囲気は感じなかったです。でも、裏側ではそういうこともあったんだな、っていうのがリアルだなと思います。

パステルみんなの家 アート活動そのものは楽しいと思います。でも、「企画する」「アーティストと交渉する」「段取りする」ということが日頃の業務に重なると、なかなか厳しいものがありますね。

——そうですね。ありがとうございます。
次にお聞きしたいのは、今回の活動でどのような変化があったかということです。事後アンケートで「利用者さんが生き生きしてきた」とか、「利用者さんの家族や支援者の気持ちが前向きになった」、「職員と利用者さんとの

コミュニケーションが変わった」といったコメントもあり、**僕自身は、アートは支援を変えるんだなと感じたのですが、改めてみなさんはどうお感じでしょうか？**

Happycomecome 絵本作家を目指している利用者さんは、着実に目標に進むようになってきました。自身の近くに自分が目指すところの人がいて、成果物は違うものだったとしても、やっていくことは同じなんだっていうのが見えてきたのではないかと思います。

また、うちの事業所でその人だけ制作活動をしていまして、他の利用者さんは「なんであの人だけを絵を描いているのか?あの人は何をしに来ているのか?」みたいなところがあったんですけど、その理解が変わってきたかなと実感します。「あの人はそういう仕事を目指しているんだな」「これが仕事に繋がっていくんだな」ということが、利用者さんにも職員にも見えてきました

みらスタ☆ティーンズ丸亀教室 今回参加した利用者さんの中で、普段自由活発なために「その子がうるさかった」とか、みんながその子を非難するような雰囲気があったんですけど、今回その子が大活躍してくれて、声もとっても大きいし、感情たっぷり演じてくれたんです。そのことで、みんなの中の彼に対する評価が上がったことが本当に良かったなと思っています。

また、普段おとなしい子が立候補して、「そんな役、やっちゃうの?」みたいな意外性もありましたし、後から文句を言ってきた子は「本当はもっと目立ちたかったんやろう?」という感じでしたし(笑)、私たち自身やってみて利用者さんの色々な面が分かりました。利用者も、自分自身の新たな一面に気がついたり、知らななった力に気がついたりできたのかなと思います。

すだちクラブ うち、元々絵を描くのが好きな利用者さんがいましたので、その保護者の方から「またこういった活動をしてほしい」という要望が出ましたし、本人も将来イラストレーターになりたいという、明確な目標ができたことは良かったのかなと思います。

職員の方もこういった活動をきっかけに、長期の活動について案がたくさん出てきていまして、やりたいことがたくさん増えたなと感じています。

みらスタ☆ティーンズ丸亀教室 私たちの活動では、アーティストの方が「発表の場を設けてください」ということをすごくおっしゃってくださいました。今回子どもた

ちに光が当たったことで、子どもたち自身がとても輝いていましたので、これからは発表の場をつくっていこうという機運が事業所全体に生まれています。

ワークショップ西風舎 最初は「自分たちで企画しなきゃ」とか「どうしたらいいんだろう」と、いろいろ悩んではいたのですが、アーティストの三浦さんがすごく明るく、事前にワーカーの理解を深めるためにお話をしたいとお願いをしたら、快く了承してくださいました。

視覚障がいの方が私たちの施設に来られたことはなかったのですが、例えば、白杖を勝手に横から触られると怖いよとか、信号機の音がないと赤なのか青なのかわからないよとか、三浦さんがいろいろなことを教えてください、ワーカーも私達も、視覚障がいの方への理解ができたと感じました。

また、三浦さんは、その後も西風舎に来てくださっていきまして、ワーカーとお話をしたり、一緒に仕事をしたりしながら、三浦さんご自身も私達のことを理解しようとしてくださいました。交流会だけの関係ではなく、それ以降の関係が続いてるのも、私達もワーカーもすごく嬉しいです。

それと、交流会には地域の方にも来ていただいたのですが、その方たちが帰りに「すごく良かったよ。もっといろんな人に見に来てもらったら、もっと良くなるよね」とお声掛けくださったたり、後日お菓子の差し入れをしてくださったりしまして、障がい者だからって引込むんじゃなくて、外に出ていくこと、地域の方に知ってもらう・繋がっていくことの大切さを改めて考えさせられました。

ワーカーも褒めてもらえたことが嬉しかったと、その嬉しい想いがずっと心に残っている様子で、その日だけでなく、私たち職員の思いだけで終わっていないことは励みになりました。

児童デイこころ国府 国府の事業所はこういう活動は初めてで、普段も制作はしているんですけど、やはり今回規模が違いましたし、何を書いても良い・好きな色で塗って良いというのが新しい経験として子どもたちに入りまして、その後の制作に対しても子どもたちの意識が変わったように見えます。また、重度の児童さんは今までそこまで興味を示していなかったのですが、その子が目できちんと確認して描けた姿を目の当たりにして、職員たちの中で「この子はここまでできるんだ」という気づきがありました。それからの制作では、この子に対しての支援がどんどん変わってきたように感じております。

パステルみんなの家 実は、ドラムサークルの創始者の方からファシリテーター養成講座を開催するという話を聞きまして、職員の中から1人、講座を受けに行くことになりました。

また、私は現在別の助成金を申請中で、そちらが通りましたらドラムを20台ぐらい購入することができます。私たちの町は人口7000人ぐらいの過疎の町なんですけど、私たち以外の作業所や高齢者施設、小学生などいろんな人を巻き込んで、みんなで一緒にドラムサークルができないかという大風呂敷を広げています。

利用者さんの方からも、あの日来られなかった人から「次があったら行きたいわ」と言われています。やっぱり「アート」って、私たちの作業所の中では非日常なんです。非日常が定期的に起きることで、日常の張り合いになったり、事業所へ行ったら楽しかったという経験になったり、それから他の事業所さんも仰った通り、地域に出ていくきっかけになったりしますよね。

こんな風に計画したら、次の段階にステップアップしていけるんだっていうことが私自身の中でも実感できましたので、これからどんどんチャレンジしていこうかなと考えています。

——ありがとうございます。今回ドラムサークルの経験を経て、ファシリテーターが1人生まれるかもしれないということで、本当に素晴らしい行動力だなと思いました。今回アーティストの方が現場に入ってきたことで、あるいは、利用者さんや職員さんとアーティストが関わっている中で、何か学んだことや気づいたことがあれば教えてください。

パステルみんなの家 アーティストの方ご自身も、障がい者の方たちと関わることで、スキルというか経験値みたいなものが増えると考えていらっしゃるなと感じました。障がい者の方たちの、自由なスピリットというのは、アートと相性が良いんだなと思います。だから、敷居が高いと思わずに、お互いに積極的に交流すると良いですね。

ワークショップ西風舎 私たちがお招きした三浦さんは視覚障がい者の方ですので、私たちの顔の表情や態度が伝わりにくく、すべて言葉でお伝えしなければいけませんでした。普段だったら顔だけで返事が終わってしまうところも、それでは三浦さんには伝わりませんので、

声を出しましょうねと伝えていたのでワーカーが自分の思っていることを言葉にして伝えるということに取り組めたと思います。コロナ禍のために奥へ奥へ静まっていたものが、声に出せるようになったのかなと思います。

三浦さんご自身が、私はアーティストだからと引くのではなく、私たちの中に入ろうとしてくださったスタンスも大きかったと思いますし、そういう三浦さんの姿勢を見て、私たち職員も「こう言ったら伝わるかな?こうしたらどうかな?」と、自分たちのやり方を改めるきっかけになったと思います。

みらスタ☆ティーンズ丸亀教室 私たちは、いつも同じ顔ぶれで、その子の限界といいますが、ある程度決めてかかってしまうことがどうしても多くなっていたんですが、講師という外からの風が入り、普段の私たちに比べると厳しめに指導される場面もあったのですが、それを素直にみんな聞くんだなっていう驚きがありました。

短期間でも成長していく子ども達の力を感じたのです。「理解しているから良い」というだけではなく、やはり新しい風を入れチャレンジしていくことは必要だなと思います。

——ありがとうございます。では、パスレルの土谷さん、北添さんからも質問があればお願いします。

パスレル／土谷 みなさん、今日はありがとうございます。

今回みなさんに企画していただいたプランは、大きく二つに分かれるのかなと思っています。「発表するタイプ」と「アーティストと一緒に制作するタイプ」です。

みなさんそれぞれ成功体験を積まれて、またやりたいという風な気持ちを今日確認できたんですが、今日の座談会を受けて、例えば、今回は発表を行ったけど次回はアーティストと一緒に制作してみたい、あるいは、その逆にチャレンジしてみたいと思いましたか?

すだちクラブ そうですね。私たちは今回制作だけでしたが、どこかに出展して、より多くの方に見てもらえるといいなとは思いましたし、別の企画で保護者の方にも見ていただけたらいいなと思いました。

児童デイこころ国府 うちは音楽活動なども行っておりまして、発表もやってみたいという気持ちはあります。でも、その企画を段取りしていく時間があるのかな、という

葛藤もありますね。

Happycomecome 私たちの活動は、新聞に載せてもらうことができました。また、年に一度、障がい者週間のように市内で展示物を出す機会がありますので、そういったところに今回の制作物を提示していこうかなと考えています。

それに付け加えて、企業さんのところにも展示していただけるようにしていきたいと考えています。

パステルみんなの家 体験としてはいろいろやっているんですけど、小さい事業所なので、要はどこからその予算を取って、どうやって継続していくかという点が一番のネックなんですね。職員としてそこをどうクリアしていくかを考えています。

みらスタ☆ティーンズ丸亀教室 弊社の社長より、今回の朗読劇だけに限らず、発表の機会を制作にも広げて年に1回作品展をしましょうという話をしていますので、今後は制作の取り組みにも頑張ってもらいます。

ただ、私たちの事業所でもネックになるのはやはり予算です。今回の発表ではマルタスという会場をお借りしたと言いましたが、そこは思いのほかリーズナブルでした。ですが例えば、保護者の方にも見に来ていただくとなると、広い会場が必要になります。どういった活動をするにせよ、実現可能な価格帯であることが前提となりますね。

ワークショップ西風舎 みなさんが仰ったように、やはり予算をどうするのかという問題はあります。

また、うちも作業所が狭いので、もし取り組むなら外部をお借りすることになるかと思いますが、私たちとしては地域の中で、地域の人を巻き込みながらやっていきたいという思いがあります。地域の方に来ていただくことを考えると、現実的に「発表」が優先されるのかなと思います。

パスレル／土谷 ありがとうございます。西風舎さん、例えば三浦さんと一緒に練習を積んでいくとか、セッションするといったことで、さらに利用者さんにとって「自分たちのつくったコンサートだ」という思いもひとしおになるかなと思うんですが、いかがでしょうか?

ワークショップ西風舎 そうですね。実は、今回、三浦さ

んの方から私達が歌う曲をピアノで弾いてみたいというご提案はいただいていたのですが、うちの事業所にピアノがなかったことと、その後三浦さんがお怪我をされてしまって、迷惑をかけてしまうからとおっしゃったこともあり、結果的に断念することとなりました。練習の段階から一緒にしたいという思いはお互いにありますので、次の機会には形にできると良いなと思っています。

パスレル／土谷 そうですね。それと、三浦さん以外のミュージシャンやアーティストにも声をかけることも良いかなと思います。発表の際に、もっと多様な表現が出てくるかもしれないですよ。感想になっちゃいますが(笑)すみません、ありがとうございます。

パスレル／北添 私からも少し質問を。今回、いろいろな事業所さんへ見に行かせていただきまして、とても素敵な、貴重な経験をさせていただきました。本当にもう、なんかニンマリしてしまうんですが(笑)

自分も演奏活動をしておりまして、今回皆さんからいただいたアンケートを見て、やっぱり資金面の問題には共感をしています。今の段階で資金難に対してのアプローチをお持ちの方がいらっしゃったら、お話をお聞きしたいと思うんですが。

ワークショップ西風舎 公民館の館長さんから「ぜひうちでやりませんか?」というお話をいただいたのですが、その際に費用のお話もありまして、アーティストの方へお支払いをする分には大丈夫かなとは思っています。

パスレル／北添 良いですね。助成事業と一緒にやる、って感じですよ。

——パステルみんなの家さんは、町を味方にされたんですね?町の職員の方も一名いらっちゃってましたよね。

パステルみんなの家 そうです、教育委員会の生涯学習課を巻き込みました。あの場で突然参加していただきました(笑)

——行政を巻き込んで、会場も町のを借りて費用を抑えられていたので、上手にやられているなと思いました。みなさんもぜひ参考にさせていただけたらと思います。

児童デイこころ国府 うちの場合は、徳島市と小松島市という障がい者施設が数多くある立地条件で、弊社だけで行政を巻き込むのは難しいですね。なので、ひたすら無料を探す、助成企画を探すということから始まります。「どっか乗っかれるところはないのか」というのが現実です。だから、助成金をいただくための手続きをする時間もきびしいですね。

——確かにそうですね。助成金を探すだけじゃなくて、その申請書類を作成する業務も、日々の支援と業務でやらないといけない。その時間が割けないという現実もありますね。みなさん同じ悩みですか?みらスタさんも頷いていらっしゃいますね。

みらスタ☆ティーンズ丸亀教室 子どもたちが喜ぶのであれば、保護者のみなさんも少しずつ協力していただけるんですけど、ご家庭も本当にもう、いろいろ厳しい状況ですから、そこを資金源にはできないなという気持ちもあります。クラウドファンディングや、動画をどんどん配信して儲ける?なんて話が出たこともあります(笑)ただ、そもそもボランティア頼みになるのがおかしいと思っています。こういう活動にはやはり費用が発生するのは当たり前ですからね。

すだちクラブ 私は逆に、アーティストを呼んで、こういった活動するのにどれくらいの金額が相場なのかがよく分からなくて。

アーティストにもよるかもしれないんですが、今回児童1人当たり2000円の謝礼で設定してもらいました。謝礼としては2万円程度になりましたが、これを基準にするとしたら、半分は利用者側に負担してもらう形で継続はできるのかなとは思っています。

——今回は4万以内ということで謝金を設定させていただきましたが、土谷さん、相場はあってないようなものですか?

パスレル／土谷 そうですね。はじめに「この額で」と言えば、それで受けられるかどうかアーティストが判断してくれると思いますし、オプションも提示してくれるのかなと思います。

事前の準備とかもあれば、そういった日当も考慮に入れた額を設定してあげるといいのかなと思います。

——私はアーティストではないので、すだちクラブさんの疑問がすごく分かりますね。

アーティストの方に対して事業所の現状をお話して、無理やりお願いするんじゃなくて「だけど、利用者さんたちにこういうことを提供したいんだ」と、何か一緒に協働するようなイメージでお話ができたらいいなと思います。なので、今回、アーティストの方に直接ご連絡を取っていただいたり、お値段の交渉や企画の話し合いなどにも取り組んでいただきましたが、みなさん、そういった辺りはどう感じましたか?

すだちクラブ ネットで検索したときの写真のイメージと、実際に会ったときのイメージが全然違ってまして、とても優しい雰囲気の方でほっとしました。

——そうですね。ネットなんかで写真を見ると、ちょっと冷たい印象を感じますよね。でも、実際にお話してみると、思っていたよりもハードルが低くて、「なんで今までやらなかったんだろう」と感じられるんじゃないかと思いました。児童デイこころ国府さん、いかがですか?最初、連絡してみても「一発で決まった!良かった!」と喜んでいらしゃったのを思い出しますが。

児童デイこころ国府 私たちの場合は、アーティストさんの方が「今後、障がいのある方に向けた活動を行ってきたい」とお考えの方だったのですが、これまであまり関わりがなかったようで、1回1回の打ち合わせの度に驚かれることが多かったんです。

今までは、アーティストさんがすでに決まっている、用意された企画に乗かっていましたので、それとは全く異なるやりとりで面白かったんですが、子どもたちが参加するためには微妙なすり合わせも必要で、そのやり取りは難しかったなと思います。

でも、今回、初めて SNS からアタックしたんですが、スムーズに進みましたので、他のアーティストさんにも SNS からアタックしてみようかなと考えております。

——自信を持たれたのだなというのがすごく伝わってきました。今後もどんどんアタックしてもらえたらなと思います。

では、パスレルの平谷さんから何か質問はありますか?

パスレル／平谷 今日はみなさん、ありがとうございます

す。私もアーティストではないので、みなさんと同じ支援者としての立場でいろんな活動に参加させてもらいました。活動の中で、みなさんと利用者さんとの関わり、普段の関わりの様子が垣間見えたりして、大変興味深く参加させてもらいました。

全ての事業所の取り組みが印象に残っているんですけども、中でも児童デイこころ国府さんで行ったワークショップがとても印象に残っています。

この利用者さんと職員さんが写っている写真を見ていただきたいんですが、誰が利用者さんか分からないぐらい、職員さんも一生懸命にアート活動をされていたのが印象的でした。

あと、もう一つ、最初はねずこのダンボールの上に描いていたんですが、少しずつその枠からはみ出していつて、下の新聞紙まで絵を描いていく姿が見られました。

普段の支援で考えていくと、この枠の中に描かなくちゃダメだよという風に言ってしまうがちなんですけど、児童デイこころ国府の職員さんは何も注意せずに、一緒に見守っている姿がとても印象的でした。

児童デイこころ国府さんにお聞きしたいんですが、企画の前に職員間で共有したことや、意識したことはありますか?

児童デイこころ国府 「何はともあれ楽しむぞ!」ということですね。だから、私は職員も入りなさいと言いましたし、私の頭の中では「全員巻き込むぞ!」という思いもありましたので、学校の先生だろうと保護者だろうと、みんな関係ない!みんなでつくり上げよう!と意識していました。

実際に、活動はめちゃくちゃ楽しかったです!私も絵の具だらけになりました(笑)すごく楽しくて、心地良い疲れがありました(笑)

——ありがとうございます。

今回の事業は、アーティストに来てもらうことが主目的ではなく、今までどうやったらいいか分からなかったことや、どうやって交渉するんだろうと疑問だったことを、実際に経験していただき、みなさんを後押しできたという意図がありました。

SNS からアタックしても良いじゃないかとか、謝金についても事情を説明して交渉する術みたいなものを、今回見つけていただいたんじゃないかなと思います。

予算の問題は切り離せないと思いますが、子どもたちや利用者さん、いろんな地域の方にとっても芸術文化活動というのは必要な活動ではないかと思います。それを

継続していくために、今回の事業はみなさまのお力になれたでしょうか？

パステルみんなの家 本当に1から伴走していただけたと感じています。ステップも送っていただいたので、こういう風にすれば順番に進んでいくんだということも、よく分かりました。

アーティストの方に、障がいのある方たちとどう関わっていただくか、そのやり取りなども、今回とても参考になりましたので、次回また違うアーティストを呼んで別の企画をする場合にも、このステップは使えるなと思っています。

Happycomecome 分からないことばかりで、事業所の活動にアーティストを呼ぶことすらも想定していなかったんですが、こういう企画をもとに呼び方から謝金の話なども知ることができました。

また、これを継続していくためにどうする必要があるか、しっかり考える時間も生まれました。私たちの事業所では、これを継続していくためのアート文化活動を行う委員会をつくりまして、会費を集めていく形にしていこうと考えています。これは、作業時間の中でアート活動の時間を取る際に必要な経費として、クラブ活動費を徴収していったり助成金を活用していったりするものです。

今回の事業のおかげでアート活動を継続していくための環境づくりをすることができました。参加して本当に良かったなと感じております。ありがとうございました。

ワークショップ西風舎 ワーカーのために何かをしたいという思いから参加させていただいたんですが、岡村さんをはじめとするパステルのみなさんが、事前のミーティングから当日もわざわざ高知から来てくださって、私たちとしてはすごく心強かったです。資金面だけでなく、精神的にも最初から最後までサポートしていただいたことに感謝しています。

これからどうしていくかという話も、やはりよく出ますし、ワーカーも「すごく楽しかった!またやりたい!」と言っています。今日の座談会でみなさんのお話を聞かせていただいて、いろいろなやり方や考え方に気付かされた部分も多かったですし、これからこうしたらもっと良くなるんじゃないかという発見や学びも得られました。

この機会がなければ関わりがなかった人たちも多いと思いますし、ワーカーの新たな一面への気づきもすごく増えて、何か企画をやることで、いろんなところが良い

方向に変わっていくのかもしれないと思うようになりました。本当にありがとうございました。

すだちクラブ うちの事業所は、今回初めてアーティストを呼んだのですが、アーティストを呼ぶためのステップを一つずつ丁寧に教えていただいたことで、短い期間でしたがスムーズに対応できたのかなと思います。これからはアーティストをお呼びするにあたって、その流れが掴めましたので、本当に良かったです。ありがとうございます。

みらスタ☆ティーンズ丸亀教室 みらスタは、いろんな方に講師として来ていただくことはあるんですが、本当に申し訳ないぐらい予算が厳しいもので、今回潤沢な資金をいただくことができ、私たちもストレスがなく交渉ができたと思っています。

また、パステルさんにはいろんな機材をお借りしていたんですが、当日その組み立て方や接続もテキパキとやっていただいて、来ていただかなければできなかったなと思うくらい、すごくお世話になりました。

今回教えていただいた安藤先生は、大学の教授ですので、今後は生徒さんとコラボして何かできるんじゃないかなという風にも考えています。いろいろな期待も込めながら、今後も活動していきたいです。今回は本当にありがとうございました。

児童デイこころ国府 児童デイこころと、児童デイこころ国府の合併ということで、職員はとても大変な状況でしたが、この企画で「これからも頑張ろう」ということをすごく感じさせていただけたと思っています。

当日は絵の具まみれになりながらやっていただきまして、本当にありがとうございました。子どもたちもすごく楽しめたと思いますし、またみなさんと一緒にやりたいなという楽しさを思い出させてもらえまして、それが職員全員にも伝わったかなと思います。本当にありがとうございました。

——ありがとうございました。

みなさまから、いろいろなコメントを聞かせていただいて、利用者さんだけでなく、今回関わってくださったアーティストの方に対しても、障がい特性であったりとか、障がいについての啓発活動もできたのかなと思います。また、障がい当事者の方と関わるアーティストが1人増えたのかなというところも同時に感じました。

また、中四国地方では岡山県と山口県以外には、各県に支援センターが設置されています。今後、芸術文化活動をする上で何か困ったことがあれば、各県の支援センターを頼っていただけたらと思います。もちろん、行政や私たちパステルも頼ってください。これで終わりではないと思っていますので、引き続きご相談いただけたらと思います。

それではこれにてファーストステップの座談会を終了したいと思います。みなさん、長丁場にお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

大目も切 見えない 平谷尚大

芸術文化活動支援コーディネーター

定

量目標とは、数値や数量に落とし込む目標のことをいい、定性目標とは数値化できない目指すべき状態を表す目標のことをいう。たとえば、売上を〇円増やすという目標は定量目標であり、顧客満足度を高めるという目標は定性目標である。この両者は、定量（具体的な）、定性（抽象的）という関係性にも置き換えることができる。目標を設定する際には、抽象的な定性目標の設定から始まり、具体的な定量目標へと落とし込んでいく過程を取ることが多い。そうすることによって掴み所のない理想像であったものが捉えやすくなり、数値という客観的指標によって、目標のイメージが個人によってブレる事なく統一される。

障害者芸術文化活動普及支援事業は、地域における障害者の自立と社会参加の促進を図るため、全国に障害者の芸術文化活動に関わる支援センター等の設置を行い、支援の枠組みを整備することにより、障害者の芸術文化活動（美術、演劇、音楽等）の普及を推進する事業である。本事業における「障害者の芸術文化活動の普及を推進する」という目標は、定性目標であり、抽象的目標から具体的目標へ、つまり定性目標から定量目標へと変換する必要がある。たとえば、「普及」という抽象的な概念を、認知度、来場者数、収益に分解することで、以下のような定量目標を設定することができる。

国民に対する認知度…100%

展览会への来場者数…10,000人

事業収益…1億円

これらの目標を達成することで障害者の芸術文化活動が「普及」したこととする。非常にわかりやすいロジックである。認知度50%よりも100%の方が普及したと言えるし、展览会の来場者数が千人よりも一万人の方が普及している状態にあるといえる。このように、定量指標を用いることで「普及」という抽象的で捉え難いものが、可視化され追求しやすいものになる。しかし、定量指標にばかり気を取られていると大きな過ちを犯す可能性がある。その可能性について、客観的側面と主観的側面から、現象学者の Matuana と Varela は以下のような隠喩^{*}を用いて説明している。

潜水艦の中だけで生きてきた人間の隠喩

潜水艦の中だけで生きてきた人間を想像してみよう。彼はそこから出たことがない。潜水艦の操縦の仕方は教えられている。さて、僕は岸辺に立ち、潜水艦が優美に浮上してくるのを見ているところだ。それから僕は無線を使って中にいる操縦士に呼びかける。おめでとう、あなたは暗礁を避けて、みごとに浮上しましたね。あなたは潜水艦の操縦がほんとうにおじょうずですね。潜水艦の操縦士はとまどってしまう。何ですか、その暗礁とか浮上とかって？ 私がやったのはただいくつかのレバーを押しただけを回したりして、いろいろな計器の間にある関係をつくりだしただけのことなのです。それは全部、私がよく馴れているあらかじめ決まった手続きに従っているんです。特別な操作は何もしなかったし、それになりより、あなたがたは潜水艦とかおつしやっていますね。何の冗談でしょうか…。

潜水艦の「操縦士」を、芸術文化活動に取り組む

障害のある人やその活動を側で支える支援センターの方々に、潜水艦の中だけで生きてきた人間に語りかける「僕ら」を、芸術文化活動について批評する評価者であると仮定してみよう。実際には客観的側面と主観的側面とがあり、客観的側面（操縦士の見事な操縦＝障害のある人が生み出す作品）は可視化することができるが、主観的側面（操縦士が何を考えていたか＝障害のある人の

心的な主体性、あるいは支援センターの方々がその活動をどのように支えたのか）を数値に置き換えることは難しい。

令和3年度から当センターが開催している事例検討座談会は、各県の支援センターから本事業を通してかかわりのあった事例を紹介していた。支援センター間で意見交換をする試みであり、操縦士が何を考えていたか、つまり障害のある人の心的な主体性やそれを側で支える支援センターの方々の思いに迫るために始めた取り組みのひとつである。事例検討座談会の中で語られる支援センターの方々の言葉の中には、数値や数量といった客観的指標では推し量ることのできない、本事業の「真」の成果がある。

^{*} Matuana E. Varela. 知恵の樹生きている世界はどのように生まれるのか。ちくま学芸文庫、1997。



事例紹介

アートが変えた日常について

A 愛媛県

愛媛県障がい者
アートサポートセンター

Aさんは発達障がいや軽度知的障がいを抱える23歳。高校を卒業後、職業訓練校を経て、就労継続支援A型事業所などに就労しましたが、不応を起し離職してしまうことを何度か繰り返しました。現在は精神科医の指導のもと自宅療養を続けていますが、本人は対人関係の不器用さを意識することとなり、挫折感を感じていました。

そんなときに知ったのが、愛媛県障がい者アートサポートセンターが今年から取り組み始めた舞台芸術ワークショップです。ワークショップは8月から始まっていましたが、Aさんが参加し始めたのは11月初旬。仲間とうまくなじめるかどうか不安もありましたが、仲間たちはありのままのAさんを受け入れ、舞台芸術の指導者もAさんの個性を生かした配役を考えるなどしたことで、Aさんは徐々に仲間の輪に溶け込んでいくことができました。

そして、迎えた本番である12月25日の成果発表会(ハートフルミュージカル「みんなだーいすき」)では、立派に自分の役を演じ切り、自信に満ちた素敵な笑顔を見せてくれたのです。

B 香川県

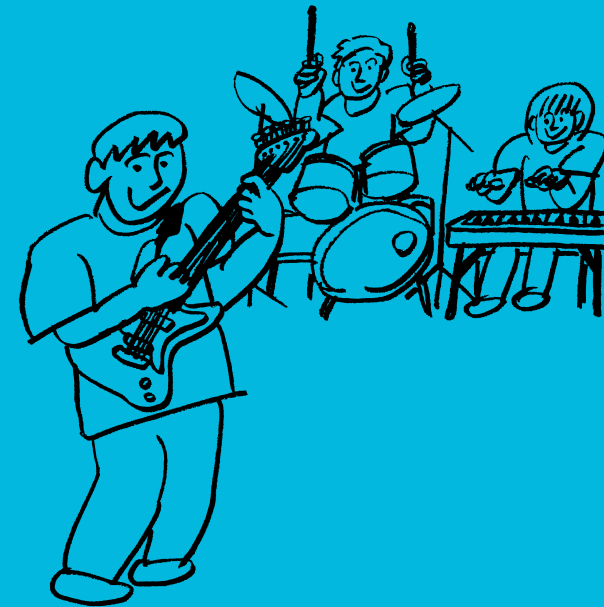
香川みんなのアート活動センター
KAGAWAMOVES

Bさんは、自分の世界や自分のパターンにこだわりを強く持っているダウン症の男性です。以前利用していた事業所では日課のスケジュールと自分の気持ちをうまく合わせることができず、廊下や玄関で一人座って過ごすことが多く見られたそうです。

また、Aさんはもともとお喋りが好きなのですが、その話題は主に過去の事や自分の好きな事に限られる傾向があり、しかも本人からの一方的なコミュニケーションであることが多い状況でした。

しかし、10年ほど前に事業所をかわり、自分の気持ちを自由に、素直に表現できる音楽活動に接するようになると、かつてのように内に籠るのではなく、他の人との関わりを保ちながら外に向けて表現ができるようになり変化を見せるようになりました。

現在では、本人とのコミュニケーションの中に音楽活動を積極的に取り入れることで、生活にリズムやメリハリを持たせることができるようになりました。今後も大好きな音楽を通して、将来に向けての希望を持ち、しっかりと目標を持った生活を送っていくことができるように取り組んでいきます。



C 島根県

島根県障がい者文化芸術活動
支援センター アートベースしまねいろ

Cさんは現在18歳。小さい頃から絵を描くことが得意で、放課後等デイサービス(以下、デイサービス)の職員さんに描きためた作品を見せたりしていました。令和4年度には島根県障がい者アート作品展へ出展。

作品は「アイドルたちのキラキラとした笑顔がまぶしい、心はずむ作品。設定は緻密で、架空のアイドル集団の少年少女がそれぞれユニット、またはソロでリリースしたCDがコラージュされている。絵も上手いが、ジャケットデザインや世界観の構築にもセンスが光る。」(しまねいろHPより)と審査員から高い評価を受け、全347点の応募作品の中から最高の金賞を受賞しました。

このことは、デイサービスの職員さんにも変化を及ぼします。デイサービスは利用者に寄り添う支援だけで良いという思い込みを抱いていましたが、一人ひとりに見合う、地域やインフォーマルなサービスとのつながりを築いていく大切さに気づいたのです。

Cさんはいま、いつか自分のアートの力で地域の案内版や路線バスのラッピングに関わって地域貢献をしたいという夢を持ちながら、地域の福祉サービス事業所で働いています。



現場を巡る対談

聞き手
岡村忠弘(中国・四国アール・ブリュットサポートセンターバスレル)



愛媛

香川

島根

宮本祥恵(愛媛県障がい者アートサポートセンター)

高橋修(香川みんなのアート活動センターKAGAWAMOVIES)

渉秀之(島根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねいろ)

愛媛県の事例

——それでは最初に、愛媛県障がい者アートサポートセンターの宮本さん、よろしくお願いします。

宮本 よろしくお願ひします。愛媛県の事例について紹介したいと思います。

愛媛県では、今年度初めて舞台芸術のワークショップに取り組みました。最初に、舞台芸術の指導をしてくれる委託業者を決めて、それから参加者を募りました。参加する方は、障害の有無、性別、年齢関係なく、舞台芸術に興味のある人ということで募りました。

最終的に22名の方からの応募があり、全29回のワークショップに取り組みました。そして、その成果の発表会として、12月25日に「IYO夢みらい館」で成果発表会を行いました。今回の事例は、そのワークショップ、成果発表会に参加していただいた方の事例です。

年齢は23歳で、発達障害と軽度知的障害のある方です。地元の私立高校を卒業後、職業訓練校を経て就労継続支援A型事業所等に就職しましたが、職場の中での人間関係が難しく、不適応を起こして離職するというのを何度か繰り返していました。その間に、精神科に入院されたりとすごく苦勞をされていたのですが、現在は事業所等には通わず精神科医の指導のもと、自宅療養を続けています。離職直後は引きこもり状態になっており、お母様からのお話ではお家の中でずっとウロウロと歩くしかない、そういった状態になっていたそうです。

そんな時、愛媛県のアートサポートセンターが舞台芸術のワークショップをしているということをSNSで知り、少し興味を示したそうです。保護者の方と色々お話をして、その中で自分から「行ってみたい」と言われたようで、最初はお父様から連絡をいただきました。ただ、その連絡があった時はすでにワークショップがかなり進んだ11月の初旬だったので、Aさんがグループに馴染めるのかなと、私たちもご本人もとても不安に感じていました。

ところが、私たちの心配をよそに参加者の方たちが本当に自然にAさんを受け入れてくださいました。また、指導者の方がAさんの個性を生かしながら、同時にそうした不安を払拭するような配役を考えてくださって、Aさんはグループに徐々に溶け込んでいきました。

その間、私たちスタッフがすべきことはAさんの気持ちにとにかく寄り添うことだと思い、Aさんの話を聞くことに徹していました。

最初の頃は、Aさんに「どうしてここに来たの?」とか「舞台芸術に興味があるの?」といった質問をすると、だいたい「今までどこに行ってもうまくいかなかった」とか「職場の

人に嫌なことを言われた」など、ネガティブな発言がすごく多かったのです。

でも、何度かワークショップを重ねるうちに、Aさんの発言が変化してきて「宮本さん、昨日のワークショップで〇〇さんにとっても失礼なことを言った気がする。そのことを家に帰ってから気に病んでしまい、すごく苦しかった」という風に言われるようになりました。じゃあ一緒に謝ろうかと提案し相手に謝ったところ、その方から「全然気にしてないよ。大丈夫だよ。」と言っていたので、とてもホッとしたことがありました。

そのような過程を見ていると、Aさんが徐々に自分自身を客観視できるようになってきて、自分の言動がどうなのか、それを上手に相手に伝えるにはどうしたらいいのかを考えられるようになってきたことがわかったんですね。舞台芸術の中で、指導者の方や参加者の方たちがそれぞれの個性や特性をそのまま受け入れて認め、それぞれの表現も全て良しとしてくれる、そういった関わり方が効果を発揮したのかなと思っています。

指導者の方たちは、一人一人が輝くものを持っており、その輝きを自分らしく表現すること、そしてお互いを認め合って、それを仲間と共に表現するということがとても大切なことだということを、言葉として伝えるのではなく、ワークショップの中のダンスやセリフなどの表現を通して伝えてくれていたんだと思いますし、参加された方々も指導者のそのような想いも受け止めていたんだと思います。

Aさんは、事後アンケートで「周りに助けていただいて楽しかった」と答えてくれました。人への感謝と前向きな言葉を書かれるようになったのは、とてもすごいことだと思っています。保護者の方も、自分から行きたいと言ってきたのは初めてのことで、続けられるとは思っていませんでした。

この舞台芸術は、12月25日の発表会では終わらずに、その後も参加された方々がお互いに交流をしたり、別の発表会や他の指導者の方が主催している発表会などにも一緒に取り組んでいこうといったふうに進んでいます。そして、みなさんが来年度もぜひ今回参加した舞台芸術に取り組みたいというふうに話されています。

今回はAさんを取り上げましたが、22名の参加者全ての方たちにドラマやストーリーがありましたし、参加された方々それぞれの自己肯定感がとても高まったというふうに感じています。今回のワークショップを通して、人がこんな風に変っていくんだとか、成長していくんだということを私自身も一緒に体験させていただいてとても学びが多かったです。

——素晴らしい取り組みですね。今回の事例であるAさん

が参加したミュージカルには、バスレルからも平谷が参加をさせていただきました。宮本さんのお話に対して、皆さんから何かご質問とかご意見はないでしょうか。

渉 Aさんが引きこもりされていたさなかにワークショップの情報を知り、途中からでも参加するという、本人を突き動かしたのはなんだったんでしょうか。ご家族だったのか、ご本人の中にもともとそのような思いがあったのか、その辺りのきっかけをちょっとお聞きしたいです。

宮本 もともと表現すること、演じること、それから歌を歌うことにはとても興味があったそうです。自分はなんでもできるんだっていう風な思いと、一方で今までいろんなことでうまくいかなかったっていう思いが、自分の中で調整できずに一歩踏み出せないでいたのだと思うのです。そんな時に今回の舞台芸術のワークショップの募集を目にして、何か自分も動きたい、やってみたい、何からだったらできるだろうみたいな感じがあったのだと思います。

そんな想いがあるのなら、お父さんやお母さんが手伝うからやってみようとのことで来られたんですけど、最初は見学から始めていただきました。それでも今年度無理だったら見学だけで済ませて、舞台の裏方の仕事とかもできるよと提案しながら、来年度からでもいいよねっていう感じから始めました。

——この指導者の方は、どういった方なんでしょうか?舞台芸術のプロというアーティストの方で、障害の特性やそういったことにはあまり精通していない方なんでしょうか。

宮本 お二人もとても障害への理解のある方でした。指導者のうちの一人は作曲家、音楽家の方で舞台の音楽を担当されたり、CMの音楽を作曲したりする方です。特別支援学校でのミュージカルの音楽を担当された経験もあり、障害のある方たちの特性についても理解のある方でした。

もう一人の方は特別支援学校教員の経験のある方です。特別支援学校の教員をしている時に、たとえば生活介護に進んでいく人たちの余暇がとっても少ないので、舞台芸術を通して自分が関わることができないかという思いがあったようです。ご自身も舞台芸術が大好きな方で、特別支援学校の教員を辞めて、現在は舞台芸術の企画をする会社を運営されている方です。

——今回の舞台芸術を通して、Aさんがネガティブな考えからポジティブな考えに変わっていったっていうこと、本当に素晴らしいと思います。その背景にあるのは、たとえば

仲間と一緒に取り組むことが良かったのか、舞台芸術自体がもたらす効果なのかっていうところを知りたいのですが、宮本さんのお考えはいかがですか？

宮本 やっぱり両方だと思います。たとえば、一人ずつの表現であればこういう風になっていなかったと思うし、舞台芸術ではなくてソーシャルスキルトレーニング(SST)の教室とかだったら、このような変化は起こらなかったのではないかと思います。Aさんが内面に持っていた好きなもの、それに同じような想いを持った仲間たちがいたから、こんな風になったのだらうと思っています。

——僕は今まで見た舞台で、障害をお持ちの方が演じる舞台を見た時に、アートの世界、絵画とかもそうなのかも知れませんが、障害のあるなしが全然分からなくなるというか、そこにほんとに平等な世界観を感じるというか。それがAさんにとっては、すごく心地よかったのかなと思います。求められていることも平等にあり、なおかつ作品もできあがっていくところがいい効果をもたらしたのかなって思ったりもします。

平谷 当日現地で鑑賞させていただきました。舞台を見せていただいて感想として思ったのが、参加された22名の方全員が本当に舞台上で輝いて見えました。クリスマスの日に開催されたイベントだったんですけども、タイトルにも『ハートフルミュージカル』とある通り、出演されている方々が一生懸命演じられている姿やストーリーを通して、心がすごく暖かくなりました。公演が終わった後の変化というか、日常の中で今回の公演での経験がどんな風に影響を与えたのかっていうのをお聞きしたいんですけどもいかがですか？

宮本 まず、Aさんについては、まだまだお仕事に対しては目が向いてはいないんですけど、本当にとても明るくなって、お家から外に出られるようになってきました。参加者の人たちとも、LINEの交換をしたりして、公演が終わった後も交流を続けているようです。時々こちらにも電話で連絡をいただいて、「元気にしてるよ」となどと声をかけていただいています。

他の方たちについては、中には別の舞台芸術のオーディションを受けに行く人が出たりとか、みんなで作文や詩、歌の歌詞などを揃えて読む『群読』という発表会に舞台を通して出会った仲間たちと一緒に参加したりと、いろいろな効果が出ています。

平谷 公演終了後、SNSなどで舞台裏の映像などが公開されていて見させてもらったのですが、皆さん本当にとて

も楽しそうで、その様子がすごく印象に残ってます。

Aさんのご家族の方は何かその後の変化であったりとか、ご家族の対応がこう変わったとか、そういったことはあったりしましたか？

宮本 Aさんのご家族に関しては、Aさんのことをありのままに認めたいと思いつながらも、うまくいかずに挫折していくAさんに歯がゆい思いもあったそうなんです。そして、周りの支援者に対する様々な忸怩たる想いみたいなものもあって、焦りの気持ちもあったようです。

また、Aさんの苦手なことの一つに「自分で予定を作る」ことがあるため、自宅療養の中で、訪問看護等以外の時間を、どう過ごさせたらよいかと、随分悩まれたそうです。規則正しい生活を送ることのできる環境はないものか、Aさんが興味を示すものは何かないか、そう模索する中で、ワークショップとの出会いがあったそうです。ご家族は、以前より一層Aさんらしさを認め、ゆっくとAさんとともに歩んでいこうと思えるようになったのではないかと思います。

他の保護者の方たちもすごくて、衣装係をされたり舞台裏もすごく手伝われたりしたんですよ。自分たちもまだまだいろんなことがやれるなおっしゃって、これからも継続して関わっていきたいとおっしゃっています。

平谷 今回事例として挙げていただいている1事例だけではなくて、他のご家族であったり、他の参加者の方々にもすごくいい影響があった、そんな公演だったんじゃないかなと思いつながら、振り返らせていただきました。

——今回の経験を通して、ご家族がゆっくりでいいんだよっていう風に変化したと思うんですが、ご家族の気持ちを変えたのは、Aさんの頑張りがあったからなのか、それとも文化芸術にその力があるのか。その辺りはどうでしょうか？

宮本 お父さんやお母さんが時々、ワークショップを見に来てくださったりしていたんですが、その中で御両親がすごいなあと思ったのは、Aさんだけを見るのではなくて他の方たちが変化していく姿であるとか、指導者の方やアートサポートセンターのスタッフとAさんとの関わりみたいなものをすごく見られてたところです。

その中での気づきみたいなものをよく御両親は話してくださいました。あんなふうに関わったらいいんですねとか、指導者の方ってすごく上手に参加者の方たちのことを褒められますよね、個性を引き出されますよね、とか。そんな中でお父さんやお母さんも色んな気づきがあったんじゃないかと思います。

——本番前のワークショップの時からご家族も参加して、作り上げていく過程と一緒に体験していったみたいなどころがあるんですね。

宮本 そうですね。お一人で来られる方ももちろんおられました。けれども、ご家族が送迎されたりワークショップにも参加したり、だんだん準備にも参加されたりという過程がありました。

土谷 さきほどのお父さんやお母さんが、支援者さんとか舞台芸術の練習に参加しているその他の父兄の方とかの関わりを見ながら、ご自身のお子さんへの関わり方への知恵やアイデアを色々と吸収していくプロセスがすごくいいなと思いました。舞台芸術って、大人数でやるしプロセスも長いので、自分だけではできないっていうところがとても重要なんだらうなと思いました。

——宮本さんありがとうございます。土谷さんも言われたように、舞台芸術を通してみんなで練習したり、作り上げていくプロセスが本当に大事なんだらうなと思っています。

高知県で開催された市民参加型の舞台芸術を先日拝見したのですが、本番だけ見てもそれぞれの演者の方のストーリーが想像できて、なんかぐっとくるものがありました。ありがとうございます。

香川県の事例

——続いて、香川みんなのアート活動センターKAGAWAMOVESの高橋さんの事例に移りたいと思います。高橋さんよろしく願いいたします。

高橋 私たちは香川県を中心にバンド活動をしておりまして、今回は障害をお持ちの方と一緒に創り上げるバンド活動を通じて、自分の気持ちがあうまく表現できるようになった事例について紹介させていただきます。

Bさんは、自分の世界や自分のパターンにすごくこだわりを持ってるダウン症の男性の方です。以前利用されていた事業所では日課のスケジュールや自分の気持ちがうまく合わず、玄関ホールで一人で座って過ごすことが多く見られていました。その後、私たちの運営する事業所に移って、だんだんと自分の気持ちも音楽を通してうまく表現できるようになり、生活全般においても様々なプラスの傾向が出てきました。

この方はおしゃべりがすごく好きなんですけど、過去のことや自分の好きなことが中心で、これまでは一方通行のお

話ばかりだったんです。私とコミュニケーションを取ってる時にも、すごく熱心にお話を聞いてたら、実は20年前のことを現在のことであるかのようにお話されるということもありました。音楽を通じて様々なコミュニケーション取っていると、次第に相手に伝わるコミュニケーションの方法を掴んでいき、いい感じになってきたかなっていうことがあります。

関わりを続けていく中で、お母様のご病気になり、また以前のように内に籠もってしまうのではないかなと、私たちも随分と懸念しました。しかし、ロックンロールっていうやつは、外に向けて気持ちを出すことができるように、内に籠もるんじゃないくて、外に出せば、もっと楽しい世界が、もっといいことが起こるっていうことにご本人も気がついてきたのだと思います。まだ完全ではないですが、現在は人と関わりながら生活していくことができてきています。

本人とのコミュニケーションの他に、バンド活動をうまく導入し、楽しみや目標を設定することにより、生活に張りをもたせることができました。演奏予定を明確にして、2ヶ月先にはどこそこでステージがあるからがんばろう!という感じで、気持ちを盛り上げていけるように関わりを続けています。目標があると、自然に体調も整えられます。いいパフォーマンスを次のステージでもできるようにということで、本人の気持ちがそっちに向いて前向きになるということが、この取り組みによってできていると思います。

これからもご本人が分かりやすい活動計画を提示し、安心して取り組んでいけるように工夫していきたいと思っています。地道なバンド活動ですけど、少しずつ、本人の気持ちに寄り添いながら進んでいけたらいいかなって思っております。

——高橋さん、ありがとうございます。この事例の方と高橋さんはいつから関わられているのですか？

高橋 実はこの方と私はずっと一緒に活動をしてまして、私が事業所を開所する時に一緒についてきてくれた方なんです。10年ぐらい前からバンド活動を一緒にするようになりました。

——昨年度の事例検討会でもバンド活動を通じて関わりがあった事例を提示していただいたと思うのですが、高橋さんが中心になってバンド活動をやられるなかで、何か気をつけていることなどはありますか？

高橋 音楽に関して、どうだからどうっていう法則みたいなものはないんですよね。本当に一緒にリズムを刻んで、一緒にビートを出してということの繰り返しです。

気を付けていることといえば、楽しい、一緒にやろうという雰囲気を作るということですね。一緒にやってるバンドメンバーみんなで、めっちゃ盛り上げるように持っていったりとか。あなたたちは自由なんですよ、ということを感じてもらえるようになっていうのは、すごく気をつけています。

言葉でうまく表現できるような、こうしたらいいっていうのがあったらいいんですけどね。バンドなんで、いわゆるこう「ぐわっ!」とくるエネルギーの中で、一緒にやってるっていうことで、これはうまく言葉では説明できないです(笑)。バンドマンであれば通じるような感覚なんですけど、うまく伝えられずすみません。

——ごめんなさい、僕はバンドマンではないので、なんか無神経な質問をしてしまったなと反省しております。

高橋 とんでもないです(笑)。どんなスタイルで参加してもいいよという雰囲気をつくることに気を配っています。

——バンド活動をしている中で『ミス』とかはないんですね？ その人が奏でる音とかにミスとか、そこでそういう音を立てないとかいうのはあるんですか。

高橋 いや、そんなことは言いません。何してくれてもオッケーです。いわゆるオリジナルの曲でロックンロールなんで、まず手本はみんなで作るんです。たとえば、誰かのコピーであれば、原曲と違うとかってなるんですけど、オリジナル曲などで自分たちで作っていきけるんですね。だから、出す音に「ミス」はないんです。

——オリジナル曲を作る過程も大切ということですね。

高橋 そうですね。歌詞にはちゃんとみんなの生活のこととか、普段喋ってることとか、そういうことを織り込んでいるんです。それに、さりげなくその人の気持ちのこととか、そういうことを盛り込みながら曲を作っています。

——オリジナル曲を作り込んでいく過程を是非見させていただきたいですね。本当に楽しそうだなと思います。

高橋 基本は「うまいね、カッコいいね」とかいう言葉を中心に声かけをしながら活動しています。そのドラムの音、素敵だねーとか。エアギターであたかも音が出るようにパフォーマンスをしている方がいるんですけど、まるで本当に弾いてように見えるんです。そんなんかっこいいねとかいうことでやっています。基本的には叩いたら音の出る打楽器を中心に、皆さんに参加してもらっています。

宮本 舞台芸術や音楽、絵画もそうだと思うのですが、自分が自分でいられてそのことを素敵だと思えたり、生きることが楽しくなったりする、そんな力が文化芸術にはあると高橋さんのお話を伺って改めて感じました。

ところでこの方は、事業所での日中活動というか、お仕事はどんなことをされていて、音楽活動が日常生活にどのように影響していったのでしょうか？

高橋 一日中、毎日音楽できてたらすごく素敵なんですけど、お仕事もしようということで、作業にも取り組まれています。週に1回、金曜日の午後からバンド活動をしています。週に向けて気持ちを毎日の仕事に持っていったらいい感じですよ。バンド活動がすごく好きなので、事業所ではあんまりでかい音で活動できないので、日曜日にスタジオを借りて練習しています。スタジオまでは自分で電車に乗って来られていますが、その好きなことがあるから電車にも乗れるようになり、途中でジュース買ったりとかいろんなことをするんですけど、まあそれもいいかなと思って、いろんなことでこう相乗効果でいい感じですよ。時々電車を乗り過ごしてどこかに行っちゃってしまったりして大騒ぎになることもあるのですが、そういうことも含め、いろんな社会経験が積めるようになって、いい効果が出てきたかなと捉えています。

宮本 ありがとうございます。愛媛県でも、事業所の中で一日中、アートを中心に活動している事業所っていうのは、本当に少ないんですよ。日中はそういう風に作業をしたり、いろんなお仕事をやっていう方がほとんどです。今年特別支援学校を卒業する方の数名の保護者の方から「もうアート展とかには作品を出せないよ」「A型の事業所に行くようになるから、絵とかは描けない」という風に言われたんですよ。でも、できることをアートサポートセンターとしてお手伝いしなきゃいけないと思うし、その芸術活動がどれだけその人たちの糧になっていて、その人の生きる力になっていくかっていうふうなことを大事に捉えて、引き続き関わっていきなと思ってます。とっても参考になりました。ありがとうございます。

平谷 高橋さんが挙げていただいた昨年度の事例もそうだったんですが、高橋さんの関わってる方はとても楽しそうで、すごくその雰囲気がお話の中から伝わってくるなと思いました。

なかなかないとは思いますが、たとえばその音楽をしていくことによってこう何かネガティブな影響みたいなのはあったりするんですか？高橋さんは恐らく、一見ネガティブな変化自体もプラスに捉えて関わられていると思うんですけども。生活の中で起こるネガティブな影響という

か、そういったことがあったりするのかなと思って。

高橋 そうですね。音楽＝ネガティブというのがちょっと想像できないんです。私は何事もすごくプラスに考えるようにしてて。

平谷 たとえば、打楽器では『叩く』という動きをするので、その叩くという動きが楽しくなって、たとえばその対象が人に向いてしまったりとか、そんなことないですよ。

高橋 あります。乗りすぎて隣の人に当たったりとかね、やっぱりあるんですよ。そういうことはあるんですけど、「叩くのは楽器にしようね」といつも声掛けをしています。やっぱり、始めたばかりの人って、わーっと乗ってきた気持ちをうまく表現できなくて、隣の人をごちんとやっちゃったりとか、そういうことはやっぱりあるんです。

そういう時は、叩くのは楽器にしようとお伝えして、叩いてしまった後はみんなで謝ろうとかいうことで謝ったりとか。それは、普段の生活の中でも、仕事の中でもやっぱり起こることなので。そういう場面があった場合は、すぐにごめんなさいということで、あの音楽をびたっと止めて謝って、で、また場面転換してまたやっついこうっていうことで。そういったことを繰り返していくと、だんだんうまく関われるようになってくる。そういった方もいますので、また来年度の事例でご紹介できればと思っています。

平谷 高橋さんの運営している事業所であれば、そういう変化もプラスに捉えて関わっていったらいいなと思ったので、ちょっと聞かせてもらいました。ありがとうございます。

——この方は、このバンド活動を通して、誰かと関わるように変化はしたのですか？

高橋 もともと一方的に話をするのは好きな方で、恐らく本人は関わってるつもりだったと思うんですけど、関わってなかったんですよ。一緒に活動をしているなかで、自分以外の誰かと共通の話題を持てるようになったので、共通の話題を通してコミュニケーションが取れるようになってきました。これまでは過去の話で現在のことであるかのようにお話されていて、周りの方も困惑する場面が多かったのですが、現在はまさに今生きているこの世界の中での出来事について話ができるようになったので、自分以外の誰かと関わる場面は大幅に増えました。

——音楽という共通のコミュニケーションツールを得たっていうことですかね。私たちが運営している事業所でも、たと

えば、独語のある方がいらっしゃるんですが、最初はその独語が雑音に聞こえたり、周りの利用者さんからすると「うるさいな」とか、作業に集中できないっていう音に聞こえていたのが、徐々に雑音ではなくて、その声が聞こえなくなると寂しいなみたいな雰囲気になったり、その声がアートの変わったりそういった仕組みを作るのが、僕はアートの力ではないかと思ったりしています。一言で問題行動と言ってしまうようなのかもしれないですけど、その問題行動すらもアートにできるみたいなところが、障害者芸術文化のすごい面白いところだなと思っています。

私たちの運営する事業所に通われている利用者さんのその独語は、延々アニメのアフレコしてるんですけども、そのアフレコがみんなを“くすっ”と笑わす瞬間があったりするんです。それによってみんなが和む雰囲気ができたりして、僕はなんか助けられてるなって思うところがあって。

毎回思いますが、高橋さんのお話って、本当に楽しいなと思います。今年度も高橋さんの口から、生の『ロックンロール』という言葉も聞かせていただけて本当に嬉しく思っています。僕はロックってかっこいいなとか、なんかそういうイメージがあって、それに対してやっぱり純粋に利用者さんに対してもかっこいいねとか、素敵だねっていう言葉かけられる大切さっていうのを教えてもらったなと思っています。

土谷 高橋さんの事例はなんかドキュメンタリー映画みたいな感じで素敵な事例だなと思います。中間支援者でありながら、高橋さん自身も表現者で、直接ロックを通じた場を作ってるっていうのは、すごくいいなと思いました。

宮本さんからも別の事業所に行くときにアート活動が続かなくなってしまうっていうお話があったと思いますが、高橋さんの事業所に通われている方が、他の事業所に移動されたり、バンドのメンバーが変わったりすることがあるのか、ちょっとその辺のことをお伺いできるかと思いました。

高橋 私たちの事業所から他に行く人はあまりいません。ずっといてくれるので嬉しいなと思っています。

実は、日曜日のバンドの話さきほど少しさせてもらったんですけど、その日曜日のバンドは、私たちの事業所に通われている方以外の人も来れるようにと、市民サークルみたいな形で活動しています。ですので、いろんな事業所の方でロック好き、音楽好きの方が来てくれるんです。事業所は始まってから10年ぐらい経つのですが、バンド活動は始めてからもう20年ぐらい経っています。活動を続けていく中で法人格を取ったら事業所を持つことができるっていうことを、神奈川県のカササギテープのかしわさんという方からお聞きして、事業所をスタートしました。

しかし、事業所だけに限定したら活動が続かない。事業所でそれぞれ特色を持って活動するというのは、すごく素晴らしいことなんですけど、やっぱりこのその枠を超えて継続することができたらいいなと思って、市民サークルと言う形でも私の方は活動させていただいております。

全部で20人ぐらいのバンドなんですけど、中でも時々、音楽がちよっと合わないとか様々な理由で抜ける人もいます。市民サークルなのでバンドメンバーへの出入りも比較的ゆるく、自由に出入りができるようにしています。そういったある意味での緩さが、アートの継続のために必要なことなのかなって思ってやっております。

土谷 やっぱり事業としてやる時には、アートが持っているコミュニティの緩やかな繋がりという部分はなかなか担保できないという課題があると思うんですよね。それで、そういう中でやる活動って本当の本当にアートなのかっていう、ロックしてんのかっていう部分もあると思うんです。高橋さんが今伝えてくださった市民サークルとしての日曜日の活動は、やっぱりその気持ちの部分を担当する上で、非常に重要な活動なんだろうなっていうのがすごく理解できました。ちなみに、どれぐらいの頻度でコンサートをやってるんですか？

高橋 コンサートはですね、基本呼ばれる機会があったらっていうことで活動しているのと、年に1回ホールを借りて大きなコンサートを神奈川県のサルサガムテープをゲストに迎えて開催しています。香川県内にもたくさん仲間がいるので、その仲間のバンドを招いてコンサートを開いています。

土谷 やっぱり他の地域にもそういった仲間がいるっていうことも、励みになるって感じますか。

高橋 そうですね。香川県だけでなく、徳島県のバンドも出てくれてたりもしています。皆様がよかったら、うちの県のこのバンドもかっこいいよとかっていう情報をまた寄せていただいたら、コンサートに足を運びますので、またいろんな情報を教えていただけたらと思います。

土谷 ぜひぜひ。ありがとうございます。

島根県の事例

——では最後になります。アートベースしまねいろの**渉さん**の事例に移ります。渉さんよろしく願いいたします。

渉 Cさんは18歳の方で、放課後等デイサービスを利用されています。小さい頃から絵を書くことが得意で、放課後等デイサービスを利用し始めた頃から、職員さんに描き溜めた作品を見せたりしていたようです。放課後等デイサービスの職員さんから、しまねいろに相談がありまして、Cさんが学校を卒業するにあたっての進路について、絵を描く仕事にも就きたいという気持ちも強いということで、一度Cさんの絵を見たり、話を聞いてもらえないだろうかということで伺いました。

その際に、実際に絵を描いて収入を得ることのできる福祉サービス事業所の情報も調べて、いくつかの事業所について説明させていただきました。Cさんが生活してる地域の周辺にはそのような事業所はないが、100キロぐらい離れた島根県東部の松江市や出雲市には、作業として絵を描くことのできる福祉サービス事業所があるということも説明しました。

それと同時に、焦る必要はないんじゃないかなろうかという意見交換もさせてもらいました。たくさん描き溜めていた作品をたくさんの人に見てもらいたいという気持ちもあったので、今年度の島根県障がい者アート作品展へ出展してみることはいかがですか、ということを提案しました。

今年度の作品展には347点の応募があり、Cさんの作品は最高の金賞を受賞されました。実際の審査員の好評として「アイドルたちのキラキラとした笑顔がまぶしい、心はずむ作品。設定は緻密で、架空のアイドル集団「ONE STAR CHILD」所属の少年少女がそれぞれユニット、またはソロでリリースしたCD がカラージュされている。絵も上手いが、ジャケットデザインや世界観の構築にもセンスが光る。」という評価を受けました。

この作品がうまれた背景には、不登校であった時に、『モーニング娘』の楽曲を久しぶりに聞いたところ、深い歌詞の内容や、メンバーの加入から卒業まで、その歴史の変遷などに非常に衝撃を受けて心を振寄せたということがあったようです。そして、Cさんが表現できる絵の中で、育成して活躍できる架空のアイドル集団「ONE STAR CHILD」を誕生させていきます。その表現力、その感性が今回の応募作品の中でも一際目立って、見る人にとってはアート性を感じる作品となりました。

取り組み内容ですが、島根県障がい者アート作品展の事業では、島根県立美術館での展示、その後、しまねいろのホームページ上で、受賞作品をweb掲載したり、Cさんがお住まいの島根県西部地区の島根県芸術文化センターグラントワ巡回展を開催するなど、3～4か月かけてずっと展示されていきます。今回は巡回展用のチラシやポスターのメイン画像としても使用しましたし、巡回展の会期中には、地元ケーブルテレビの取材や新聞社による本人取材もあったり

と、作品や私たちの活動について県民の方々に広く知っていただく機会となりました。その過程の中で、ご本人にとってもますます絵を描きたい気持ちが強くなっていきました。

今回の出来事を通して、放課後等デイサービスの職員の方々にも、変化をもたらしました。通常、利用者の進路は、学校と保護者の方が関わることで、放課後等デイサービスの職員さんは進路のことは特に触れないという形です。ずっときたんですけども、ひとりひとりの個性に合う地域や、インフォーマルなサービスとの繋がりを築いていくことも大切ではないかということに気づきました。

今回、思い切ってアート作品展に応募したわけですが、事業所の考えとすれば別にアート展にまで出さなくてもいいんじゃないか、目の前の福祉サービスに集中すればいいんじゃないかという空気感だったそうです。ですが、今回アート作品展に応募したことをきっかけに、しまねいろとも繋がることもできまし、卒業後もCさんと関わるできるようになりました。

Cさんは卒業後も地域の福祉サービス事業所で働くことを基本としながら、好きな絵を描くことの両立を図りたいという思いです。そして、いつかその自分のアートの力で地域の案内板であったり、路線バスのラッピングにも関わって、地域貢献をしたいという想いを語っておられました。引き続きCさんの成長を見守っていきたいと考えています。

——ありがとうございました。お話を聞いていてすごいと思ったのは、放課後等デイサービスの職員さんたちが最初は「アート活動なんてなくていいんじゃないかとか、自分のところの福祉サービスだけに集中しての方がいいんじゃないか」といった、アート活動に対して比較的ネガティブな考えだったのが、この方の作品や受賞を契機に変わったということ、すなわちアート活動が支援のスタイルを変えたというところがすごいなと思いました。

今年度、パスレルで実施した『アート活動を始めようとする事業所のファーストステップに伴走する企画』で事業の後にアンケートを取ったのですが、たった一度のアーティストの方とのセッションであっても、皆さんのアンケートを見ると利用者さんとのコミュニケーションが支援者間では変わったことがわかったんですね。何が影響したのかわからないですが、アート活動によって支援が変わるということがすごいなと思います。

渉さん、率直に感じていることをお聞かせ願えたらなと思います。この方の支援を行う放課後等デイサービスの方々を変えた力はいったい何だったのだと思われますか？

渉 そうですね。放課後等デイサービスでCさんを担当し

ていたサービス管理責任者の方は女性なんですけど、その方が今回はキーマンだったのかなと思っています。Cさんがたくさん描いてくる絵をしっかりと受け止めて、きちんとCさんに対して向き合っていたというのがずっと根底にあって、そのうえでCさんの作品をもっとたくさんの人に見せたいという想いもきちんと受け止めて、じゃあ、支援センターであるしまねいろに相談しようという風に行動を起こしてくれたことが大きかったと思います。

——支援センターと繋がってからも渉さんが間に入って、**展覧会に出展するまでの経過にも支援センターとして携わったってことですかね。**

渉 そうですね。初めて訪問した時、たくさんの絵を私にも見せてくれました。その絵を見て、まずはそのしまねいろとしても、公式Instagramで発信してみましようかと提案したら、Cさんも非常に喜んでくれました。その後、アート展にも応募されてもいいじゃないですか？と投げかけたら、放課後等デイサービスの職員さんが応募の手続きや出展作業についても支援してくれたようです。

——**島根県に支援センターがなかったらCさんの作品は世に出なかったかもしれないし、サービス管理責任者の方が電話して相談してみようとも思わなかったかもしれないですよ。特に支援センター未設置の県の関係者の方には、こういう事例があるんだよ、ということ**をぜひ知っていただきたいなと思いました。

宮本 今年度の愛媛県のアート展には350点ぐらいの出展があったのですが、実はその中で特選に選ばれた方も、初めてアート展に出展した方でした。特別支援学校を卒業したあとに企業に就職されている方で、普段は清掃のお仕事をされているのですが、絵はやっぱり好きだったんですね。

好きな絵を発表する機会を全然持っていなくて、たまたまアート展の協賛企業になっている会社が、特例子会社の従業員に作品を出品してみないかとみんなに言ってくれたのです。その中の一人が特選に選ばれた彼だったのです。ほんとにもうその方もびっくりですけど、会社もびっくりで。それからどんどん広がっていったんです。今、特選の絵を大きく印刷した膜アート作品がセンターの外に飾ってあるのですが、そういう風な協力会社が出てきたり、今度、協賛企業になっている会社が自分たち独自で障害者アートのコンテストをして、再生紙で障害者アートカレンダーを作るという話になってきたりどんどん広がっていった事例があります。

今お話を聞いていて、支援センターがひとつひとつの事例を細かく拾い上げていって、アートの好きな人たちに発表の場とか、創作の場を提供できるようにしていかなきゃいけないと改めて思いました。

——障害当事者の方が、発表の機会を得て作品展に出展し受賞することによって、その作品や人にスポットライトが当たるといのは、すごいことだなと思います。たとえば、B型事業所であればそれを元に商品開発をして、開発した商品が売れたり。先日のブロック研修会でお話をいただいた福岡県のNPO法人まるさんが運営する事業所もそうなんですけど、アートで生計を立てている事業所とかもたくさんあると思います。これはケースによって変わってくると思いますが、たとえば、障害をお持ちのご本人はただ絵を描くことが好きだったとか、その世界に没頭してただけなのに、そこに売れる作品とか、この人の作品は価値があるとかっていう世界に引きずりこまれているような感じがして。売れる作品を作らないといけないとかっていう、比較する世界に引きずり込まれるみたいなものって、しんどい世界に誘ってるのは僕らじゃないのかなと思ったりもします。自問自答していますが、なかなか答えは出ません。僕自身は答えが出ていないんですけど、皆さんそれに対して何かご意見はありませんか。

渉 私も引き続き、Cさんは一年に一度とか状況を追っていかうと思うんですけど、Cさんに限らず、こういう風にスポットライトが当たって周辺の関係者が反応されて、じゃあ二次利用製品を作ろうとか色々発想が浮かんでいくわけですが、個人的にはご本人さんの思いとか考えを大事にしたいなと思っています。

たとえば、二次利用製品を作ろうという企画を本人に説明した時に、本人がやってみたいと言えばやる、やりたくないと言えばやらないという風に、あくまでも本人の気持ちを中心に行くのがいいのかなと思っています。

それで仮にそのご本人さんがすごいヒット商品を生んで、また次の期待される仕事に来て、という風になっていったとしても、ご本人さんの中で色々価値観とか、考え方とか、葛藤をしながらご本人なりに答えを出していくのかなと。それに対して寄り添いたいなと、そんな風に感じてます。

——僕らが答えを見つけることでもなくて、当事者の方が答えを見つけるまで渉さんみたいに寄り添っていく、伴走していくっていうことが重要なのかなって気付かされました。中国・四国ブロックでも以前、鳥取県の支援センターのピアンカさんがお話ししてくれたように、アートで生計を立てていこうと考えたら逆にしんどいよとか、楽しく描いている時にそれが仕事になった瞬間にしんどくなるよっていう言葉を契機とし

て僕自身もこのテーマについて色々考えるようになってきました。

ある意味でしんどい世界を体験することも必要で、そういった時に私たちは渉さんのおっしゃるように伴走することが重要なんだなって思っています。高橋さんはいかがですか？

高橋 今は音楽が中心ですが、美術や舞台などについても今勉強をしているところです。今は支援センターとして発表の機会を作りたいなということで、来年度はホームページを利用して、デジタルの展示空間を構築して発表の機会を確保していこうと考えています。

——宮本さんいかがでしょうか？

宮本 渉さんが言われたように、その人がどうしたいか、どう生きたいかということを中心にしなければいけないと思うし、それを実現できるように取り組んでいきたいと思っています。さきほど紹介した特選に選ばれた方も、僕は絵を描くことも好きだけれども、Youtubeの中で活躍したいんですけども言われていて、じゃあ、それのお手伝いは何ができかなと、今少しずつ話しているところです。

アート活動を生業にするっていうのはすごく難しい。でも、それは障害あるなしに関わらずですよ。画家で生きていく、音楽家で生きていく、それで生計を立てるっていうのは本当に難しいことだと思うので、それは難しい問題だけれども、ご本人や、そのご家族の生き方として、どうしていききたいのかっていうところと向き合って調整しながら進めていかなきゃいけないなと思っています。

渉 実は、今回事例をまとめるにあたって、Cさんとサービス管理責任者の方にお会いして改めて取材をさせていただきました。その中で今回僕が一番びっくりしたのが、Cさんから自分の絵を書くことを通して地域貢献をしたいと発言されたことなんです。この取材に行かなければ本人から聞けなかった言葉なので、行って取材して改めて聞けることもあるんだなと思って。

——僕も18歳の時にはそんな地域貢献なんてことは全く思っていなかったです。なので、本当に素晴らしいなと思っています。ありがとうございました。

事例紹介

Dさん

鳥取県

あいサポート・アートセンター

Dさんは細さの異なる3本の黒いペンを
使い、主に動物や植物などの生き物をモチ
ーフとした絵画作品を制作している、知的
障がいがある15歳の男性です。

保育園の頃から絵を描くことが大好き
で、小学一年生から絵画教室へ通うよう
になりました。中学に上がる時期に半年ほど
絵が描けない時期もありましたが、先生や
母親の励ましを受けるなかで「ペン画」とい
う方法にたどりつき、スランプを抜け出した
そうです。

今でもDさんはご飯を食べる時間や眠る
時間を除く一日のほとんど絵を描いて過ご
していて、「僕には絵しかない。この生活を
ずっと続けていくために画家になりたい。誰
かに喜んでもらえるような作品をつくって
いきたい」とまで語ります。

Dさんは公募展にも積極的に応募してい
て、将来の個展開催はもちろん、ライブパ
フォーマンスに取り組んでみたいと思っ
ているなど、自分自身の活動を知ってもら
うことにとても意欲的です。

活動費の工面は大きな課題ですが、絵を
描くことやそれに関する出来事が創作意欲
をさらに高めることにつながり、日々の楽し
さや生きがいにつながっています。



広島県

広島県アートサポートセンター

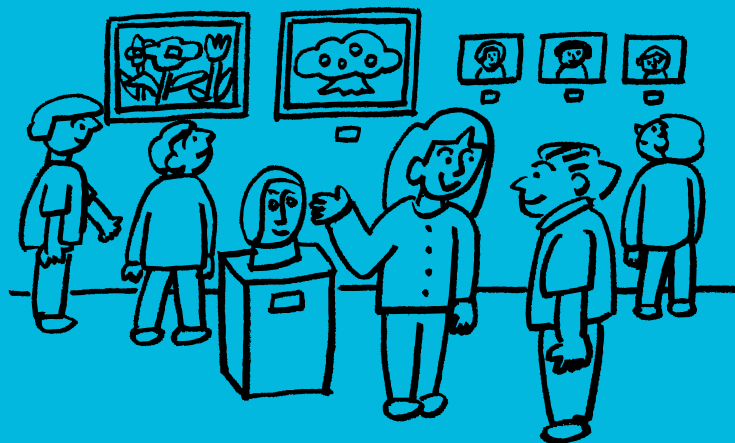
アートハツカイチ

art201(アートハツカイチ)は、障がいの
ある方の家族やサポーターの「障がいの有
無に関わらず、地域でアート活動に取り組
んでいる仲間との交流の場があったらいい
な」という願いから、2022年4月から始ま
った任意団体です。

活動は展覧会やサロンの開催の2本柱
になっており、展覧会では主に県内の廿日
市市在住のアーティストや、会員として所属
しているアーティストの作品を展示。持ち運
び可能な展示台を制作し、「おりたたみ美術
館」と題して郵便局や県内のイベントの際に
作品展示を行い、生活の中にアートがある
ことの魅力を発信しています。

また、サロンは月に1回、午前と午後に分
かれて行なっています。午前、午後のどちら
かに参加される方もいれば、一日を通して
参加される方など参加する形態は参加者
によって異なります。

表現する場や発表の場は、年齢や障がい
の有無に関係なく、居心地の良い空間をつ
くるのに適していると感じています。art201
の参加者の皆さんにとって、楽しい存在で
あったり、大切な居場所になっていること
を感じ、このような場が各地域にできると
良いなと思っています。



Eさん

徳島県

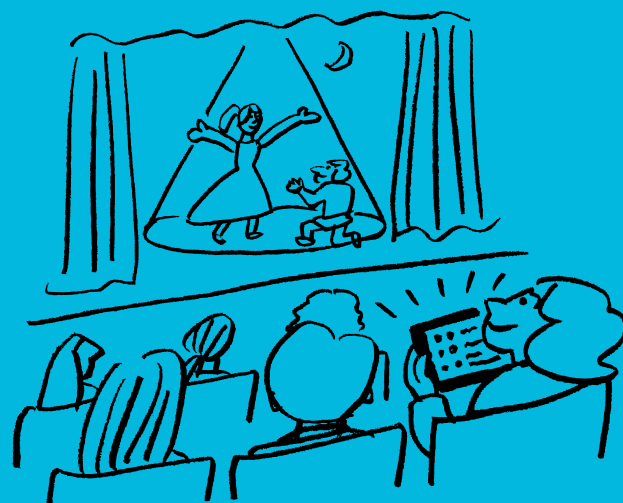
徳島県障がい者
芸術・文化活動支援センター

ダウン症のEさんは、幼い頃から文字に
強い関心を持ち、よく漢字を書いていたそ
う。通所施設では「さをり織り」の作品を制
作していましたが、ある時絵画教室の先生
からフェルトペンを使った作品制作を勧め
られ取り組んだところ、はじめての作品が第
1回「障がい者アーティストの卵」発掘展に
おいて金賞を受賞。

このことがきっかけになり、作品づくりに
さらに熱心に取り組むようになり、さまざま
な公募展で賞を受賞するようになりました。

センターが企画する「障がい者アート」を
紹介する展覧会などにも足を運び刺激を受
けているようで、表現材料にもこだわりを持
つようになっていきます。

また、センターが運営しているギャラリー
で個展を開催した際には、小さい頃からE
さんのことを知っているご近所の皆さんが
たくさん観覧に。自宅近くの喫茶店の方
からはお店での展示の依頼もあり、多くの
人たちに見ていただけるとともに作品販
売にも結びつくようになり、売上金で材
料を購入できるようになっています。



高知県

薫工ミュージアム 分室

鑑賞支援サービス

聴覚に障害のあるFさんは、友人に誘
われ市民参加型演劇公演に出演すること
になり、薫工ミュージアム分室ではFさん
の公演参加サポートを行うことになりました。

同室では、聴覚や視覚などに障害があ
る方が舞台芸術を楽しむための字幕や音
声ガイドといった「鑑賞支援サービス」を
体験し学ぶ研修プログラムを11月に実施
。そのイベントに、Fさんが知人の聴覚に
障害のあるGさんに声をかけ参加したと
ころ、Gさんは演劇公演を字幕で鑑賞す
る体験がとても楽しかったようで、Fさん
が出演する演劇公演を観に行きたいと手
話通訳士のHさんに話します。それを聞
いたHさんは公演を主催する公共ホール
に連絡。連絡を受けたホール職員のI
さんは、同室に字幕提供について問
い合わせ、県内の公共ホール主催事業
では初めて字幕が表示されるタブレット
貸出による鑑賞サービス付き演劇公演
を行いました。

公演演出家は字幕タブレットに可能性
を大きく感じ、字幕タブレット貸出付
きの県内ツアー企画を考え、同公演に
出演した演劇関係者は響文化を主体と
した作品作りに取り組もうとしています。
また、この公演を鑑賞した別の公共ホ
ール職員の中には、来年度公演での鑑
賞サービス提供を検討する方も出てきて
おり、障害のある方が舞台芸術に参
加する土壌づくりは着実に広がりを見
せています。

現場を巡る対談

聞き手
岡村忠弘
(中国・四国アール・ブリュットサポートセンターバスレル)



鳥取 広島 高知 徳島

写真上…吉川純代(あいサポート・アートセンター)
写真下…チャベズ・ピアンカアナ(あいサポート・アートセンター)

写真上…保田香織(広島県アートサポートセンター)
写真下…日向典子(art201)

松本志帆子(薬工ミュージアム分室)

西木正(徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター)

鳥取県の事例

—この事例検討は、昨年度に引き続き今年度も事例を収集することを目的に実施しております。事例を収集することだけが目的ではなくて、提示していただいた事例を通して皆さんと本事業についての活発な意見交換の場になればと思っております。

まずは、鳥取県のあいサポート・アートセンター、吉川さんの方から発表していただきたいと思います。吉川さん、よろしくお願いたします。

吉川 よろしくお願いたします。鳥取県のあいサポート・アートセンターからは、知的障がいがあるDさんの事例を紹介させていただきます。Dさんは、細さの異なる黒いペンを使い分けながら、線画の作品を創作している15歳の男性です。

Dさんとの出会いは、初めにDさんのお母様から、個展ができる会場を探しているのご相談の電話を受けたことです。それがきっかけで何度かやりとりが続いて、実際にご自宅へ訪問して、お会いすることになりました。Dさんのお母様にも知的障がいがあり、息子さんであるDさんのアート活動をどのように支えていらっしゃるのか気になったこともあり、今回事例として挙げさせていただきました。

Dさんにとって難しいとされている対人の場面ですとか、書類の準備などは、現在全てお母様がサポートされています。お母様がDさんのやりたいことを一番に応援しているということが、Dさんが安心して絵の制作に取り組むことができる環境に繋がっているな、と感じる現状でした。Dさんのお母様もDさんがやりたいと思われることを思いつきらせてあげたいという気持ちが強くて、Dさんご本人の口から絵をもっと勉強したいとか、画家になりたいという言葉聞いて、そのためにどうしたらいいのか、というのを懸命に調べたり、考えたりしておられました。

また、日々全国の公募展や展覧会の情報や作品の創作や発信につながる情報の収集に積極的に取り組んでいて、月に2回大阪まで絵画教室に通われているそうなんです。大阪には先生との会話や指導中にDさんが理解に困った時などにはすぐにフォローができるように、いつも付き添われているということなのですが、一方でお母さんは今後どこまでDさんのことをサポートをしてあげられるのか不安や心配も抱えておられました。

お母様は車の運転が難しく、作品展の搬入などは70代のお祖母様に手伝ってもらっているようです。お母様は現在B型事業所でお仕事をされているのですが、B型事業所の工賃のみでは収入が十分ではないため、Dさんのアート活動はB型事業所の収入と今まで蓄えられてきた

貯金を崩しながら、なんとかやっているそうです。

ここまでの内容で、私の感想を述べさせていただきます。今はお母さんと二人三脚で夢に向かって歩まれているんですが、今後Dさんが自分で超えていかなければいけない課題や困難があるのかなと思います。ただ、その課題ですとか困難というのまた人それぞれだと思いますし、自分で超えるべき範囲っていうのは、どのように決まるのだろうかとか、それをどうやって確かめていったらいいのだろうかと思います。

また、今後お母様によるサポートが難しくなってしまう時に、どのような手段で誰から協力を得ることができるのかということも、もしも方法があるのであれば知っておきたいなと思いました。

ここからはDさんについて詳しくご紹介していきたいと思いますが、Dさんの生活の様子や障がいについてですが、Dさんは思っていることがうまく言えなかったり、相手の言っていることが理解できなかったりすることがあります。また、聞こえてくる音の中に嫌だなと感じる音があって、学校生活では、それがひとつの大きな原因となって小学校の2年生の頃から学校へ向かうことが難しくなりました。現在中学3年生で今年の春には卒業されるんですけども、卒業後、高校への進学はされません。15歳から就労支援が可能な事業所があると聞き、現在、児童福祉相談所へ相談して、お仕事を探してもらっているところだとお母様からお聞きました。

アート活動については、Dさんは保育園に入った頃から、お絵描き帳を1週間に1回のペースで買い替えなければならぬほどに、毎日絵を描いて過ごしていたそうです。絵を描くことが一番楽しく、大好きだと話されていて、現在でも毎日ご飯を食べる時間とか、眠る時間を除いて、一日中絵を描いて過ごされています。この生活をこれからもずっと続けていきたい、僕には絵しかないとこの思いが強くあって、将来、画家になりたいという気持ちを抱かれるようになりました。自分の頭の中にあるイメージをどんどん発展させて、作品にしていきたいという思いを持たれていて、楽しみながら取り組んでいるそうです。

ですが、毎年学年の切り替わりの時期になると気持ちが落ち込んでしまうそうで、その間は制作活動もスランプに陥ってしまい、小学校から中学校に進学する時は、約半年間も絵を描くことができなかつたそうです。そこから当時の絵画教室の先生やお母様から励ましの言葉をもらいながら「ペン画」という手法にご自分でたどり着き、長いスランプを抜け出すことができたと話しておられました。誰かから具体的にこうした方がいいんじゃないかとアドバイスもらったわ

けではなく、色を使わずに、黒のペンで表現するっていうのをご自身で決めて実行されたということです。

作品は主に動物とか植物などの生き物をモチーフにして描かれています。幼少期の頃から植物が好きで、よく描いていたとおっしゃっていました。大きな目標は、海外で個展を開くことだと言っていて、そのためにもまずは自分のことを知ってもらうために、公募展での入賞を目指して取り組んでいるそうです。将来は、誰かに喜んでもらえるような作品が作りたいと話していらっしゃいました。

最後にまとめをさせていただきます。Dさんとお母様から直接お話を伺い、絵を描くことやそれに関する出来事がDさんの創作意欲をさらに育まれていて、日々の楽しさであるとか、生き甲斐になっていると感じました。また、Dさんが今できないことをできることに変える手段になっているのかもしれないとも思いました。個展などに挑戦していく活動を重ねるごとに、画家になりたい、画家になるために頑張るという意識も高くなっているそうです。アート活動を通して新しい出会いや繋がりも増えて、自分で切り開いていくための方法や引き出しもたくさん作って行って、その中で人生の選択肢が広がっていくことを願いたいと思っています。

長くなりましたが、以上で鳥取県の事例発表を終わらせていただきます。

—ありがとうございました。Dさんのお母様はB型事業所に通っているとのことだったので、障害福祉サービスの支援者はついていらっしゃるんですね。Dさんにも今後、就労継続支援B型事業所に行くのかわからないですけども、将来的には支援者がつかうかもしれない。

今後については、お母様だけではなく、周りの支援者も一緒に考えてくれるような支援体制が敷かれる可能性はあるっていうことですね。障害福祉において、親亡き後の問題でどの親御さんも心配されていて、Dさんのお母様とあいサポート・アートセンターの吉川さんやピアンカさんだけが関わってではなくて、その他の支援者を巻き込んでいくということも大切なことなのかなと思ってお聞きしていました。

保田 まだ15歳ということで、彼の経験値もこれから積み重ねていけるんだろうと思うので、今はアートしかないって本人は思われているかもしれないんですけど、今後いろんな人との出会いだったり、サポートを受けながら生活の幅が広がっていくといいなって思ってます。だから、彼を中心にいろんな人に関わってもらって、アートだけでなく、生活の支援であったり加わってもっと彼にとって手厚い環境が整っていくことで、表現活動も広がっていくんじゃないかなと聞きながら考えていました。

——ありがとうございます。保田さんの感想を伺って僕も思ったんですが、今描くことがすごく楽しくて、描くことに熱中してるYさんですが、とてもいいことだと思うんですね。ただ、これから社会に出ていったら、さきほど保田さんが言ったように、描くことだけでは難しく、就労も含めた生活のことについても考えていかなければいけない、しんどくなる時期もくると思うんですね。絵を描くことよりも生活の方が大切、就労が大切みたいな流れになって、描くことをやめてしまったりだとか、そういうことは防ぎたいと思うんですね。本人はアート活動を続けたいと思ってるんだけど、社会に出た後にアート活動をやめてしまった事例などの経験がありますか？

松本 絵を描くのをやめてしまう方っていうのは、何人も知っています。私が知っている事例は、本人の描くことへの興味が少なくなっていくって、ぱったりやめたみたいなのがが多いです。障害の特性もあって本当に寝る間を惜しんで描いていたのに、いきなり翌日から全然違うことをし始めるっていう方もいると思うんですね。だから、その本人の興味がどこに行くのかっていうのは、やっぱり支援者である私たちが誘導できるものでもないと思うんです。

一方で、誘導されやすい方もいらっしゃるって、たとえばこれは海外の事例なんですけど、アート作品が評価されて作品が結構高額で取引されるようになってきて、それによってたくさんお金を得てしまったので、お金への意識が強くなってしまって、売れるものを本人は描こうという方向になっていくんだけど、売れるものを描こうとすればするほど売れなくなっていったって、結局生活が破綻してしまうケースがあったようです。

障害をお持ちの方の「アーティストになりたい」という気持ちに対して、私たちがアーティストを作るみたいなのって、ちょっと危険なことだなと思います。一般社会の中でもアーティストになれる人なんて本当に一握りで、障害のある方だからこそアーティストになりやすいみたいなのもすごくおかしな話で。障害のある方の作品っていうのは面白くて、すごく注目されてると思うんですけど。だからこそ私たちは気を付けて、丁寧にというか慎重にやっっていかなきゃいけないんじゃないかなって、日々思いますね。

——本当にその通りだなと思ってお聞きしました。Dさんにとっても今は絵なのかもしれないですけど、いろんな人と出会ったりとか、いろんな経験していったら、それ以外に楽しいことに出会うかもしれないですね。それをこちらが操作するっていうのは、本当に危険だなと思いました。

松本 お母さんとおばあさんとでDさんをサポートしようと

してると思うんですが、本人があんまり描きたくなくなってきたのに絵を描かせようとするみたいな状態になった時は、本当に気を付けて見てあげなきゃいけないと思いますね。実際にそういう保護者の方を知っているの。本人はそんなに描くのは好きではないけど作品を描けば割といいものができて展示もされる。そして展示されることを保護者の方のほうが好きというか。本人があんまりそんなに楽しくなさそうなので、親御さんに対して「ご本人が今したいことはなんでしょうね？」っていう風には伝えたりしてるんですけどね。お聞きしていて、そんなことを思いました。

——展覧会をしたいとか展示をしたいって言うてるんですけども、ご本人は自分の作品が展示をされることを純粹に望んでいるのか、それともお母さんがそれを見て喜ぶことが好きで、一生懸命になってくれるお母さんに応えたいとか、吉川さんから見てどのような印象ですか？

吉川 私から見ての感想なんですけれども、今はご本人様がやりたくて取り組まれてるっていう印象です。ただ、私はまだ数回しかお会いしたことがないので、知らない部分が多々たくさんあると思うんですけども、小学校の頃に通われていた絵画教室の先生からお話を聞いた時には、お母さんの方を見ながら絵を描くことがあったよというお話を聞いたこともあったので、ご本人の意思なのか、お母さんのことを想って描かれているのかちょっと分からないなというのは感じております。

——自分に置き換えてみてもそういう時はありますよね。西木さん、これまでの体験とかを含めて何かお話を伺えますか？

西木 そうですね、やっぱりご本人が絵を描いたりすることで、日常というか生活が豊かになるというか、楽しく過ごせるっていうのが、私は一番いいように思うんですね。作品が販売されたりして、収入に繋がっていく、それもいいことだとは思いますが、まずは本人が落ち着いた生活を送れるっていうことが最も必要なのかなっていう風に思っています。徳島県でも公募展をやってるんですけど、特別支援学校を卒業してしまうと、出品がなくなるという方がたくさんおられます。学校を卒業してB型事業所とか生活介護の事業所への通所が始まると、アート活動をフォローしてくれる人がいなくなって、本人も描くことを忘れてしまうというか、表現することから遠ざかっていくといえますか。

そして、担当の先生に聞いても、その後どんな風に生活してるのか全然わからない。障害福祉サービスの事業所には特別支援学校のようにアート活動をフォローしてくれる人もおらず、たとえばB型事業所では工賃をもらうために一生

懸命作業をしていると、制作にかける時間がやはりなかなか取りにくいという実情もあるかと思います。支援センターとしてもそういった方のサポートができるといいんですけども、なかなか全てをフォローできないっていうのが現状です。

後でまた事例として報告させていただくんですけども、やはり保護者の方とか、それから支援に入ってくださいる方のサポートがどうしても必要なケースが多くなってきます。もちろん、そういったサポートがない方で、お亡くなりになるまで制作を続けられてたいう方も知ってます。けれども、やはりそういった方は非常に少ないかなという風には思っています。

——ありがとうございます。西木さんがおっしゃるように、特別支援学校で制作活動をしていた方が、次に何か新しいことに興味が湧いて制作活動をやめていってしまうってことは、仕方のないことなのかなと思うんですけども、実際やりたいんだけど環境が整わないとか、たとえば画材が自分で買えないから、泣く泣く諦めてしまったりとか、そういった状況は防がないといけないと僕は思ってお話をお聞きしました。そういう事例に対して、広域センターや支援センターとして何かしらのお手伝いができないものなのかなと考えています。それこそ、Yさんに関しても経済的な負担に対しては助成金を活用する事もできますか？

吉川 そうですね。Yさんはまだ応募されたことはないんですけども、来年度もあいサポート・アートセンターの助成金はある予定なので、そちらのご紹介をさせていただきました。

——そうですね。助成金で画材を買うなり黒いフェルトペンを買うなりしていただけるといいですね。さきほどの西木さんのお話にもありましたが、これまでアート活動に取り組まれていた方が、自分で選択してアート活動をやめたのであればいいんですけど、続けたいのに続けられないっていう状況があるのであれば、どうやってそれを拾い上げるのかとかいうことも継続の議題として考えていけたらなと思いました。

皆さん他に何かご意見ないでしょうか。

平谷 お母様から最初にご相談があった時に、個展を開くことのできる会場を探しているってことだったと思うんですけども、その個展についてはその後どんな風になったのかお聞きしたいです。

吉川 そうですね。まず、あいサポート・アートセンターが運営している「無心」の貸館利用についての説明をさせてもらいました。あと、Yさんがお住まいの地域で、アート活動を

行っている他の団体などが個展を開催される時に使っているギャラリーがあるので、数件ご紹介させていただきました。最終的にはその中からひとつを選ばれて、3月の末から個展をやりますというご連絡をいただきました。

平谷 支援センターへの相談から実際に個展の開催にまで繋がってすごいですね。自分も含めて、どうしても大人や周りの支援者は、将来やまだ起こっていない未来のことを予測して考えていくと思うんですけども、今日吉川さんのお話を聞いてて、純粹に今僕には絵しかないかとか、これまでの絵を描いていた生活を続けていきたいとおっしゃってる気持ちがあるのであれば、その気持ちに寄り添ってきたいなと思いました。

土谷 障害の有無に関わらず、共通の問題があるのではないかと思いますね。たとえば、中学校とか高校の部活動の問題とかでもそうですけど、野球とかサッカーとかあんなに頑張ってたけど、卒業したら引退みたいな形で。その後社会人になって、スポーツなんか一切やらなくなっちゃったりとかするとかっていうことにも似てますよね。

結局、社会の中でそういう文化的な豊かさを受用するフィールドがかなり少ないっていうことだと思うので、そういった中で支援センターとかが、今後どういう風な活動の展開をしていこうかっていうことを考えるための事例としても、非常にインパクトのあるものだと思います。Yさんについてはやっぱりちょっと周囲が期待しすぎるってのは良くないかなと思うので、期待値を下げたげるための手法も重要なのかなと思いました。

広島県の事例

——吉川さん、事例紹介ありがとうございます。続いて、広島県アートサポートセンター、保田さんの事例紹介をお願いしたいと思います。保田さんよろしくおねがいします。

保田 広島県アートサポートセンターでは、昨年度から『アートの巣箱』という助成金事業を開始したんですが、その事業においてサポートをさせていただいた、『アート201（アートはつかいち）』さんの事例を挙げさせていただきました。アート201は、障害のある方の家族さんであったり、サポーターの方が、障害の有無に関わらず、地域でアート活動に取り組んでいる仲間と交流ができる場所があったらいいなという想いから、昨年4月から始まった任意団体です。本日はアート201代表の日向さんにも来ていただきまし

た。アート201では、表現活動を楽しむサロンであったり、県内の様々なところに行って作品を展示をしたり、イベントに参加されたりしています。

事例の経過についてですが、基本的には美術表現が多いんですけど、そういった表現活動をしたい方たちが障害の有無に関わらず集まっておられます。アート活動をサポートすることを目的に集まった方もおられるので、様々な立場の方が関わっておられるのがアート201の特徴だと感じています。展覧会やサロンの開催、イベントに参加するときは、その都度、日向さんを中心にスタッフの方たちが集まってミーティングや準備を行っておられます。情報の交換にはグループLINEが使われていて、参加者の方々とサポーターの方々とで情報共有をして、常に情報が行き届くように心がけておられます。中には障害の重たい方もおられたりして、特別なサポートが必要な方が参加される時には、支援者であったり、保護者の方にも付き添いをお願いをしています。

団体が発足した当初は、障害のある方がサポーターさんに話をするという形式でのやり取りが多かったんですけど、最近仲間意識がちょっと強まってきていて、障害のある人同士でも対話をされる光景が増えてきました。参加者の中には、自宅では会社で起こった出来事とかは全く話をされないけど、サロンに参加した後はサロンの仲間の名前が出てきたり、「○○くんが来るから今度のサロンは午前中に行きたいな」などと、仲間意識が本当に強まっていることをご家族の方も感じておられると聞いています。また、サポーターの中にも、退職後にやることができたと行って活動を手伝ってくれてる方や、LINEで情報発信をしてくださる方が現れているのが今の現状です。

取組の内容としては、サロンが月に1回、午前と午後に分かれて行っています。午前、午後のどちらかに参加される方もいるんですが、一日を通して参加される方もおられて、参加する形態は参加者によって様々です。

展覧会は主に広島県の廿日市に在住されているアーティストの方だったり、会員として所属して下さっているアーティストの作品を展示しました。その他に持ち運びができる展示台を作成して『折りたたみ美術館』という形で、地域にある郵便局や広島県内で開催されるイベントに持ち込んで作品展示を行い、生活の中にアートがある楽しさだったり魅力を発信されています。

まとめと今後の展望ですが、アート201が行われている活動は、それぞれの表現や思いを肯定的に受け止めやすく、年齢だったり障害の有無に関係なく、居心地の良い空間をつくるのに適しているなと感じています。

アート201は参加者の皆さんにとって、楽しみな存在であったり、大切な場所になっているのを感じて、いろんな方

が関わって、表現活動ができる場が各地にもっとできるといいなと感じています。支援センターとしても、地域に必要な市民団体として活動を継続していただけるよう、支援していきたいなと思っています。

日向 アートサポートセンターとして、保田さんにも毎回サロンやイベントにもご協力をお願いしていて、本当に助かっております。市民活動っていうところがちょっと曖昧だったっていうか、やってみると色々難しいことがあるんだなっていうことが分かってきて、障害福祉サービスとの違いだったり、どこまでやってあげたらいいのとか、すごく日々悩みながらやっているところです。

——**保田さん、日向さん、ありがとうございます。ご紹介いただいたアート201が市民団体として始まった経緯を教えてくださいませんか？**

保田 発起人は日向さんです。日向さんはもともと福祉施設のスタッフさんだったんですね。福祉施設を退職された後、もう少し障害をお持ちの方が社会に出ていくような場所があった方が、彼らの生活がもっと楽しくなるんじゃないかなっていう想いがすごくあって、日向さんが声をあげてくださって。

日向 そうですね。新型コロナウイルスの影響によって、福祉施設はただでさえ閉塞感のある場所なのに、もっと閉塞感が強まってしまって、この閉塞感をなんとかしたいっていう風なことは思っていましたね。

——**地域で生活する方、どなたでもいいし、創作活動とかしたい方が自由に来ていいですよっていう場を作ったということですね。サロンに来られる方の中には、その空間に来られるだけで何にもしない方とかも来られますか？**

保田 今は来られてないかなー。でも、お喋りしたいだけの方とかもいらっしやいますね。それも私たちは「表現」だと思ってるんですけど、サポーターの方でもお喋りを聞くのが好きですっていう方も来られているんですね。だから、そこでうまく成り立ってるんだなって思っています。

——**わけへだてがない感じがして素晴らしいなと思います。吉川さん、いかがですか？**

吉川 サポートをされることを目的に参加される方もいるっておっしゃっていたんですけど、サポートっていうのは、美術表現の制作面のサポートをされる先生がいっぱいいらっ

しゃるのか、もしくは福祉のサポートをされる方なのか、どういった方がどういうところからいらっしゃるんですか？

日向 サポーターとして来られている方は美術の方ではないですね。どちらかという「何かしたいわ」っていう気になってくださったというか、最初は人も足らなかったのではいろんな人に手当たり次第に、「手伝って」って言って声をかけたら来てくださった方なんですけど、「何かすごく居心地がいい場所だった」っていうような感想を言われて、「だから私、ここにまた来たいわ」っておっしゃってくださる方もおられます。

本当は美術の分野の方、たとえば美大生とか学生さんがもっと来てほしいなっていうのは思うんですけど、なかなかまだ接点が見つからない。

保田 スタッフの中に一人絵画の先生もおられるので、そういったところで美術表現に特化して取り組みやすかったっていうところもあるんだと思います。

吉川 サポートされる方の中で、いろんな情報を共有もされてるっていう感じなんですかね。

保田 そうですね、グループLINEの中でサロンであった出来事であったり、個展しますよっていう案内を出す人がいたり情報交換をしながら楽しくやっています。中には、ただただLINEのグループの中でお喋りしたい方もおられて、それも含めてみんなが楽しんでもるかなと思ってます。

吉川 グループLINEは、いつでも誰でも参加っていうのか、友達になれるようにされてるんですか？

保田 そうなんですよ。あの、福祉面から見たらちょっと心配かなとも思うんですけど、割とラフな感じで皆さん参加してますね。

——**参加された方から居心地がいいっていうコメントをいただいていると思うんですけど、その居心地の良さは、環境設定であったり、人であったりとか。何が一番の要因だと日向さんは感じていますか？**

日向 なんですかねー。でも一番大事にしてるのはトイレ。なんかトイレにすごくハードルのあるっていう方が多くいらっしやいますね。

——**トイレを綺麗に保つっていうことですか。それともトイレの広さとか？**

日向 綺麗なトイレがあるところ。最初はちょっと違う場所でやってたんですけど、和式のトイレだったりして、排泄が難しいよっていう方もいらっしゃったりしたんですけど、今は会場を変えて、すごくトイレが綺麗だから気持ちがいいっていうことはあります。すみません、答えになっていないような気がします(笑)。

——**いやいや、深いのかもかもしれません。意外な答えが返ってきて驚きました。自分に置き換えたら、確かにトイレが綺麗なところに行きたいなって思うし、居心地のいい空間を作るために、おそらく支援センターや福祉事業所を運営されているところは皆さん考えられるのかなと思って。関わる人が大切なのかなとなんとなく思ってお聞きしましたが、実はそうじゃなくて、一番大切なのはトイレっていうお答えでびっくりしました。**

日向 いや、それだけじゃないかもしれません。でも確かに、最初は香りとか音とか光とか色々考えていたような気がします。今は少し慣れっこになっちゃって、だんだん見えなくなってきたんですけど。広さだったりもある程度ないと難しいし。

——**こういったアート201の活動を保田さんはサポートをしてるってことですか？**

保田 そうですね。助成先だからっていうこともあるんですが、私もやっぱり表現活動だったりそういう雰囲気が好きなので、今はサポートというよりも参加者として関わっています。

——**なるほど、わかりました。西木さんこの取り組みに対して何かご意見やご感想などいかがでしょうか？**

西木 話を伺っているとですね、非常にゆったりした感じがして、それがとつてもいいなって思いました。どうしてもうちなんかも企画をすると、講師の先生がいてスケジュールが決まっていて、最後に講評会をしたりそれに囚われてしまうというか。そんな感じじゃなくて、とつてもゆったりした感じが居心地の良さというかそういったところに繋がっているのかなと思いました。

結局、人が集まらないといくらしい企画を立てても何にもならないですよ。参加してくださった方が居心地のいい時間を過ごせたということが、やっぱり一番の成功なんじゃないかなっていう風に、今お話を伺ってて本当にそう思いました。ちょっと羨ましいなと。うちもなんとか真似ができないかなという風な感想を持ちました。

——**徳島県でもこういったゆるーい企画はできそうですか？**

西木 そうですね。なんかちょっとまた考えてみたいなって思います。

——**是非そのゆるい企画の時にはパスレルにもお声がけください(笑)。松本さんいかがでしょう？**

松本 すごく居心地がいい場所になってるっていうのはいいなっていうのと、やっぱり表現活動ができるだけじゃなくて、そこに行けば誰かいるとか、居場所がもうひとつ増えるっていうか、行ける場所の選択肢が増えるってとても大切だと思うので、この取組みがそのひとつになっているんだらうなと思って、すごくいいなと思いました。

岐阜県の支援センターさんが『オープンアトリエ』っていうのをやってると思うんですけど、高知県でも来年度そういう取組みができたらいいなって思っています。施設での表現活動って、表現活動をされている施設によるとは思うんですけど、やっぱりあまり絵の具とかでぐちゃぐちゃになれるみたいなのはないかなって思うんですよね。でも、たとえば、子供さんとかもやっぱり手とか、足とかでベタベタと触ったりすることが好きな人もいし、その感触だったりとかが結構気持ちいいなって自分でも思ったりするので、あとで綺麗にしなきゃとかあんまり気にせず好きに表現ができるみたいな場所ができたらいいなって思っています。アート201さんでも、表現活動をされる方がいらっしゃると思うんですけど、それは皆さんが画材を持ってきてされているんですか？それとも、少しは画材が用意してあるのか、そのあたりはいかがですか？

あと、毎月開催されるサロンは予約制だとは思いますが、たとえば、道具とか画材とかを準備したりするのにお金がかかってくると思うので、参加者から少しでもお金を集めたり、全く別の助成金とかを取ってきて参加者の方は無料で楽しめるみたいにしてるのか、その辺りを具体的に教えていただけると、今後の参考にさせていただけそうかなと思います。

日向 まさに今、悩んでいるところなんです。実は画材は置いて帰れないので、いつも持って帰ってはまた持ち込んでるっていう形で。

テーマは毎月一応決めています。サロンに来たらこういうものが創作表現としてできるよみたいなテーマを掲げてお知らせはしてるんです。それで、ある程度スタッフの側で人数分の準備をして持ち込むんですね。ブルーシートとかを敷いたりして汚してもいいようにしたり工夫もしていますが、やはりお金っていう部分が課題にはなってます。

助成金でまかなえているところもあるんですけど、やはり至らないところもあるというか。むしろそれより、会員になってもらうっていう事について周知を始めてるというか、会費を払って会員になった方が参加できる場にしていききたいなとはちょっと思っています。会費で成り立っていることをきちんとお伝えしてから、参加していただけるようにしていきたいという風には考えているところですね。

松本 はい。なんかすごくよくわかります、ありがとうございます。ちょっと個別に相談させてください。

——**土谷さん、何かご意見ないですか。**

土谷 すごくいいなと思いました。事業所とか支援学校とか、一定のフレームを外れた時の居場所作りっていうことに、なんかすごい有効に働きそうな事例だなと思って伺ってました。事業所の事業とか、それから学校の授業とかそういう枠で考えると、どうしても問題解決型みたいな発想になっていってしまうので、この緩さっていうのは担保できないんだと思うんですね。

一方で、アート201の日向さん達によって、居心地のいい場所、環境が作れているのは別にアートとかアートの環境を整えようとか、そういうことからではなくてなんていうか共感してくれる人がいっぱい集まるという共感型の発想で集まることが成功してる理由な気もしたんですね。結果的に多分問題とか課題を解決する発想から理詰めで考えていくよりも、いい場所作りとしては成功してると思います。運転しながら課題とか小さい問題はいっぱい見えてくるので、その都度解決していくっていう方程式もありなんだなっていうことを今伺って、すごくいい取組みだなと思って聞いていました。

こういった活動をもっと言語化していくことも中間支援としての僕たちの仕事なのかもしれないですね。

——**そうですね。助成金を得るにも法人格が必要であったりもするので、アート201さんのようなゆるいところでやる団体では応募すらできない現状もあって、そういった部分は課題だなと思います。**

土谷 あと、ギャラリーとか美術館とかそういう箱から作るんじゃなくて、『折りたたみ美術館』ですか。自分たちで社会に出て行って、発表場所も日常の中に入れていっちゃうって発想もすごくいいと思いましたね。なんかむしろ、そういった取組みの方がスタンダードになってほしいなと思います。

日向 地域にたくさんあるので郵便局にしたんですけど、中には断られる郵便局もあります。

土谷 それはそうですね。誰もが賛同してくれるってことはないですからね。でもその断られるのもまあ楽しいじゃないですか。

——**ほんと、そうですね。断られることも楽しんでいくっていうの大事ですね。**

土谷 アートって、アートの中から出てこないんで、そういう風に、社会との接点の中から生まれてくることもたくさんあると思いますから。その一歩を踏み出してみるとか、越境してみるっていうことが重要で。うまくいろんな人に伝えられるといいなと思います。

——**アート201での取組みを、是非継続して頑張ってもらいたいと思います。**

徳島県の事例

続きまして、**徳島県障がい者芸術・文化活動支援センターの西木さん、よろしくお願ひします。**

西木 よろしくお願ひします。実はですね、この事例については昨年度報告させていただいた事例の続編になります。昨年度、聞いていただけていない方もおいだと思いますので、紹介したいと思います。

Eさんは1990年生まれの32歳のダウン症の方です。女性の方で地元の小学校、中学校を卒業した後に、県立の支援学校の高等部に入学しております。卒業後は、障害者支援施設にて生活しておられます。幼い頃から、文字に非常に強い関心を持っていて、よく漢字を描いていたそうです。現在通所している施設では、旗織班に所属し、さをり織りの作品を制作しているんですが、施設の絵画教室の指導の先生に、フェルトペンを使った作品制作を勧められて、取り組むようになりました。事例の経過ですけれども、フェルトペンを使用して、初めて取り組んだ作品が第1回「障がい者アーティストの卵」発掘展で金賞を受賞しております。このことがきっかけになってさらに熱心に取り組むようになって、他の様々な公募展でも賞を受賞しております。当センターが主催しました、障害者アート紹介する展覧会などにも、ご本人は積極的に足を運んでくれているようで、表現材料にもだんだんこだわりを持つようになってきています。以

前は、家族に促されて制作を始めると家族が準備をして、そこに座って制作活動を始めていくっていうことだったんですけども、今では自分で時間を決めて、生活の中に一定の時間割というんですかね、リズムが出てきて作品の制作が生活の一部になってきています。

取り組み内容ですが、昨年度の報告では日常生活において作品制作がアクセントになって、メリハリのある生活が送れるようになったっていう事例報告だったんですけども、今年度当センターが運営してるギャラリーで個展を企画して作品を展示させてもらいました。当センターで個展の案内のはがきを作りまして、県内の施設等に配布をしました。ご本人にもはがきを差し上げたので、お母さん、それから施設の方を通じてたくさんの方にはがきを配布したようです。

すると、Eさんのことを小さい時から知っているご近所の皆さんがたくさん見に来てくださいました。ギャラリーは徳島市内にあるのですが、ご本人は徳島県でも一番南の方の町のお住まいの方なんですけれども、その町の社協から大きなバスを借りて、ご近所さんご招待といった形で、展覧会を見に来てくださいました。

この個展を見たEさんのご自宅の近くの喫茶店の経営者の方から、お店の中での展示をしたいという依頼をいただいた事もあって、より多くの人たちに見ていただけました。また、作品を見た方から作品を売ってほしいという依頼もあったりして、作品が何点か販売されたようです。その売上金から普段使っているフェルトペン等の画材を購入することができて、本人はとても喜んでいたというようなことを保護者の方からお聞きしました。

まとめと今後の展望ですが、ギャラリーでの個展開催がきっかけとなって新聞にも取り上げられ、また地域のケーブルテレビなんかでも取り上げていただいたことで多くの人にEさんのことを知ってもらえ、非常に良かったかなと思っています。今後もEさんが充実した生活を送れるように、応援を続けていきたいなと思っています。

——**ありがとうございます。バスでご近所の方が来てくれたというのはすごく印象深いですね。Eさんは今回の関わりによってまた頑張ろうという気持ちになられたんですね。**

西木 そうですね。作品制作にもより熱心に取り組まれて、画材なんかも少し高いフェルトペン買われたようで少し変化をしていて、本当に生活の励みになっているような状態ですね。

——**ありがとうございます。皆さん、ご質問とかご感想いかがでしょうか。**

保田 前回の引き続きで変化というか、進化というかが見れて、ちょっと嬉しいなって思いました。

あと、地域特性もすごく感じられて、ご近所の人がバスをかりてみんなで応援に来てくれるっていうのが、いいなと思いました。広島県ではあまり近所の方が集まってのバスをかりて鑑賞に来るみたいなことはないので、徳島県って人が温かいんだろうなっていうのが感じられていいなかと思いました。同じような事例が広島県にもいっぱいあって、作品公募展で入選してどんどこう自信をつけて。さきほどの鳥取県の事例じゃないけど、入選したことによって外部が騒ぎすぎることでもたしんどいことにならなきゃいいなと思います。でも、今のモチベーションを保ってもらってまた公募展への出展や個展を続けていってもらえたらいいな感じました。

——日向さん、何かご意見はないですか？

日向 私に関わっていた前の施設の利用者さんのことをちょっと思い出しました。その方もやっぱり公募展がきっかけで、個展をやるようになってやっぱりとかもされていたので、同じ道をたどっていかれるんだなと、ちょっと想像をしながらお話を聞きました。

——ありがとうございます。皆さん、普段アート活動をされている方に関わっていく中で、公募展を機会に、たとえば受賞したりとかしてその方にスポットライトが当たって、スポットライトが当たることによってEさんみたいにいい方向に行く方もいれば、受賞が契機で体調を崩されたりとかですな……頑張りすぎて良くない方向に行ってしまったな、みたいなことってありますか？

日向 私に関わった方は、大体皆さんおしゃべりが上手になったりとか。入所施設に入られている方だったのでそのご家族が頻繁に見に来てくれるようになったりとか、接点が増えて喜ばれる方が多かったですね。中には天狗になれる方もおられて、私すごいんですけど言って回るっていう方もおられました。私は、「そがに言わんのんよ」って言うつもりだけど(笑)。

何か作品だけじゃない、自分をアピールできるものが増えたっていうことは、すごくその人の活力になってるなっていうのは日々見て感じていましたね。

——松本さんはいかがですか？ 受賞されたことがきっかけで、こう良くない方向に働いた事例とかご存じですか？

松本 過去に2人ぐらいいます。1人は評価されたことに

よって張り切りすぎたというか、もっといい作品を描きたいみたいな感じで、精神的に障害がある方だったっていうのもあると思うんですけど、作品を描くことにのめり込みすぎていって、制作時間の管理ができなくなってしまって、体調を崩されて入院された方がいました。もう1人は個展を開いた時、本人は嬉しくてたくさんおしゃべりを来場者としていたんですが、大丈夫かなって心配をしていたら、少ししてすごい反動が来て、外に行けないぐらい体調が悪くなって、お休みしてしまった方もいらっしゃいました。

やっぱりどんなに近くで見えていてこっちが声をかけても、張り切っちゃう人は張り切っちゃうんですよね。人間ってたぶんそんなもので、それはある意味仕方のないところなのかなとは思いますがね。

——ありがとうございます。

ピアンカ 他の方の視点とはちょっと違うかもしれないですけど、先日、「無心」で開催した『毛利輝作品展』は19歳のとても若いアーティストの作品展だったのですが、1500人以上の方が来場される大成功の展覧会でした。ですが、やっぱりご本人とご家族にはちょっと疲れも出て、その点は少し反省しているところでもあります。

メディアにも大きく取り上げていただき、新聞が3社、テレビ局の取材、お母様が生放送のテレビ番組でインタビューを受けられました。ご本人はとっても疲れてしまいました。ご本人は耳が聞こえないので、コミュニケーションのずれみたいなこともありました。たくさんの方にチャレンジをされていました。作品展も終わったので、これから少しゆっくりして、リチャージが必要だと思います。

巡回展は美術館で開催されて、4日間で1000人以上の方が来場してくださいました。10名～30名のグループで来られる方もおり、皆さんに挨拶をして写真を撮ったりと、いきなり有名人になった感じで。ほんとに素晴らしかったんですが、ギャラリーの中も暑かったし、もう少し環境への配慮があればよかったなと反省をしています。

——ありがとうございます。どうしてこういう質問を皆さんに聞いたかという、先日の別の組の座談会や、全国連絡会議でも議題として挙がったんですけど、公募展とか賞の是非みたいな議論があって、どっちがいいのかなと思ってですね。

西木さんのEさんの事例では受賞したことですごくいい方向に働いて本人もメリハリがついて、また近所の方の目にも触れて新聞社も取材してくれて。さきほどピアンカさんが言ってくれたような、いきなり有名人になったということはすごくいいことなのかなと思うんですが、その一方で精神的に疲れてしまったりとか、外に出られなくなってしまったりとかいう

リスクがあるのも事実で。最初の議題に戻りますけど、展覧会に賞を与えることでハードルが上げてしまうひとつの要因にもなりますし、是非について考える必要があるなと思っているんですけど、西木さんいかがですか？

西木 そうですね。賞をいただけないので展覧会の方にはもう出しませんっていう方も実はいらっしゃいます。なので、賞ありきで出される方もいらっしゃるの、そういった方にどういう風に賞のあり方というか、何のための賞なのかっていうことを説明しても、なかなかご理解をいただけないということもありますし、非常に難しい問題ですね。ただ、賞がもらえることによって励みになるということは確かなので、あってもいいのかなと感じています。

逆に、アンデパンダンみたいに、無審査で全部の作品を展示します、いわゆる優劣をつけませんっていうような方法があってももちろんそれはそれでいいのかなというので、やはり主催者の考え方ひとつだとは思いますがね。なので、いくつかあるものの中から出品者が選んでくださったらそれはそれでいいんじゃないでしょうか。

——ありがとうございます。土谷さん、いかがですか？

土谷 Eさんの事例の続編、なんかもうほんと素敵です。絵本みたいですよ。Eさんの場合、受賞されて、個展も開いて、作品も売れて、お金の収入もあって、それによっていい画材も買えて。すごくEさんにとっても良かったんだと思います。

作品を売る売らないっていう議論がありましたけど、日本の場合、障害の有無に関わらず、アートのマーケットってちゃんとしていないから、出てきちゃう話なんだと思うんですよ。アートのマーケットがすごく信用の置けるものであれば、こんな話なんかしなくていいわけで。半分リアルで半分夢物語みたいになってしまうっていう。その中で、Eさんの場合は言うなれば、地方から出てきた大相撲の力士みたいな形で、地元の人たちがマイクロバスを借りて応援に来てくれるとか。なんか、大相撲でいうところの谷町さんみたいじゃないですか。日本のいい応援の姿、支援者の姿としてひとつの参考になるなと思いました。グローバルに繋がるアートのマーケットとかもちろんあるんですけど、一方でローカルなコミュニティの中で、こういう作品作ってたんだとか、小さい頃から頑張ってたねとか、そういう作品を介在したアーティストの姿っていうのがすごくいいなと思いました。

公募展に賞が必要なのかどうかっていうのは、多分、これまでの長い経緯もあるので賞自体がなくなることはないと思うですよ。ただ、やっぱりこれもさっきの話と根底は一緒に、多様な出品先がないだけなんです。僕も作品を作

りますけど、これはあのコンペにいけるなっていう時はいけそうなコンペ狙って、そのレースに勝つための動きをするわけですよ。これはレースには向いてないけど、いいなってやつは別に自分でやればいだけで。そういったマネージメントとかの体制を中間支援としては担っていくことも必要なのかなと思いました。

もうひとつはやっぱりコンペだけじゃなくて、アンデパンダンに代表されるような多様な出品の環境を用意してあげるっていうことがあればいいと思います。レースはレースだと思うので。さきほどのアート201さんみたいに、いわゆる『野良』なアートもあるわけですよ。そういう幅が作れるといいなと思いました。

——ありがとうございます。西木さんも言ってましたけど当事者の方が選べるように出品先が広がっていったりすることも重要だなと思いました。西木さん、ありがとうございます。

高知県の事例

——最後の事例に移りたいと思います。高知県の薫工ミュージアム分室の松本さん、お願いいたします。

松本 今年度報告したい事例というのは、昨年度紹介した事例の繋がりなんですけれども、昨年度、障害の有無に関わらずいろんな人とお芝居を作って上演する『いろいろを楽しむ演劇プロジェクト』というプロジェクトの中で、「星の王子さま」のお芝居を上演しました。その公演に出演をしていた方が、聴覚に障害のある出演者の方に声をかけて、今年度、別のホールが主催する市民参加型演劇公演に、出演者としてオーディションを受けて舞台と一緒に立つっていうことから派生した事例を紹介します。

市民参加型演劇公演のオーディションの前に、聴覚に障害のあるFさんから、「『星の王子さま』に出演していた子から誘われて、今度こういう企画に参加してみたいと思うんだけどどうかな」みたいな感じで相談をされたんですよ。私は、「もし自分がやってみたいと思うんだったらやってみたらどうですか、サポートできることがあったらサポートに入りますよ。」というのをお伝えして、オーディションを受けられました。そのオーディション前に、その公演の演出家の方に、聴覚に障害のあるFさんっていう方がオーディションを受けたらって言うてるんですけど大丈夫ですか？と一応確認したところ、演出家の方は、是非参加してみてくださいっておっしゃったんですが、実は障害のある方と一

緒にお芝居を作った経験がないので、よかったらオーディションの会場に一緒にいてくれたりしませんか?みたいなこともおっしゃったので、演劇公演に向け、オーディションの時からサポートに入ることにしました。

Fさんはオーディションに受かって、稽古自体は今年の1月から始まったんですけども、その前年の11月にちょうど演劇公演とかそういったものに字幕や音声ガイドの鑑賞サービスをつける体験をしてもらって、具体的にどのようなシステムで字幕や音声ガイドがつけられているのかっていうのを学ぶ研修会をさせていただいたんですね。

Fさんはオーディションに受かって、稽古自体は今年の1月から始まったんですけども、その前年の11月にちょうど演劇公演など舞台芸術公演に字幕や音声ガイドの鑑賞サービスをつける体験をもらって、具体的にどのようなシステムで字幕や音声ガイドがつけられているのかを学ぶ研修会をさせていただいたんですね。

そこに、Fさんの知り合いのGさんという同じく聴覚に障害のある方も一緒に参加して、演劇公演を字幕で楽しむことができるんだっていうのをGさんがすごく喜んでくださって。Fさんがお芝居に出るんだったら、僕も見たいなって思ったそうなんです。そのことを手話通訳者であるHさんに相談すると、その手話通訳者の方が公演を主催するホールの方に鑑賞サポートがないか聞いてみましょうと言って電話で問い合わせをしてくださったんです。そしたら、その問い合わせを受けたホール職員のIさんが、11月に開催した研修会のことを知っていたというのもあって、当センターに鑑賞サポートをつけるにはどうしたらいいんですかっていう相談をくださって。そこから、字幕のつけ方だったりを一般社団法人日本障害者舞台芸術協働機構さんに聞いたりしながら実際に字幕をつけることができました。その字幕を作るにあたって、演出家の方とか制作に入っているスタッフの方々にも事前研修を一緒に受けてもらったり、他の出演者に字幕のテキスト作りを手伝ってもらいました。

手伝ってくれた人たちが、鑑賞サポートがあれば音が聞こえなかったり視覚に障害があっても舞台を楽しむことができるんだ、誰もが舞台を楽しめる状況ってとても大切だよっていう風に感じてくださって。演出家の方は、来年度の別の演劇公演を字幕タブレット付きにして県内を回る企画を考えていて、実現に向けていろんなホールの方に打診をし始めている状況です。

また、『星の王子さま』の演出家の方もこの市民参加型演劇公演にFさんと一緒に出演していたのですが、2つの公演を経て、聾文化を主体にしたお芝居作りをしたいと考え始めていて、Fさんと一緒に手話を交えた芝居作りなど、新しい企画が生まれそうです。今回の字幕の鑑賞

サポートは他のホールの方たちも見に来てくれていました。その中には、来年度の公演で字幕を付けようとしてくれている方たちもいます。障害のある方が舞台上に立ったり、鑑賞をするという、いろんな立場で楽しめる土壌作りが少しずつできていっているんじゃないかなと感じています。

——聴覚障害のある方への情報保証とかを含めた舞台芸術を通して経験や気付き、今後の発展性についてのお話かなと思ってお聞きしました。

平谷 私と岡村は、高知県で上演されたAさんも出演した市民参加型演劇公演『花咲く港』を鑑賞させていただきました。Fさんにも少しセリフがあって、出演されていたのを覚えていています。

松本 実は本当はもう少しいろんなシーンに出る予定だったんですけど、事情で小屋入り後の舞台上での稽古に一切参加ができなくなってしまったんですね。お芝居って、舞台上で稽古をしないと、大きな事故が起こることもあるので舞台稽古に参加できない人は、本来は本番にも出れないんですが、舞台稽古に参加できなくてもせめて本番には出れるように舞台監督や演出家が考えてくれた結果、少しになってしまったっていう感じです。

——皆さんご質問とかないでしょうか。西木さんいかがでしょうか。

西木 当センターでは、これまで実は舞台芸術の方の取り組みはあまりできていなくて、今年度初めて県の文化財団と一緒に取り組みはじめたところです。鑑賞の機会の確保という意味でも情報保障は非常に重要だと思っているところなので、また色々教えていただきたいという風に思っています。ありがとうございました。

保田 広島県では『おきらく劇場ピロシマ』さんとの共催で演劇公演を開催したのですが、その公演に参加した役者の一人が、先程松本さんから紹介のあった情報保障の研修会に参加されました。研修会で勉強してきたことを参考にして、おきらく劇場ピロシマでの3月の演劇公演でも情報保障のためのタブレットを用意して、実際に聴覚障害のあるお客様がたくさん来られました。まだ、聴覚障害や視覚障害のある役者さんは広島県には現れていないと認識していますが、こうやって鑑賞支援が進んでいくことで、自分もやってみたいなって言われる方も出てくるんじゃないかなっていうのを、実は期待しています。情報保障とともに、障害のある方が舞台芸術に参加しやすいような仕組みづく

りを、今後アートサポートセンターとしてやっていきたいなっていうのを思っています。

——タブレットでの情報保証を作り上げていく時は、聴覚障害のある方であったりとか、障害お持ちの方たちと一緒に作り上げていったんですか？

松本 そうですね。今回はFさんがいらしたので、たとえば、字幕の文字の大きさだったり、1人ずつセリフをタブレットに表示した方がいいのか、できるだけ舞台を見るために掛け合いのシーンでは2人のセリフを同時に表示した方がいいのかとか、そういう見やすさみたいなものは、Fさんに聞きながら作っていきました。ただ、彼女が舞台稽古に来れなかったというのもあって、実際に当事者の方に事前に見ていただけなかった点は反省点だと感じています。当日利用してくださった当事者の方たちからは、とても良かったぜひ続けてもらいたい、鑑賞サポートがある公演がもっと増えたらいいっていう声がたくさんあったので、そこはやっぱり良かったなと思いました。さきほど保田さんが言われていたように、公演を見たことがないのに舞台に立とうとは思わないと思うので、まずは見て触れてもらう機会を作っていくっていうのはすごく大事なんだろうなと思ってます。

平谷 実際に今回情報保障のサービスを私たちも体験させていただいて思ったのですが、タブレットで字幕が表示されながら見る演劇公演はもちろん聴覚に障害のある方の為に構築される環境であるとは思んですけど、聴覚に障害がない私たちでも、たとえば舞台上での声が聞き取れなかった場合に振り返る材料のひとつになるので、それによって理解が深まるというか。今はスタンダードでは無いのかも知れませんが、ほとんどのテレビ番組に字幕がリアルタイムで表示されているように、舞台公演でも今後、字幕等の鑑賞サポートがスタンダードになればいいなと思っています。

——パسلレルの運営法人であるNPO法人脳損傷友の会高知青い空でも舞台芸術を協力団体として上演することがあるんですけども、『東京演劇集団風』さんは聴覚障害や視覚障害の方も楽しめる舞台を作っています。

この時の字幕のスピードはこれでいいのかとか音声ガイドの方が話すスピードはこれでいいのかとかかなり綿密に舞台が作りあげられています。実際に、高知で上演された際に視覚障害の方が来てくださってて、終わった後に「すごい楽しかった」と感想をいただきました。

ピアンカ タブレットに関しては、私はまだ使ったことないんですけど、鳥取県で上演されるいくつかの演劇公演でもタブレット使うようなのでとても興味があります。じゆう劇場の取り組みだと記憶していますが、目の見えない方に対して音声だけではなくて、舞台が始まる前にステージに上がって舞台上の椅子やベッドに触れることができ、そうする事によって舞台が始まった後も目には見えなくても風景はわかるという、すごく素敵なアイデアだなと思ってました。また色々教えてください。

松本 タブレットを借りるだけだと10万円弱ぐらいなので、そのくらいの金額であればなんとかできそうみたいなこともホールの方たちはおっしゃってました。すぐにはできないかもしれないけど、金額的にも絶対無理って範囲じゃないっていう感触がすごくあったので、やっぱり一度どうやってできるかまで体験するってすごく大事だなって思います。

——この事業に取り組んでいる以上、全ての障害をお持ちの方に情報をお届けできたといいなという思いでやっています。以前ブロック研修会に講師できていただいた、株式会社Palabraの山上庄子さんにも色々教えてくださいました。中国・四国ブロックとしても取り組んでいきたいと考えています。

先日、山上庄子さんにお会いした時に教えていただいたエピソードが僕はすごく印象に残っています。情報保証としてタブレットとかいろんなものを設定して、その演劇とか舞台が終わった後に障害当事者が「タブレットが良かったよね」とか「文字が見やすかったよね」という話ではなくて、その舞台そのものの感想を言い合える状況を作らないと本当の意味で良くないんだよって言われていて、そこを目指すことがすごく重要なだと改めて思いました。

松本 私もそう思います。タブレットも音声ガイドもまずはやってみて、その機械に詳しくなって扱えるようになるっていうのは大事なんですけど、それよりも何よりもやっぱり『誰のために』『何のために』するのかっていうのが一番大事なことだと思います。

なので、俳優の方が言ってるセリフをそのまま字幕にするのではなくて、舞台も観れて役者さんの動きも観れるように、かなりセリフを短くする部分もあったりとか、取捨選択をしながら字幕を作っていくかないといけないと感じています。岡村さんがおっしゃっていたように、文字を読みに来ているわけではないので。やっぱり舞台を楽しんでもらうために、どうしたらいいのかっていうのがすごく大事ななって今回思いました。だからやっぱり、当事者の方が

実際に見て、ここがいい、ここはもうちょっとこうした方がいいっていう意見を聞いていくのって、すごく大事だなと思います。

ビアンカ アメリカの場合は、聴覚障害のある方でライブや展示会のギャラリートークに行きたい時には、手話通訳を無料で頼むことができますが、日本にもそのような制度はあるんですか？

——**恐らくないんじゃないですかね。障害がある方が無条件で、手話通訳を受けれるってわけではないと思います。**

ビアンカ 私はアメリカの出身なのですが、最近そういう法律ができました。今はそのことをまだ知らない方が多いので、広報活動を積極的に行っているようです。

——**とても大事なことですよね。たとえば、コンサートでも車いすユーザーの方が本当に楽しみに行ってるのに、逆に悲しい思いをして帰ってくることもあるそうです。**

最後まで聞きたいのに、車椅子ユーザーであるがためにアンコール前に「ちょっと混むので、先に退室しましょう」って促されたりとか。友達と行ってるにも関わらず、ちょっと席を離されて誘導されたりとかですね。公共のホールとかで僕たちが普通にできることが障害をお持ちの方はできないっていう現状の環境っていうのは、課題だと思います。土谷さんいかがですか？

土谷 松本さんの事例を聞いて、昨年度、一緒に演劇を経験したお二人が、自分たちでオーディションの情報を見つけてきて、出たいとなったその動きが本当素晴らしいなと思います。そのお二人が関わることで、演出家の方も来年度以降も取り組みを継続させていくっていう、気持ちが伝播していったことが一番大きい成果なのかなと思いました。

松本 今回、聴覚に障害のある方とそういった方にあまり触れたことがない方が市民参加演劇公演には出演をされていて、そこで誰一人として壁がなかった壁を感じなかったっていうのは、結構すごいかなと思います。

実際にお芝居をやる時に必要なことをゲームを通じて体得してもらうために、演出家の方が稽古を始める前に必ずゲームをするんですが、ジェスチャーゲームを通してFさんからちょっとずつ手話を学んでいって、なんとなく手話っぽいジェスチャーができていたりとかしていましたね。土谷さんがおっしゃっていたように、触れ合うことで伝播していくっていうことがとても大切だなと思いました。

土谷 コロナで稽古に出れなかった本番に少し出られた後、演劇に出演できたことは満足していたんですか？

松本 そうですね。少しの時間でも立ててよかったっていうのはすごく言っていました。タブレットを利用して公演を観た知り合いの聴覚に障害のあるGさんが、自分もサポートがあるんだったら舞台上に立ってみたいっておっしゃっていて、Gさんと一緒に手話を使ったお芝居ができればいいなと言っていますし、出演するというよりは誰かが出演するのをサポートしたり字幕を提供したり、サポートする側もやってみたいとおっしゃっています。

土谷 すごいですね。するだけじゃなくて、支える側にも回りたいっていうのが。

それからさっき岡村さんが言ってた山上庄子さんからのご意見で、終わった後、お互いに批評とか振り返ったりできる場が欲しいっていうのも、別に障害あるなしに関わらず普通に欲しいですよ。

この間のWBCでも、負けたチームってさーっと帰っちゃうんですけど、ラグビーとかって試合が終わった後にアフターマッチファンクションってのがあって、勝ったチームも負けたチームも一緒にお茶とお菓子を食べながら、お互いのプレイについて語り合う場っていうのが伝統的にあるわけなんですよね。スポーツもやっぱりそういうアソシエーションを作っていくものだから、演劇においてもそうだと思いますし、舞台もそうだし、もちろん美術なんかでも、そういう場があってもいいのかも。オープニングパーティーとかはそうなのかもしんですけど、関わった人たちが一堂に会してお互いについて語り合うっていうのは重要ですね。なんか、積極的に作っていけるといいなと思いました。

——**来年度も引き続き、事例検討を通して課題を見つけて皆さんと一緒に解決していけたらなと思っています。ひとつの支援センターであったり、僕らでは解決できないことも、みんなで持ち寄れば解決できることもあるのかなと思っています。皆さん、ありがとうございました。**

その他の取り組み

中国・四国ブロック ブロック会議

①第1回ブロック会議(オンライン開催)
日時:令和4年6月17日(金)10:00~11:50
参加者:支援センター7名 行政職員4名

②第2回ブロック会議(オンライン開催)
日時:令和4年7月25日(月)13:30~15:00
参加者:支援センター4名 行政職員3名 厚生労働省職員2名

③第3回ブロック会議(オンライン開催)
日時:令和4年10月31日(月)10:00~11:50
参加者:支援センター4名 行政職員2名

④第4回ブロック会議(オンライン開催)
日時:令和5年3月7日(月)10:00~11:50
参加者:支援センター4名 行政職員2名



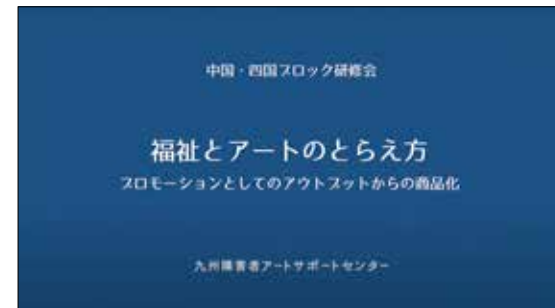
中国・四国ブロック ブロック研修会

①知的財産権について(オンライン開催)
日時:令和4年7月25日(月)10:00~11:50
講師:岡部 太郎 氏、大井 卓也 氏(たんぼぼの家)
参加者:支援センター2名 行政職員3名

②文化芸術支援の中での NFT の可能性について
(オンライン開催)
日時:令和4年10月31日(月)10:00~11:50
講師:高橋 裕行氏(多摩美術大学非常勤講師、キュレーター)
参加者:支援センター 3名



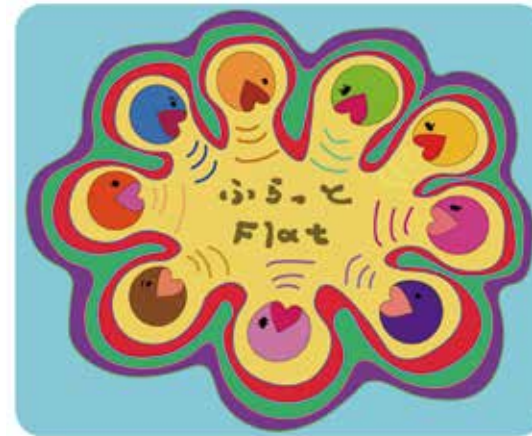
③アートで生計を立てたいという相談について考える
(オンライン開催)
日時:令和5年3月7日(月)13:00~14:30
講師:樋口 龍二氏(九州障害者アートサポートセンター)
松本志帆子氏(薬工ミュージアム)
参加者:支援センター4名 行政職員2名



ふらっと flat

中国・四国エリアはブロック内の県が多く(9県)、各県へのアクセスにも時間がかかることもあり、気軽にコミュニケーションをとるために Zoom によるオンラインミーティングを開催している。

第1回 ふらっと Flat:令和4年4月27日(水)
第2回 ふらっと Flat:令和4年11月29日(火)
第3回 ふらっと Flat:令和4年12月1日(木)



令和4年度 中国・四国広域支援センター 第三者評価委員会

開催日:令和5年3月30日(木)10:00~12:00
議題:①令和4年度の活動の紹介と振り返り
②令和5年度の計画と展望について



小遣いと駄菓子屋ともうひとつ

私が小学生の頃、友人たちがビックリマンシールを集めている時に、クラスで一人だけドキドキ学園シールなるものを集めていた。ビックリマンシールは当時大流行しており、当然、クラスの男子のほとんどがビックリマンシールを集めていた。私の中には、なぜかドキドキ学園シールの方が流行するという根拠のない自信と、みんなと一緒にじゃないことに対する軽い好奇心があり、ドキドキ学園シールの収集がはじまったと記憶している。シールを収集しながら、重複したシールを友達同士で交換し、コレクションを増やしていくことが楽しみのはずだったが、ドキドキ学園シールを集めているのは、クラスでは私一人だけだったので、ドキドキ学園シールの交換をして遊ぶ相手やシールに関する情報の共有をする相手はいなかった。そして、その楽しみが得られないことが原因で、ドキドキ学園シールに対する情熱が薄れていき、ついには収集を辞めてしまった。

令和4年度の中国・四国ブロックでは、障害当事者からの「アートで生計を立てていきたい」という相談に対してどのように協力していくべきなのかをブロック内でたくさん議論した。議論の中で、「画廊を教える」、「展覧会を教える」という意見や、「アーティスト活動で生計をたてるのは難しいけど、覚悟はありますか?」といったことを伝えるなど、一見、厳しいようにも感じる意見があがった。そして、ブロック内で導き出した回答は、“アートで生計を立てていきたいといった相談に対して明確な回答を返すことは難しい”ということだった。明確な回答こそ出せなかったが、このような相談を受ける支援センターの皆さんは、どのように協力したらいいのかを悩み、試行錯誤しながら相談者に伴走して

いる様子がやり取りの中から垣間見えた。その様子は、相談者に回答をすぐに伝えるのではなく、その回答を導きだすために必要な手段を探すことに伴走しているように感じた。

また、議論の中で、「創作活動に積極的に取り組んでいた方が何らかの理由で創作しなくなる」という事例に出会うことも少なくないという話があった。その要因のひとつが伴走者の存在ではないかと思う。障害当事者が相談するということは、必ずしも答えを欲しがっているのではなく、目標とすることに向かって一緒に伴走してくれるパートナーを探しているのではないかと思う。ドキドキ学園シールを買うための小遣い(資金)やドキドキ学園シールを購入する駄菓子屋(環境)があっても、その行為に一喜一憂してくれる仲間がいなければ、コレクションするという行為は続かない。

障害当事者が創作活動を辞めてしまう背景には、仲間の不在や伴走者の不在という要因があるのではないかと推測する。少々飛躍した考えを綴ったが、あの時、ドキドキ学園シールの収集を辞めてしまった自分と重ねてしまう。

中国・四国Arthrut Support Center passerelle
センター長

岡村 忠弘

厚生労働省 令和4年度障害者芸術文化活動普及支援事業

中国・四国ブロック 障害者芸術文化活動広域支援センター

『中国・四国 Artbrut Support Center passerelle』

センター長:岡村忠弘

芸術文化活動支援コーディネーター(障害福祉):平谷尚大

芸術文化活動支援コーディネーター(舞台、音楽):北添紫光

芸術文化活動支援コーディネーター(美術):土谷 享



令和4年度事業報告書『Passerelle Report』

発行:中国・四国 Artbrut Support Center passerelle

編集・デザイン:タケムラデザインアンドプランニング

イラスト:イワサトミキ

※写真は各執筆者提供によるもの

座談会「ファーストステップを通して」

編集:高橋さよ

座談会「ファーストステップを通して」

協力:田中競子、元木知恵子、寄貞美加、平井 恵、楠戸真由美、粟村友美、鷲野陽子、塚口博之

座談会「現場を巡る対談」

編集:平谷尚大

座談会「現場を巡る対談」

協力:宮本祥恵、高橋 修、涉 秀之、吉川純代、チャベズ・ピアンカ・アナ、保田香織、日向典子、松本志帆子、西木 正

協力:あいサポート・アートセンター、島根県障がい者文化芸術活動支援センターアートベースしまねいろ、

愛媛県障がい者アートサポートセンター、徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、

広島県アートサポートセンター、薫工ミュージアム分室、香川みんなのアート活動センターKAGAWAMOVES

発行:2023年3月31日

NPO法人脳損傷友の会高知青い空／中国・四国 Artbrut Support Center passerelle

住所:高知県高知市塩屋崎町2丁目12-42 2F

TEL:088-803-4100 FAX:088-803-4420

E-mail:passerelle@blue-sky-kochi.com

<https://asc-passerelle.com/>

